

艦これ&鋼鉄の咆哮
【防空戦艦夜雨】～夜空
の防人と狩人～

妖鷲夜雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主力クラスの軍艦がバカスカ生まれ、次々に鹵獲されるか沈む世界。そんな世界で国の威厳と世界の平和のために生まれた異端児 夜雨。しかし、姉と衝突して気絶。飛ばされた世界はナニコレ艦これ?!

ーここから下はこの作品の注意と作者の心の声となりますー

【女の子が主人公】です。要注意

艦これ(PC・AC・VITA・TRPG等)メイン。鋼鉄はオマケ(大嘘)

【ガールズloveタグは保険】レズ化はしません。百合で止ま(め)る。

【半アルペジオ方式】本体でも艦装でも戦える状態です。

【イベント海域は異常】色々おかしいです。

【処女作クオリティ】人には必ず初めてが(ry

【鋼鉄の咆哮が艦これの世界に殴り込み】鋼鉄コレ：

【主人公チートはありません】

【鋼鉄の咆哮勢が異常】【妖精も異常】ついでに主人公補正も異常

【鋼鉄脳筋プレイの作者】弾幕を張って処理落ちさせれば撃たれないの術。

【他ゲーム、他アニメ、実況ネタ等】

ジパング、エスコン、紺碧／旭川の艦隊、アルペジオ、エリア88、WOWS、WT
空陸海、ゲート自衛隊、提督の決断等の要素が混入しています。

【軍艦、航空機物以外も出ます】【予定Ⅱ未定】この二つ超重要。

【魔改造】【浪漫砲】【独創的な科学技術】【魔法のシステム】【微☆理系ホイホイ】【リア
リストイック?】【どうしてこうなった】耐性は必須技能です。これがないと始まらない
艦これとはいかに。

【作者文才皆無かつ投稿後に誤字脱字や加筆修正が入ります】作者は誤字神です。仕方
ないね。

【他作者様の小説を読みながら考えるネタや話の流れ等】

オリジナルネタがパクリではないことの確認とかそのへんも含めて良いネタは吸い取ります。

艦これ本家ゲーム以外、例えば艦これRPG、二次創作ネタ等も入ります

なんでや！艦これ関係ないやろ！とかいうネタも入ります。（誰が言ったか2―4―11。なんでや那珂ちゃん関係無いやろ！）

【2N、2番煎じ注意】

【作者はスーパー自己中心的でマイペースかつ適当で抜けてます】

極力原作知らない方の置いてきぼりプレイはしないように、不定期更新ですが失踪はしないように、なるたけわかりやすく、を心がけます。

【投稿ペースは気まぐれ】です。悪しからず。

以上のことが無理という方はスタイリッシュにダイナミックブラウザバックを決めてください

外部投稿はしておりません。

後半になるにつれてクオリティが上がっていきます。

目次

設定、その他

0 | 0 | A | 主人公達の設定 & 作者からのお願い | 1

0 | 0 | B | 対空兵装のアレコレ | 対空兵装指南書 | 22

番外編

EX | 1 | 番外、没ネタ「曙が走り去ったアフター」 | 29

本編

0 | 1 | 始まりの時 | 36

0 | 2 | 始まりの日、夜明けと目覚

め | 46

0 | 3 | 始まりと導きの船 | 60

0 | 4 | A | 始まりの島、導かれた鷹と鷲 | 79

0 | 4 | B | 羽根休め、これからの家 | 105

0 | 5 | A | バーチャル デモファイト | 122

0 | 5 | B | 電子の海、0と1の世界 | 130

0 | 6 | 日時の壱時、荒ぶる狩人と防人 | 154

0 | 7 | A | 好敵手、大和 | 160

設定、その他

0-0-A~主人公達の設定&作者からのお願い~

●主人公設定●

春雨型榴弾戦艦 2番艦【夜雨】

六花型戦艦の改良後継艦として作られた春雨の改良型

扶桑型（春雨）と伊勢型（夜雨）みたいなイメージでOK

六花型戦艦「さくら」

改六花型戦艦「みずほ」「みらい」

葛城型榴弾戦艦「葛城」
かつらぎ

日出型試製光学戦艦「ひので」

春雨型防空戦艦「春雨」
はるさめ

「夜雨」
よるさめ

この7隻の戦艦で【日の丸艦隊】と呼ばれる。

戦艦長門のビッグ7的なアレ（夜雨は自覚無し）

ひので↓
???

金剛型↓長門型↓大和型↓改大和型(図面)↓

扶桑型↓伊勢型↓改伊勢型航空↓春雨型

六花型↓改六花型↓葛城

チャートの的にはこんな感じ

【艦長／艦娘としての見た目】

黒髪、ハーフポニーテールorポニーテール

下ろせば腰ぐらいの長さで割と触り心地は良い方。寝癖は暴発

173cm/??kg わりと慎ましやか(控えめ)

眼鏡を掛けている(戦闘時には必ずかける。)※ちなみに平時は伊達メガネ

白露型に似た服を着ているが、ラインの色は赤ではなく水色 スカートの膝下ぐらい。少し長め

七分袖、指先だけ出てるタイプのグローブ?手袋?を着用

リボン?はライトグリーン

髪留めは伊19の奴と似ている。ただし色違い

黒ニーソ。たまに上着替わりにローブ等を着てたりします

☆武装

兵装1 35.6cm75口径電磁火薬誘導連装榴弾砲×4基 9280発

→

兵装2 αレーザーIII型連装砲 ×2 1740発→

兵装3 280mm三連装AGS ×4 34800発→

兵装4 多目的ミサイル×16基 合計2969発→即発射可能弾計4×4

×16発

兵装5 対空ミサイルVLSⅢ×15基 合計2784発 即発射可能弾計

256発+16発

兵装6 127mm75口径連装高角速射砲×13基 99,999発→

兵装7 35mmCIWS【シーファランクス(シーアベンジャー)】×12 9

9,999発→

搭載ユニット1000個/1000個

☆速力

推進装置ありで91.5 knot、瞬間最高速124 knot前後
 推進装置なしなら31knot程度。

巡航速度 艦長の気分と随伴艦次第。

☆防御 対46cm完全VP：75%

重量 77,752/80,000t

耐久3500

前艦橋 日本前艦橋σ

後艦橋 日本後艦橋γ

探照灯 4基

指揮値 120+

水上索敵 27+

水中索敵 6+

弾薬庫 大型弾薬庫×12

【足回り】

主缶：核融合原子炉4型×8

補助機：ガスタービン発電機×2（※推進用ではなく発電用）

主機：国産標準タービン【ε型】×4

シフト配置

推進軸4機（アルペジオの推進機的なアレがイメージです）＋可変ピッチ式スクリー×4（30～35knot以上で格納される）

偽装煙突1（ヘリウムガス排出用とか排熱用とか多目的に使われる）

核融合ターボエレクトリック方式。電気戦艦が代名詞になるか？

（核融合炉と超兵器機関は別物）

【補助兵装】

- ・ 試作型無限装填装置
- ・ システム制御装置ε（＝謎の装置と）
- ・ 超重力電磁防衛
- ・ 自動迎撃システムⅢ
- ・ 高速装填装置γ（＝自動装填装置γ）
- ・ 推進／舵制御装置κ（＝謎の装置κ）
- ・ 高速推進装置Ⅱ（＝謎の推進装置Ⅱ）

※電探、音探、電探連動射撃装置、ECCM、ECMは最高位の物を標準搭載。本家ゲームシステムの自動兵装では息のしないイージスシステムは非搭載。その代わりにマルチロックオンシステムモドキを積んでいます。

↳索敵用／戦闘用リーダー他の波長↳
 赤外線／KCSXバンド（カシックスバンドーKバンド，Cバンド，sバンド，Xバンドの4バンド複合）／長波&中波（航空無線等）／センチ波（艦内高速無線）

【総合評価】

攻撃C ↑大嘘。 転移前世界の火力インフレ…

対空A ↑実質A+かS+…

防御B ↑大嘘。 転移前世界の火力インフレ…

対応A ↑妥当

指揮索敵C ↑転移先なら破格レベル。 転移前世界が（ry

機動力A ↑妥当

総合評価A ↑フアツ?!

乗員 大体2000〜2500名ぐらい。 半分強が陸戦隊とエンジニアかその他部隊を兼ねている。

大抵の乗組員が

変態的発想
 英国面

変態的技術
独国面

変態的量産性
米国面

変態的改良&小型軽量化

日本面

変態的技術合成

露国面

変態的デザイン性

伊国面

変態的合理性

仏国面

のどれかで表現できる。

【艦内装】

大和型には劣るもののがかなり豪華。多分中の上ぐらいに入ると思われる。

冷暖房はもちろん完備。

お風呂はこだわりのヒノキ風呂。部屋は二人部屋 or 一人部屋 or 4人部屋だが
シャワールーム、和室、ベッド等は完備。

食堂と簡易的な娯楽室もあり、防音対策もかなりしっかりしている

「艦娘としての艦装」

大和型より1回り大きいぐらいのサイズで背負うタイプの艦装。

右手付近にタブレット（空中投影型）メガネは多目的に使われる

後ろ左右にVLSポート、その付近に高角速射砲、CIWSなどがある

左右横に35・6cm砲とαレーザー砲がある。結構重い。脚周りは動きやすいように高角速射砲とCIWSが左右に各2個ずつ。手持ち武器はとある対戦車ライフルに似たモノ。

【艦載機】

☆試製神電Ⅱ『ナイトメア』【双発単座戦闘攻撃機】：7世代候補
武装

- ・ 小型パルスレーザー×2（機首より配置、エネルギーが供給される限り無限）
 - ・ 翼下パイロン×4
 - ・ 胴体下パイロン×2
 - ・ 機体内格納個×2（小型の爆弾／ミサイル 16発×（格納庫2個））
- 垂直／短距離離着陸機【V／STOL機】（Vertical／Short Take Off and Landing）です。
- ・ 最速マッハ5程度。

航続距離：理論上無限。パイロットに左右される。

青緑色と蒼色の美しい機体。エスコンの前進翼のとある機体に似ているが、垂直尾翼

が外向きに傾いている、エンジンノズルの形が違う、推進機は横並びなど、数多くの相違がある。

☆桜花改『オブジェクト』【3発単座迎撃戦闘機】※厳密には主噴進発動機×1 副推進噴進機×2

5世代機

武装

・57mm機関砲×1 (機種上) 850発、

・20mm機関砲×2 (機首下左右) 1045発、

・胴体下パイロン×1

【竜神】エンジン(ターボタービンファン過給器エンジン※ターボファンエンジンの改良型、アフターバーナー付き) ×1

副噴進エンジン×2 (副噴進機構/リフトファン用。命名不明)

最高速マッハ2程度。発艦時はヘリポート脇の発射台を使う。着艦は垂直着陸。

一応垂直/短距離離着陸機(V/STOL機、Vertical/Short Take

Off and Landing)

量産艦載型迎撃戦闘機。幻の計画機、震電を噴進化して大型にした蒼雷の発展型。

☆深淵『アビス』（大山航空ヘリ社製）×1〔攻撃ヘリ〕

・20mm六砲身ドアチエーンガン×2ドア左右

・ミサイル携行台×左右計4（小型ミサイルは各4発なので16発、大型ミサイルは二台で1つなので計2発）

・機首下20mm6砲身チエーンガトリングガン×1（3000発）

・40mm榴弾投射装置×2、左右合計60発

最高速524km/h、巡航航続距離2400km（増槽込）以上

【彩竜】エンジン（タービンプロップエンジン。ターボプロップエンジンの改良版）

アパッチLBの拡大発展型。艦載用の装備は必要最低限しかないが熟練の操縦手の腕でカバー

【搭載車両等】

・産廃戦車（笑）

魔改造されるゾ…。

・零式試作高機動重戦車

→の魔改造された姿。

・五式装甲戦闘車

八輪型の装甲戦闘車。砲塔の57mm機関砲と対戦車ミサイル、そして車上の12.7mm機銃を兵装とする。

・30mm機動対空車両 【防風Ⅲ乙】

30mm機関砲×4門のヴィルベルヴィント的な奴。ただ、バレル弾倉とベルト給弾対応なので高出力弾幕を走りながら展開できる。

・兵員輸送装甲車両

文字通りそのまま。説明はこれと違ってない。搭載可能人数は12名+運転手1+銃手1

【名前持ち搭乗員】

大空風沙 神電Ⅱのパイロット

夜雨と同一年。こげ茶色の黒髪で飛行服を着ているかタンクトップが多い。
運動神経がよく、ため語マン。

中の人が凧紗と漢字を書いているときと凧沙と書いているときがある。
本人曰くどちらでもいいらしい。

(メタい話、simejiに誤学習させてしまったorz)

愛称は凧。

【?・谷龍奈】

機械関連や修理、改良等の班長。黒い髪の毛が隼鷹おごとく常時暴発している。(※
きちつと手入れすればかなりの美人さん)

お酒が飲める歳。アレが絶壁なのを気にしてる。

所持している愛銃はニコラ・テスラのコイルの原理を元に作られた試作銃。モデルは
なんとたらオーダー。(※FGOじゃないです。)

【山下鈴奈】

神電II専属メカニック

極度の人見知り&人間不信(特に男性は顕著)

ムチムチボディ。髪型は浜風と似ている。色は黒

辛いものが大好き。いろいろ裏設定あり

鈴木（妖精）

脳筋メカニック。愛称はズッキー。航空機種兵装主義論者。妖精化しているが変態度数は悪化している。凧紗の同期

典型的なオタク。メカフェチ、アニオタ、用もないのに持ち歩くパソコン、オーバースペックのカメラ、ある意味特殊なファッション（作業服Ⅱ私服）：

?????????

【名前持ち提督】

姉提督 水雷屋。水雷戦隊だけで大体の海域がクリアできる。

弟提督 対艦巨砲マン。

琴音提督 秘書官および結婚艦の武蔵が相棒でサバゲーと車が大好きなエロくない変態。大抵の乗り物の免許と資格はそろっている。

梓提督 変態エロゲーマー。駆逐艦などのロリをprprprするためちよつと本

気を出したらランカーに入ってしまった。最近は新兵器開発などに本気を出しているらしいが…？

弥嶺提督 響のために本気を出し過ぎたイベント特化の変態。ロシア方面等の北方担当。

イツサケンタ提督 世界を股に掛ける変態。外交術の塊のため、海外艦はそろっている。

あひひな提督 中途半端な脳筋。器用貧乏。

提督

提督

☆用語説明☆

兵装関連

電磁火薬誘導連装榴弾砲

- ・長射程で高速砲弾を投射できる【ハイパワーレールガンランチャー】

- ・超重量物投射が出来る【通常火薬榴弾砲】

- ・導体をプラズマ化させて火薬砲以上の高初期加速を得られるが扱いの難しい【サーマルカノン】

この3タイプ複合砲。火薬砲だけ、レールガンだけ、サーマルカノンだけ、組み合わせ射撃なんていう荒業もできる。

計画段階ではαレーザーと互換性があつた。しかし今は無い。

αレーザーⅢ型連装砲

35・6cm／75口径。対潜攻撃が可能な高出力光線を放つ。夜雨はレーザー光線を4本ではなく2本しか撃てない

AGS (Advanced Gun System)。

長射程の誘導砲弾を連続発射できる小型砲

ゲームでは対空砲撃が出来ないが、リアリステック補正で射程延長と対空射撃が可能

ちなみに某国の護衛艦には76mmのAGSモドキが積まれる計画があるとか無いとか

高角速射砲

速射砲と高角砲を足して二で割った無人砲塔を持つ砲。連装型が多い。何故か地形無視の攻撃ができる謎仕様。某氏曰く「産廃」らしい。

C l w s

別名【高性能多砲身機関砲】みんな大好きフアランクスなどの総称

【艦船を目標とするミサイルや航空機、魚雷艇などを至近距離で迎撃する艦載兵器の『総称』】なので

『何を使っても至近距離でミサイルや航空機、魚雷艇等を迎撃できる兵器であれば何だって大丈夫！』と、解釈した。

タングステン製の装弾筒付徹甲弾／高性能炸裂弾／焼夷榴弾／高貫通高速徹甲弾／対水中用弾（魚雷迎撃用）などの砲弾を分間3, 000〜4, 000発ぐらい放つ。

※高貫通高速徹甲弾は距離約2〜3 kmで約100 mの垂直装甲を貫通する

【ミサイル関連】

・繚乱2型 対空対艦用の物理ミサイル。運動エネルギーをそのまま攻撃に使うタイプ。割と大型なので小回りが利かないのが難点。超音速で飛翔するので迎撃は困難

・63式 対空対艦対地攻撃用のミサイル。超射程だが、小回りが利かないのが難

点

こいつも超音速で飛翔する。

・ロサ弾 対空範囲攻撃用のロケット焼夷散弾。厳密にはミサイルではないが、VL Sポートに積めたから積んだつた

・信号弾 炎色反応を使った発光型と化学反応を使った発煙型がある。積めたから積ん (ry

・照明弾 周りを明るく照らす。基本的に使い道がない。

積めたから (ry

・ASROC—C (タイプC) みんな大好きASROC。正規版は対空対艦用にも無理やり使えるチート仕様。

・スタンダードミサイル：中距離小型の精密誘導式誘導ミサイル。一度に4発しか誘導できない

・シースパロー：近距離自艦防衛用ミサイルの決定版と言っても過言ではない。空対空や地对空でも派生系が活躍している。

・シーアロー【海矢】：中距離撃ちっぱなしのミサイル。シースパローとスタンダードのいいところ取りをした純和製対空ミサイル。驚異的なチャフ／フレアへの耐性を持つ

【超重力電磁防御システム】

超重力電磁防御システムの色は薄い青紫色（最高稼働効率時は虹色に輝く無色）

輪切り図

↑外側

船側↓

一重力の壁1—外向き重力領域—重力の壁2—船

・壁1で弾速を殺し、外向き重力領域で砲弾を急減速、炸裂させ、壁2で爆風を無効化する

・無意味な電磁波をばら撒きレーダーをホワイトアウトさせる

・光学兵器のエネルギー運動の自由を阻害し、威力減衰をかける

・大量の排熱により外向き重力領域の水蒸気濃度を上げて雨上がりに出来る虹の要領で反射、拡散させる

等

重装甲1層集中展開モード（61cm砲程度なら軽く弾く程の硬さを誇る）や多重領域装甲展開（またの名を複数層展開モード）等の本気限定、変則仕様あり。

【艦載機関連】

神電Ⅱ関連

・試和2型改エンジン（光重力子エンジン）

重力子（グラビトン）と光子（フォトン）を超高密度圧縮して大気中の窒素と混合しナニヤカンヤすると空間の大きな歪みが発生する。それが元の状態に戻ろうとする時、大量のエネルギーが発生する。そのエネルギーを熱エネルギーと運動エネルギーと電気エネルギーに変換し、動くタイプのエンジン。

意図的に付近の空間や重力を歪ませることによって擬似障壁的な領域壁を作ること
も可能。これによってマツハ3以上の超音速飛行ができる。

吸気口からは冷却用の空気を吸い込み排気ノズルとリフトファンダクトから排気する。
要は空冷式。

エンジンは鈴奈を除いて完全にブラックボックス状態。

二酸化炭素や窒素酸化物はもちろんのこと核融合、原子力みたいに放射線や有害物質を出さない。

空気との摩擦抵抗で超高温になるため、超硬ジュラルミンや炭素強化繊維に加えタン
グステンやチタン、イリジウム、ルエニウム合金などのレアメタルを使っている。

衝撃波と熱は共に大部分が擬似障壁でシャットアウトされてる。

・10トン徹甲爆弾〔ガイアクエイク〕

地中貫通爆弾（バンカーバスター、グランドスラム、トールボーイ等）の対艦版。

なお弾頭は成形炸薬弾もしくは特殊炸薬の模様。

・桜爆弾

成形炸薬弾頭の爆弾。わかりやすく言うならどでかいパンツァーファウスト（pix
iv 辞典より引用）。

・対地爆弾〔風雷〕

対地对滑走路用クラスター爆弾。

桜花改『オブジェクト』関連

・
・
・
深淵関連

•

0—0—B 対空兵装のアレコレ〜対空兵装指南書〜

〔7. 7mm〜40mmの機銃シリーズ〕

40mm以外は真面目に産廃認識です。

40mm単装4基〜40mm4連装1基という扱いになります。

夜雨ちゃんはClws派ですが、龍奈ちゃんは機銃派です。

〔20mm〜35mmのClwsシリーズ〕

高性能機関砲（自称）ですが、見た目と頭がでかいのでスペースを取ります（機銃よりは気持ちマシ程度。こっちは上にもしつかりと向く。）

35〜30〜25〜20 で威力は上がりますが精度は気持ち程度しか変わりません。

10基程度積めば大抵大丈夫のはず（リアル世界のイージス艦5隻分……）

〔タダの高角砲〕※夜雨には積んでいません

文字通り産廃。積むだけ無駄です。発射速度、命中精度は極めて劣悪です。さらに相手が固くなれば固くなるほど悪化して行きます。裏を返せば柔らかか航空機にミサイル

使う必要ねーじゃんって時には重宝します。

トリガー引きっぱなしでも近接信管かつ地形貫通がせめてもの救いですね。

【連装速射高角砲】※夜雨搭載のやつです。

上の高角砲を改良した無人砲塔。ぶっちゃけ、速射砲と高角砲を足していいところ取りをした感じですね。

砲塔旋回速度、命中精度、発射速度、射程、全てにおいてそこそこ良好です。

【小型／中型バルカン砲】

40mmバルカン／57mmバルカン／88mm連装バルカン

この三つを指します。

57mmと88mm、特にアハトアハト(88mmの方)は凶悪というか、壊れ性能。短いが射程圏内に入ればAGSには劣るものの高い時間火力をたたき出します。

砲塔旋回速度はやや遅いものの、実用圏内で副砲変わりにもなります。

対空／対艦砲(機関砲?)としては二週目以降やハードモードでも壊れ性能は健在。

【大口径バルカン砲】

上記三つ以外のバルカン砲を指します。

88mmに速攻積み替えてください。

以上。

【速射砲】

砲弾が炸裂せず、直撃のみの判定になっております。

命中精度、射程もかなり微妙です。

炸裂してくれば88mmや夜雨の連装速射高角砲を超え、壊れ性能になりますけど
ねw

【対空パルスレーザー】

キター!!対空兵装の決定版!!

と言うと思いましたが??残念ながらWSG2Pでは照準プログラムに難題あり。エイム精度はガバガバです。(※各自でプログラムをうち直せば十分使えます)

さらに砲弾（光線？）のブレは極めて少ないのでガバガバエイムのまま撃つことになります。対艦、対地攻撃の方が有効という対空兵装なのかお前は?!という兵器です。対空用として載せるなら他のを載せた方が良いかも：（※各自でプログラムをうみ直すなら十分使えます）

【小型砲類】

10cm～15.5cmの砲類です。

上記に比べると割と大型で砲塔旋回速度は遅いものの、有効射程は割と長い方で命中精度と威力は割と上の方。

しかし、上にはあまり向かないので死角に入り込まれる前に撃ち落としたい。

対艦、対空両用砲としてかなり優秀。設置（装備？）面積がかなり広いので背負式（だったかな？）に配置する等の考慮は必要か。

【中型／大型砲類】

20.3cm以上の砲のことを指します。

当たれば航空機はワンパン。当てるのが難題。運任せですね。

射程は長いもののブレが大きく連射の効かない部類。数を撃てばそこそこ当たる。

※夜雨は主人公補正によってかなりの確率（最大射程98%程度）という極めてぶつ飛んだ命中精度を誇ります。

【ミサイル類】

全てにおいて言えることですが、

1目標に対して1発しか撃ってくれません。

当たるか外れるかしないと次を撃ってくれないという事ですね。

重要なのは弾速、火力、命中精度 この三つになるかと思えます。

・対空ミサイル発射機

サイズが大きく大量に載せられず、射程は対空ミサイルVLSより短い。

しかし、弾速、装填速度が早い。割と無駄が少ないため、効率論だけで言うところピカイチ。

・対空ミサイルVLS

装填数は少なめだが長射程かつ小型なので数を積んで対応する感じになる。弾速はやや遅いがあまり気にならない程度。バランスが良い。

・RAM

射程が短く、攻撃力は低い。弾速が早く、命中させやすい。が、上記の仕様に最弱クラスとなる。

対空ミサイル+RAMといった運用じゃないと産廃化する。

まだ運用方法があるだけ救いですね。

・多目的ミサイル発射機／多目的ミサイルVLS

攻撃力が低い、弾速が遅く命中性に難あり。対ジェット機戦にはほぼ効果は無いが、対潜、対艦といったマルチ運用が可能。

そこを生かした運用方法で使ってあげてください。

【対空噴進弾】

対空糞進弾。今すぐそいつを下ろして他のを載せる状態。精密射撃モードで当てた方、います？

ほぼ横付けで外した私は一体……

【生物兵器】

・ネコビーム／ニャンコビーム

面制圧兵器、高威力、高連射力、そこそこ射程、対艦、対空両用兵器。

ただし、プレイヤーが操作するか自動総監視機が無いと進化を發揮しないという難点あり。思考停止でボタン連打すると一掃してくれます。多分。

番外編

EX-1 番外、没ネタ【曙が走り去ったアフター】

曙 side

全力で走る。追いつかれないようにするため。それ以上に泣いている顔が見られたくないし、恥ずかしい。

というか、何であんなクソ待遇なのに納得してるわけ。

ホント意味わかんない。というか、私がなんでこんなに心配してるわけ。

とりあえずここなら大丈夫かな。

内開きの工場の中に入り扉を閉めもたれかかり、鍵をかけ、脚の力を抜いて座る。

「曙ちゃん、どうしたの？」

「曙ちゃん？」

「曙ちゃん？」

潮に追われてたみたいですぐに居場所がバレる。

「というか、浜風、春雨、なんでお前まで来てるの。」

「なんで付いてくるのよ！付いてくんない！」

「嫌です（はい）」

「どうしてこうなったし。」

「2時間後」

「あれ、潮ちゃんに浜風ちゃんちおね……ゴホゴホ春雨ちゃん、こんなところでどうしたの？」

「扉の向こうで夜雨の音が聞こえる。というかあんた何でここにいるのよ。」

「あ、夜雨さん。えと、曙ちゃんが拗ねちゃって困ってるの」

「ご飯も食べにこないから心配なのです。はい」

「あらら。とりあえず、この扉の向こうかな？」

「はい、そうです」

「とりあえず、この扉を開けて話を聞きますか。よいしょっ」

しかし、内側から鍵をかけて私をもたれかかっているので扉は開かない。

「あれ、開かない。んじゃー、こうかな？」

パキン　パキン

軽い音がして扉の蝶番と鍵が物理的に外されて扉が意味をなさない状態になる。

一体どういう特技よそれ。反則じゃない。

その場にいた4人が4人とも同じ思考になる。

「そーれっ」

上手い具合に扉を抜いて壁に立てかける。

「アンタ棟梁の方が向いてそうね」

「さあね。それより曙ちゃん、どうしたのさ。なに拗ねてるの？」

容赦無く夜雨が問を投げる。

「す、拗ねてないわよ。て、な、な、何覗いてんのよクソ提と…違った…つ夜雨！何であんなそこにいるのよ！どうやってこの扉を開けたし！というか、こっちは見んな！」

ほっといてよ。ほんとに。

「曙ちゃん？ほんとにどしたのさ。そう言えばお昼の時逃げ出してたみたいだけど。あ、扉は物理的に外しただけで…」

3人ともそんな顔して顔のぞきこまないで…。

「べ、別に何でもないよ」

「ははーん。春雨が見つかって嬉しかったのね」

「ち、ち、ち違っ！」

ドンピシャの正解を浜風に出されて慌てる私。

「あと私の待遇を心配してくれてありがとう。あの待遇には別に気にしてないよ」

夜雨にも考えていることのドンピシャの正解を出される

「そ、それも、ち、ちがっ……」

「私の心配してくれてありがとうです。でも、私はちゃんと約束通りに帰ってきましたよ？見た目は少しかかりましたけど、中は一緒です。はい♪」

「私は強くなってもどこにも行きませんよ？」

潮、春雨にもドンピシャの正解を……って、私そんなにわかりやすいの?!

「な、な、なんでそう…」

突然視界がゆがむ。目元をゴシゴシしても次から次から熱いものが流れ落ちる。

「え、ちよ、なんで泣いてるのさ」

「な、な、な、泣いてなんか……………ない……………し……………」

4人から優しく抱きしめられる。夜雨の、潮の、浜風の、春雨の暖かさからか、涙が止まらない。

「離し……………て……………グスツ」

この暖かさが癖になるから……………癖になったらダメだから……………

「泣きやむまで抱きしめてあげる（ます）（ます。はい）」

4人の声がびったり重なる。

……………意地悪。バカ。離して。でも声が出ない。

出そうとして口を開けても出てくるのは嗚咽。嗚咽。

振り払おうとしても四人の力には勝てずももぞもぞ動けるだけ。もうわけわかんない。頭をわしゃわしゃ撫でられたり潮と浜風の胸に半ば強引に顔を押し付けさせられた

りしなからひとしきり泣いた後、少し気になったことを聞いてみた。

「あんたはほんとにあの待遇で納得してるわけ？」

「うん。最悪武装解除からの技術を奪って解体よりはマシよ。それにスパイ容疑もすぐ晴れる」

「何でそんなことわかるのよ」

「深海棲艦が持つてない技術を持つてるからと深海棲艦を沈めてるから。かな？」

なんとという適当な理由。

でもあんたが言う謎に納得してしまうわね。ほんと調子狂うわ。

「ところで、夜雨ちゃんはクソ提督の艦隊と一人で戦うつもり？もし良かったら……」
「勿論。た　っ　た　アレだけの戦力なら私一人で十分ですよ」

予想外の爆弾発言に曙、潮、浜風がふたたび凍り付いた。

春雨はさも当然のように納得顔の模様。

相手は弟提督の最強の切り札と呼ばれる高練度の戦艦隊であり、第二水雷連合戦隊は姉提督の誇る向かうところ敵なしの艦隊である。

それを　た　っ　た　それだけの戦力と言いきってしまったのである。

「まずは、艦隊の編成の問題よ。二水戦は航空攻撃が出来ない。索敵機を蹴落とせば何も出来ないまま蹂躞は可能。空母陣は艦載機落とせばタダの的だし。戦艦隊は正空有利の下でしか実力を発揮できないからね」

「あんたいつぺんに来たらどうするのよ」

「脚を活かして分断、各個撃破するだけよ」

クソ提督の鎮守府連合艦隊の意地とプライドを真つ向からへし折りにきている。コイツただもんじゃないわね。

「戦艦の天敵、潜水艦隊は絶対に出ると思うわ。まあ、せいぜい気をつけることね」

「曙ちゃん。ありがと♪」

「耳元で囁くなこのバカ！もう離して！それと明日はせいぜい頑張りなさいよ!!」

「そして……ありがと……／＼／＼／＼／＼」

湯気が出るかのように熱くなった顔と心臓がはね回るのを必死に抑えながら私は工廠兼簡易風呂の扉を激しく閉めた。

その後跳ね回る心臓をなだめるのに苦労したのは別の話

本編

0—1　　〈始まりの時〉

「艦長、まもなく演習開始時間です。そしてUS連合艦隊からの電文と、演習海域の海図です。」

「ありがと。えーっと、海図分厚くない？」

「そりゃ、海域がかなり広いですから。しかし、この船を演習に引っ張り出すとは軍も使い方が荒いですね。」

「副長さん、そんな事言わないでくださいよ。他に参加できる船が無いんですから。」

たしか、それで国民から参加を反対されてたんだよね。

ちなみに、春雨型防空戦艦、2番艦の夜雨の艦長の私は17歳女性。戦争で男の人が少ないから、という理由ではなく私の才能が海軍と空軍と陸軍の長官3名に認められ、

直々の推薦を貰ってしまったからだ。

一応、私よりも適任な方々が沢山いるので丁重にお断りしたのだが私が女性であるからかは知らないが、その発表があつた次の日から周りの一部の男は陰湿な嫌がらせなどをするようになった。

それが鬱陶しかつたので、机上海軍演習と実技空軍演習でそんな人達を片っ端からコテンパンにしてしまったのだが、その報告を聞いて陸海空軍長官は私を強く推薦したんだっけ。

まあ、結果として夜雨の艦長になった。私じゃなくても適任者がいただろうに。

「艦長。気象観測班からの報告です。演習海域は大部分が晴れで、エリア南東のみ嵐です。波少し高めの模様。西風が吹いているものの影響はありません。」

「副長さんありがと。航空管理長さんと航空隊員。そして砲術長さんを選んできて。料理班には戦闘時の揺れやに備えて料理器具の収納、固定の指示をお願い。」

「了解。」

パタパタと扉から出ていく副長。ところで副長さん、内線使わないの？とか考えていたら、航空隊員と整備をしていたのかとところどころ油のついてる作業服を着た航空管理長さんが来た。手にスパナを持っている。

「かんちよー、お呼びっすか。」

「航空管理長、また言葉がナマってますよ。」

「なまってねっすよ。いつもこれっすからw」

いや、ナマってるよ…。方言ではないと思う独特の喋り方の優しいけど厳しい航空機の番人と呼ばれる航空管理長さん。

「申し訳ない、遅れました。」

砲術長が慌てて駆け込んでくる。電車だったら駆け込み乗車は大変危険ですのでおやめ下さいと言われるレベルだろうか。

「はい、全員揃いましたね。では、軽めの作戦会議を始めます。大本営からは……………」

……………ということです。つまり、我々は艦隊ではなく、単艦で前に出て航空機およびミサイル攻撃を吸収および無効化する作戦ですね。」

「納得いかねーっすよ。なぜ我々だけ単艦で突っ込まなければならんっすか。」

航空管理長が地団駄を踏む。どこまでも真っ直ぐで自分を曲げない、そんな航空管理

長らしい意見だが、いつもどこか抜けている。そう、今回もだ。

「航空管理長、ここが重要な点よ。よく見て。」

私が指差したところに書かれていたのは

《独自の判断での行動、計画書の無視、破棄は可とする。そのかわり僚艦だけには最低でも通達はすること。》

こう書かれている。

つまり…

「要は最初つから無視してやるわよ、こんな作戦。」

「やっぱり艦長ならそうしますよね。」

副長、私の心を先読みしないで怖いから。

そして、唾然とする航空管理長、航空隊員、砲術長他CICに居る私と副長以外。

紙に書いてある作戦は誰がどう見ても抜け穴だらけで、理不尽で、もつといい作戦がいくらでも浮かぶような脳筋パツパラパーな特攻作戦と言っても過言ではないレベルの作戦だった。

だからこそ…

「異議は？」

「「ありません！」」

満場一致の作戦破棄決定が出る。内容が内容だったから仕方ないね。

「よろしい。なら、通信手、僚艦に通達。内容は《こんなパツパラパーな作戦案はハナツから無視してやる。》以上です。」

とか言いつつ大本営からの作戦が書かれた紙を丸めて投げ捨てた。

.....

「敵航空機軍A〜C郡、まもなく射程圏内です！」

我々は大祥型護衛空母3隻を防空輪形陣の中心とし、最外縁部に対潜ヘリと潜水艦と、その内側にイージス艦を、護衛空母正面に榴弾戦艦葛城、後方左右に春雨型防空戦艦といった陣形だ。私は右方にいる。

どこかの圧倒的物量にものを言わせた防空輪形陣を使う国曰く、我が国よりもずっと堅固らしい。が、レーダーに補足された航空機は外縁のイージス艦をレーダーピケット艦としての空母艦載機による斬滅攻撃を抜けてきた航空機だ。

相当な技量があるに違いない。

「艦隊対空戦闘よーい！旗艦葛城より目標指示！！右舷の目標A群に主砲を。弾種特殊気化砲弾！2番3番装填終わり次第逐次砲撃！射程に入り次第シーアロー！それを抜けてきたら127mmで叩き落として！正面上空重爆撃機群B群には1番と桜花改2機を！神電IIは上空で待機してて！取り舵5！」

大量の煙を吐いて放たれるシーアロー。それを吹き飛ばすかのように放たれる127mm砲弾と主砲弾。眩い閃光を放つレーザー。

CICから次々に目標指示と各武装の役割を与えていく。意外と頭を使うんだよな、これ。

「砲術長！「A群32機全機撃墜判定!!」

「報告遅れてるわよ！シースパロー、シーアローはA群の残り6機に！発射!!」

「了解、てえー!!」

煙に包まれる。そしてまた吹き飛ばすかのように放たれる主砲。

「航空管理長！どうなってるの？」

「C群交戦中っス！現状3機撃墜判定っス」

『新たな目標 右前から接近中のミサイル 数43!』

「ロサ弾と右舷CIWSで対応！至近弾は超重力防御！」

「了解、CIWS自動迎撃！ロサ弾、てえー!!」

A-110に積まれてるアベンジャー機関砲よりも大きな砲弾が爆音とともに超音速で飛んでいく。

そしてミサイルの手前で攪乱の羽（チャフ+フレア）の花がミサイルの前で開く。

ロサ弾とは、焼夷散弾散布ロケット（高温のマグネシウムと酸化鉄とアルミ複合粉末をばら撒く多連装ロケット）の事である。

酸化鉄、アルミ粉末のテルミット反応を利用した簡易和製チャフ+フレアディスプレイもどき、と言うべきか。

この時代のミサイルはレーダー、赤外線+アクティブレーダー複合誘導装置で誘導されている。つまり、ロサ弾はいっぺんに両方の目を奪うことが可能なのだ。

「全弾迎撃成功！至近弾8！無傷です！」

「よしー」

思わずガッツポーズ。

「かんちよー、航空機隊を一旦戻しましょう。天気が悪くなってきたるっす。」

「気象観測班、気象台に連絡を。航空管理長、機体回収よろしく。」

「両方っす！航空機隊、戻ってきて欲しいっす！」

「応急修理班、今ので問題になった箇所の応急処置、応急修理をお願いします。弾薬補給も忘れずに、宜しくね。」

.....

『こちらら航空管理長っす！全機帰還しましたっす。』

「第1艦橋天気観測員よりC I Cへ。日が落ちました。天候変更、霧嵐。風と嵐により波高しです。」

「C I Cより第1艦橋天気観測員および航海班へ。ここは演習海域南東じゃないのですか？」

『多分、嵐の進路が変わったんじゃないんですかね。气象台にもう一回問い合せて確認』

お願いしま……』

突然、レーダーにノイズが走り、真つ白になる。至近距離でのチャフか、もしくはウイルスか？

「レーダーロスト!!真つ白のまま戻りません!チャフではない模様!機械的故障の可能性あり!至急龍奈さん呼んでこい!!」

「ソナーも雑音すら拾いませぬ!!こつちにも呼んで!!」

「そんな…艦橋員!外の様子を…『左舷後部、戦艦春雨急接近!衝突します!!総員何かにつかまれえええ!!』」

え、なんで、春雨つて輪形陣反対側にいたはずじゃ……。

「取り舵いつ…」

づ(こ)いいいいん!

急激に船が横殴りにされるような衝撃を受ける。立っていた私はその力になすすべもなく床に叩きつけらる。頭を打ったのか、電気が流れたような痺れが体を襲う。

「な……」

私は薄れゆく意識の中、確かにこう聴いた。

〈貴女だけでも…私達の…分も…生きて…向こう…の…私に…よろ…し…く…〉

そして意識は深い闇に沈んだ。



0—2　　～始まりの日、夜明けと目覚め～

「……ちよ………う………い………かん………う………い………艦長………い」

ゆさゆさしないで……もう少し寝てたい……。今まどろみタイムだから……。寝てたい………？………あれ………？私いつの間に寝てたんだろ………？起きなきゃ

目を開ける。天井のLED蛍光灯が眩しい。

「………っ！」

床に叩きつけられた際に変なところを打ったせいか、腰が痛い。

「艦長！大丈夫ですか？」

「副……ちよ……。私は夢でも見てるのかな。起きろ私」

どう見ても副長は20cmぐらいのデフォルメ化された小人か　妖精か　ゆるキャラにしか見えない。というか、女性化されてる。くるっと見回しても私以外の周りの人がデフォルメ化された15～25cm前後の小人か妖精かになっっている。

待　　つ　　て　　普　　通　　に　　可　　愛　　い　　。

「艦長く脳内暴走してるけど大丈夫っスか？」

航空管理長、あなたも女性体化されて可愛くなってるよ…。

とりあえず、1番艦おの春雨ちやんに突っ込まれたんだっけ。

「状況確認、艦の状態と点呼を」

「機関、兵装類、共に異常なしです」

「航空機隊も大丈夫っス。ただ、凧紗が我々のサイズになっていませんっス」

なるほど、妖精化しない例外の人も居るようだ。

「天気観測班より、CICへ。さっきまで嵐で大しけだったのに、快晴です！」

かなりの時間気絶していたのかな。それとも相当流されたか。

「応急修理班代理の龍奈です。私と鈴奈以外全員ちっちゃくなってます。とりあえず、衝突箇所などの応急修理を続行します」

「他艦とのコンタクトロス！レーダーソナー類の故障ではない模様。現在位置は海図をてらし合わせているところです」

突然CICの扉が開く。全員がそちらに振り向くと息を切らして入ってくる少女がいた。

「艦ちよ…良かった、そのままのサイズだ！」

抱きついて来る。彼女は風紗。神電Ⅱの専属パイロットだ。

「修理班も1人と貴方の機体の専属整備士も私たちと同じだよ」
優しく抱きしめて頭をなでる

「点呼完了。過不足なく全員います」

現状、現在位置不明、他艦との連絡途絶。ただし乗員全員無傷だが私と今入ってきた風紗と龍奈と鈴奈以外がデフォルメ女性化されている。

つまり……

「魚雷音聴知!!数12!方位120!距離1.2km!速力45knot!扇状に広

がつてきますす！」

「なにいい！」

副長が思いつきり声を裏返して叫びながら私の方を振り返る。

え、魚雷ってこんなに遅かったつけ……。とりあえず、私がこの船の艦長。私が指示を出さなければ何も出来ない。

「対潜、対魚雷戦闘用意!!機関緊急始動!速力61knotまで増速!全員何かに捕まって衝撃に備えて!」

「了解!!」

『右舷見張りよりCICへ。雷跡12中進行方向へ向かう6視認!空気魚雷です!』

「艦長、空気魚雷ってかなり前に日本が開発した酸素魚雷とアメリカが開発した誘導魚雷やドイツが開発した電気式魚雷の完全に下位互換でしたよね」

「副長、あつてますよ。とりあえず、避けることを優先で!」

『機関始動完了!急速前進!!速力61knotまで!』

航海班長直々が復唱、エンジンレバーを四つとも61knotのところに合わせる。

甲高い音と鈍い響きで船体を揺らすエンジン。

ボイラーを搭載した艦なら確実に直撃コース。ガスタービンエンジンを搭載した艦でも間違ひなく回避できないように魚雷を撃ってきた。

高初期加速の反動が体にのしかかる。

ガスタービン艦やボイラー艦
そのへんの艦の最高速を軽く超えて加速していく。

「他に所属不明艦載機、所属不明艦、所属不明潜水艦と思われるものは無いか？」

「探知圏内にそれらしきものは今のところ見当たりません」

「艦長、これを」

と、いつつ副長が手渡してきたぶ厚めの本。なんだこれ。

えーつと《初めての艦娘になった貴方へ》

な、ナンデスカコレ……。

「え、えつと……。」

背中に冷たいものが一筋、流れ落ちる。

「今は戦闘中なので後で読んでくださいいネ」

「は、ハイ……」

「魚雷、我が艦の後ろを通過！」

「ソナー敵潜水艦聴知および補足！方位同じ！距離1.7km、数3！」

『更に雷跡4！距離1. 4 km！方位130！43 knot！直撃コース』

「距離1. 6 km！雷跡2！方位135！44 knot！直撃コース!!」

ソナーと見張りの声が重なる。相手は相当の数の軍艦に雷撃を加えてきたと思える精度とコンビネーション雷撃が出来る……ならば。

「アベンジャー起動！やっちゃって！」

爆音を轟かせながら35 m 砲弾を分間3000発以上吐き出す右舷4機のCIWS。計毎分12, 000発以上が水面に叩きつけられ水飛沫を激しく上げる。

程なくして6本の水柱が立った。

『全弾相殺！』

「よしー！」

さて、敵なら沈めるか。

『敵潜水艦1隻浮上！こ、これは…ヨ級1です。潜行中の潜水艦はカ級と断定』

「か、カ級？ヨ級？な、なんつすかそれ」

「え、勉強しませんでした？」

聞きなれない敵の名前を平然と言うなし。

「とりあえず、面舵50！5番主砲、浮上した敵ヨ級潜水艦を照準！1番6番レーザー、

潜つてゐる力級2隻に照準！ 風紗ちゃんはしばらく目を閉じてて！ 殲滅後取り舵50で進路戻せ！」

広がる了解の連鎖。

「おもーかーじー！」

航海班長が舵を回す。それに答えるように駆逐艦並にくると回る艦

「1、6番照準よし！ いつでも撃てます！」

「5番照準よし！ 弾種対艦用榴弾！」

「主砲、^{てえー！}斉射！」

火薬が炸裂し空気が急激に膨張、砲弾を押し飛ばす。そしてフレミング左手の法則に急加速。音を軽く置き去りにし、すつ飛んでいく二つの砲弾。

それに少し遅れて一瞬眩い二つの紅の閃光が空を飛翔し切り裂く。

一瞬の静寂。そして超音速の二つの砲弾と4つの光が敵潜水艦3隻を捉え、そのまま穴を穿つ。そして爆発四散する。

艦橋、CIC、見張り員の全てが沈黙する。

「…敵潜水艦爆散を……確認。跡形もなく……吹き飛んでいます。付近の敵、確認出来ず」
「殲滅完了と判断、取り舵50」

航海長と副長が即座に再起動する。

「……これが。つぶ」

風紗が口を抑える。思いつきりモニターを見ていたようだ。物凄く酷いものを見せ
てしまった……かな。

「風紗ちゃんトイレ行ってきて。副長、今何時ですか？」

なんとか再起動した私の頭はとりあえず、場の空気を戻すためにそう聞いた。

私は腕時計を持っていない。片方の腕が重くなるのが苦手、という単純な理由なのだ
が、結構不便だったりする。

特に手元に端末などの時刻の確認できるものが無い時は。

「艦長、とりあえず、それ読みませんか？」

さつき手渡された本を指さす。

とりあえず、目次を開いてみる。げ、2000ページもあるのか……大変だな。

とりあえず、この船をどう進めるか、を考えなければ。

「艦長に意見具申。太陽がある方を南と仮定し太陽を西に進みましよう。海図を見る限りキリバス諸島かつバル諸島にぶつかると思います。」

「航海班長、その意見貰うわね。進路2―7―0！速度30.6 knot。そのままの進路を維持、お願いね。私はこれ読んできます。」

手に持った分厚い本を抱えながらCICを後にした。

――

「ふいー……これで最後のページかな」

ていうか、私こんな本持ったつけ。まあ、船員の誰かの持ち物だと思っけど。

椅子の後ろにもたれかかって背伸びをする。

後は艀装の動かし方や機能設定などの取扱説明書や洋上や孤島でのサバイバル方法、艦種別の優先攻撃順位などいろいろなが書いてあった。

色々規格外なんだろうな。

そう考えていたら部屋の内線が鳴った。

「まーた航空管理長あたりがめんどうくさいことをしでかしたのかな。あーあ。やること増やさないとくれよなーまったく。」

三度目のコールで受話ボタンを押した。

「はい、こちら艦長です。まーた航空管理長あたりがめんどうくさいことでもしたんですか?」

『いえ、違いますよ。レーダーより報告です。約350km先で駆逐艦と思われる1隻が航空攻撃を受けている模様。SOS信号を出しています。どうしますか?』

あれ、予想が外れた。て、SOS信号?!

「90knotで接近、距離60km前後で敵味方識別。敵でなければ救助援護しましょう。敵なら沈めます。」

『了解。急速前進、速力90knot。60kmで敵味方識別。敵なら沈める。そうでなければ援護救助。』

急速前進警報が鳴り響く。続いて核融合炉私とガスタービンエンジン鼓動がはやくなり、唸りを上げ、なにかに捕まらないと壁か床に叩きつけられるレベルの衝撃が船を襲う。

普通の船なら船体がグシャッと潰れて沈むであろう。しかしこの船は違った。

波を切り裂き、大量の海水を後ろにふっ飛ばす。

大日本帝国海軍最速の島風型駆逐艦（約40knot）の速度を軽く超え、二次改装後の金剛型戦艦（約30knot）の約3倍の速度で疾走する大和型よりも大きい戦艦。

さて、とりあえず私もCICに行かなくては。

「状況はどうです？」

「報告します。目標、第一次攻撃隊は凌いだ模様。第二次攻撃隊の補足はできていません。不定期でSOS信号出しています。」

「こちらから探知できないって事はレーダー探知距離外に空母機動部隊は居るのかな。ならば。」

「了解、航空管理長！神電Ⅱの発艦許可出すわ。凧紗ちゃんに外の空気を吸わせてあげて出撃させてあげて」
「了解っス『凧紗アー、出番っスよー。』」

艦中部にあるヘリポートがゆっくりと下がり再び顔を出した時、大空よりも蒼い機体が1機と2人が載っていた。

1人は凧紗ちゃん。神電Ⅱを駆るパイロットだ。

もう1人は発艦を手伝うマーシヤラーと呼ばれる人。

マーシヤラーの人妖精化してるけど、ちゃんと見えるのかな。

「凧紗ちゃん、聞こえる?」

『はい、聞こえますよ、夜雨ちゃん』

ちゃんをつけて呼ばないで恥ずかしいから。

「マーシヤラー、ちゃんと見えてる?」

『バッチリ見えていますよ!』

「OK、今回の任務は護衛と敵味方識別。ついでに外の空気もしっかり吸ってきて。敵ならある程度監視すること。やばいと思ったらサツサと逃げていいから。命と機体を大事に。いいわね? 神電Ⅱ発艦せよ!」

『了解です。では、行ってきます。』

—————

【風紗 side】

（夜雨ちゃん直々のお使い、頑張らなきゃね。私は艦娘に乗れる数少ない人間なんだし）
ヘルメットバイザーをしつかりと被り、指紋認証と声認証によるエンジン起動キーを
回す。

徐々に甲高くなるエンジンの音。各種ディスプレイで異常がないかのチェック。

『風紗アー。聞こえるっすかー。今積んでる変更可能兵装は長距離空対空ミサイル6
発、短距離空対空ミサイル6発、中距離空対艦ミサイル2発っす。無理はしないでつ
ス。』

「管理長さん了解。行つてきます」

そう言いながらマーシャラーに敬礼をする。私は発艦準備完了の合図代わりに敬礼
を使う。

マーシャラーが赤旗と緑旗を持ち、振り上げる。上昇後ホバリングの合図だ。

安全を確認してスロットルをゆっくり上げる。甲高い唸りと、どっしりとした響きを
奏でるエンジン。

ふわり。重力の手から解き放たれた機体をゆっくり上昇させていく。

1……………2……………3……………4……………5 m

マーシヤラーが両手を真横に伸ばしたままを維持する。

ホバリングの合図だ。スロットルを上げるのを止める。

彼は緑旗を持つ腕を伸ばしっぱなしのまま赤旗を前方で数回振り上げ下ろしをする。ゆっくり操縦桿を左に倒す。海の上に滑りでる機体。完全に夜雨の横に並ぶ。やっぱりいつ見てもこの船は大きい。

マーシヤラーに再び敬礼をし、マーシヤラーが答礼したのを確認してスロットルレバーを全開位置にいれ、その隣のレバーをめいっばいまで押し込む。エンジンが吼え、私は座席に押し付けられる。

『神電Ⅱ発艦完了。』

「マーシヤラーさん、機体整備班さん、艦長さん、いつもありがとうございます。」

お礼は忘れずに、ですよね、艦長。

『神電Ⅱ発艦を確認。お使い、頼むわね。行ってらっしゃい。』 ナイトメア、
音をやすやすと切り裂いて所属不明の駆逐艦の元に飛んでいった。

0—3　　〽始まりと導きの船〽

とある深海棲艦 side

〽()内に読みやすさのための文を補足します〽

「ダイイチジコウゲキタイ、ゼンキカンシマシタ。ダイニジコウゲキタイゼンキハツカンカンリヨウ。ゲンザイクウチユウシユウゴウカンリヨウ。モクヒヨウニムカイマス。モクヒヨウ、クチクーダラク」

(第1時攻撃隊、全機帰還しました。第二次攻撃隊全機発艦完了。現在空中集合完了、目標に向かいます。目標、駆逐1墮落)

「ソウカ。イツセキノクチクカンガダラクシタカ。トリアエズソイツヲツブセ」
(そうか。1隻の駆逐艦が墮落したか。とりあえずそいつを潰せ)

そう言いつつも、胸の中に拭えない不気味な不安がよぎる。

本来は戦艦2空母1軽巡2駆逐1に攻撃したはずだが、我々の攻撃を受けて損傷し、

墮落した駆逐艦1隻以外はほぼ無傷で索敵圏から逃げられてしまった。

流石に大破駆逐艦たった1隻に6隻分の艦載機をぶつけるのは一種の八つ当たりみたいなものだろうか。

「サクテキキカラノツウシン！フメイキイツキカクニン。ミタコトガナ……ツウシントゼツ、ゲキツイサレマシタ」

（索敵機からの通信！不明機1機確認。見たことがな……通信途絶、撃墜されました）

「ナニゴトダ！ソ、ソソナバカナハナシガアルカ！」

（何事だ！そ、そんな馬鹿な話があるか！）

確かに索敵機は撃墜された。しかし、その母艦、通称軽空母へ級と呼ばれる軽空母はその姿を見ていた。

「アオクテプロペラノナイキタイダッタ……。」

（青くてプロペラのない機体だった……。）

「ネボケルナ！プロペラガナイキタイハソラヲトバナイハズダゾ！」

（寝ぼけるな！プロペラが無い機体は空を飛ばないはずだぞ！）

「マアマア、ミマチガエツテコトモアル。」

（まあまあ、見間違えつてこともある。）

各空母が自分の艦載機に一応念には念を入れよと通信を入れようとしたその時、突然通信機から悲鳴のような声が聞こえてレーダーから1機また1機と数を減らしていく

「ナニガオキタ!!」

（何が起きた!!）

『テキシユウウウ!!!カズー!!』

（敵襲! 数ー!）

かろうじて外縁部のリ級重巡洋艦がギリギリ目視で捉えられる距離。更に近いレーダーピケット艦の口級駆逐艦、へ級軽巡や艦隊のレーダーでは余裕の距離だが何故かその機体は写らない。

『ヤツハハヤイズ!!』

（奴は速いぞ!!）

『オチツイテネラエ!!』

（落ち着いてねらえ!）

『エンジンテイシ！オ、オチルウウ！』

(エンジン停止！お、墮ちるう！)

『ウワアアアア!!』

「アイテハイツキダケダ!!センカイジヲネラエ!!」

(相手は1機だけだ！旋回時を狙え！)

「ヘンタイヲミツニセヨ！ヘンタイヲミツニセヨ！」

(編隊を密にせよ！編隊を密にせよ！)

その怒声虚しく輪形陣前方で集合、進軍していた攻撃隊が片っ端から撃ち抜かれ、翼をもがれ、炎上、爆散し空という晴れ舞台から消えていく。

「セントウキタイハドウシタノダ！ナニヲヤツテル!!」

(戦闘機隊はどうしたのだ！何をやってる！)

「ステニゼンメツシテマス!!」

(既に全滅してます!!)

隣にいる血の気のないヲ級の顔が真っ青になる

「オマエラオチツケ。ヤツノタマガレマデマテ。ソコデケツチャクダ」

（お前ら落ち着け。やつは弾切れまで来て。そこで決着だ。）

広がる了解の連鎖。普通の戦闘機なら弾は何時か尽きる。普通の戦闘機ならば。

1分、2分。時が経つのが物凄く遅い。その間にも1機、また1機と墜ちていく。

3分。普通の航空機ならとくに弾は切れているはず。

4分。何故舞える。奴は一体……

「ワガコウクウキ、ゼンメツ!!ダイイチジコウゲキタイキカンブンシカアリマセン!!」

（我が航空機、全滅！第一次攻撃隊帰還機分しかありません！）

「ナン……ダト……」

悪魔。まさにその表現が正しいのか。プロペラが無く奇妙な甲高い音を吐き出し、音を置き去りにし、リーダーに映らず、見えない弾を無尽蔵にぶちまける青い悪魔。

そんな悪魔を相手にしてしまったのだ。

マズイ……とてもマズイ……

そう直感的に感じ取っていた。このまま第一次攻撃隊の艦載機を全機空に上げて迎撃戦をさせてもさつきの一瞬でその行動が、艦載機が、すべて意味の無いガラクタと等しいものとされたからだ。

おまけ程度にリーダーピケット艦の口級駆逐艦2隻とへ軽巡1隻を、銃撃し、魚雷

を誘爆させて沈めて帰っていったのだ。

【風沙 side】

「なんで超旧式のレシプロ戦闘機しかないのかしら」

ジェット機が1機も見当たらない。レシプロ機しかないのだ。

ミサイル積んできた意味が無い。というか、対音速機やそれ以上の戦闘機用として作られた神電Ⅱと対レシプロ機戦用として作られたレシプロ機ではどちらが上かハッキリわかるであろう。

ミサイルは超高額なお荷物でしかないのだ。

徹底した一撃離脱。

空という舞台から1機、また1機と蹴落としていく。

最後の1機を爆散させた所で母艦夜雨に通信を開いた。

「こちらナイトメア。ラビリンス聞こえます?どうぞ。」

『ラビリンスだ。どうした?』

「敵航空機がレシプロ戦闘機しかないの。それも黒いからわからないけど、96艦戦やF2F、F4F、一番マシなのでも多分零戦21型と陸上攻撃機という大戦初期機体しかないのよ」

『風沙、それホント?』『まじかつスか。』

「嘘なんて言つてませんよ航空長。そして艦長は、見えてる、でしょ?」

『ああ。バレてたか。しっかり見てたよ。もつと捻つて行つた方が良かったかな。』

「はい、以後気をつけまーす。とりあえず、戦果報告するね。敵意のある航空機全機撃墜。自機損害なし。パルスレーザーだけで対処した。SOS出してた駆逐艦は大破確定ね。大炎上してるけど魚雷は積んでなかったから誘爆はないと思う。多分パツと見ただけで白露型かな。浮いてるだけでも奇跡レベルの損傷を負ってるわ。後ついで程度でレーダーピケット艦と思われる敵駆逐艦2隻と軽巡1隻を沈めてきた」

『了解、我が艦の防空圏内に入り次第帰投せよ。それまでは仮称白露型の航空援護をす

るように。以上』

「ラビリンズ、ラジャー」

にしても、数はやけに多かつたわね……正規空母6隻はいるのかな。

白露型駆逐艦の上空を超低速フライパス。一応その時に白露型に発光信号で敵ではないことのみ送る。

操縦桿を少し左に倒し反時計回りで上空待機する機動に神電Ⅱを乗せた。

—————

夜雨 side

「にしても不思議ね。ナイトメアの報告と私の目で見た限りだけど、かなり古い艦載機を使ってるなんて。副長、航空管理長、どう思う？」

「それしか存在しないか、それを出さざるおえない状況か、舐めてるか、ですね。」

「その三つしかないっすね。」

「本艦の主目標は、仮称白露型の鎮火後応急修理をして曳航、本海域の脱出です。神電Ⅱは一時帰投してもらって格納庫即発可能状態で格納庫待機し、万が一に対処する。その

間はこの船のリーダーソナーで対潜対空哨戒をする。修理し終われば所属基地までさっさと引つ張つてこの海域から逃げるわよ。それでいいかしら」

「了解！」

「やることは沢山あるわ。一つずつ慌てず焦らず確実に。頼むわよ」

「よしお前らア！聞いたかア！俺達の出番だア！！全員装備着用オ！！点検急げエ！！」

「はーい修理するわよー」

「了解！！」

荒くれ男ども（※妖精女体化済み）と若干^龍1名の普通^奈の女性の声が跳ねる。

これは暫く荒れそうだ。

「艦橋員！見える？」

『見えました！大破炎上する駆逐艦！！発光信号！我春雨救助を乞う！です！』

は、は、は、春雨?! 駆逐艦になんてお姉ちゃんが?!?!

急いで助けなきや！

「こちらも発光信号で《我2番艦夜雨、鎮火と応急修理を実行す》と伝えて！」

「了解！」

CICが騒がしくなる。

「レーダーソナー効力最大！神電、桜花改即発待機！波を高くしないように減速15ノットまで！面舵7！春雨の右舷に付けて！鎮火班と応急修理班は左舷甲板待機！砲班は全ての砲を邪魔にならないように！鎮火班は甲板に放水！延焼防止を！」

了解の返事を待たずに矢継ぎ早に指示を出す。

「春雨の真横まで5！4！3！2！今！」

「機関一時停止！鎮火始め！応急修理班は炎と誘爆に気をつけながら応急修理！曳航準備は鎮火後で！私も甲板に行つて手伝つてきます！副長あと頼んだ！」

「お、おい艦長?!」

そう言い残して副長の慌てる声を聞き流して全力ダッシュ。CIC艦橋を飛び出て階段を三段とぼしでかけあがる。その途中に救急セットを持っていた衛生管理班の一人がいたのでひつたくりそのまま逃走。ごめんね衛生管理班の人。

そして最後の分厚い装甲扉を蹴り開けて甲板に飛び出る。そのままの勢いで落下防止用鎖の上に着地、そしてそのまま洋上に跳躍する。そのまま重力の力を使い、春雨の艦橋部分にダイナミックおじやまします着地

そして血まみれで倒れてる女の娘を見て凍りついた。

「お姉ちゃん……？なんで駆逐艦に……」

思わずそう呟いてしまうほど自分の姉（一番艦）に姿が似ていた。差異としては服の細々とした部分と身長ぐらいか。

「お姉ちゃんしつかり!!（混乱）」

無意識にそう連呼しながら応急処置をしていた。

応急修理班 side

「角材7本急いでもってこい!!」

「電ノコの替えの刃持ってきてくれー!」

「ガス切れたぞ!ガス缶はどこだ!」

「これを使えばかもん!」

『敵潜水艦音聴知!距離25!方位3時から4時方向!数1』

「こちら副長。多目的ミサイル(ASROC-C)発射。撃沈せよ」

『了解、左舷から発射します』

「合金板4枚こつちに頼む!」

「消火班こつちに水まいて!!」

「バーナー持つてこい!」

「操鑑!傾斜してるからすくい上げるように持ち上げろ!!」

『了解、両舷注水2トン!さらに右舷注水2分の1トン!そのままバウスラスターで横移動!潜り込んだら両舷排水4分の1トン!!ゆっくり浮き上がれ!』

「合金板24枚持つてこい!!艦首の穴塞ぐから!!」

「鎮火完了!曳航の用意しますー!」

了解と要求の合唱。潜水艦はその片手間程度で処理されたのに気がついた人は少なかったようだ。

「副長からの報告！艦長が春雨艦橋に飛び移り艦娘の手当をしています！この船は艦娘持ちです！」

「何？おいお前らア丁寧にやれエ!!お嬢様の乗ってる船だぞオ!!完全に直せエ!!俺らの船でも出来るなら造作もないだろオ!!」

「!!!おぉー!!!」

皆の返事を聞いて艦の方に振り返る。

「あとそこのお前！ついでにバーナーと溶接棒持ってこい!!あと金槌も!!みんな頑張ってるのに俺だけ見て指示出ししてるだけなのが納得いかねえ！俺にもやらせろオ!!!」

甲板に居た応急修理班員が工具類と溶接棒の入ったカバンを俺に向かって放り投げた。右手を前に伸ばしそのまま紐の部分を掴み勢いを殺す。

そのまま床に置いて中から電動カッターを取り出し艦橋の一部をガリガリ削る。

そのまま床に置かれていたバーナーと合金板で削った部分を綺麗に直す。

バリの部分は金ヤスリで引つかからないように削る。

艦船修理の鬼sは全身全霊をかけて春雨を直していった。

春雨 side

頭が痛い……身体中が痛い……熱い……

意識が薄くなったり濃くなったりする中、1隻の船と航空機が居る。最後の力を振り絞って救助を要請した。敵でも味方でも、損傷が酷く沈むであろうか。そんなふわふわした夢の中から女の子の嗚咽で意識を引き戻された。

「……………う……………つ……………」

「お姉ちゃん！しっかりして!!」

あ、私は白露型5番艦の春雨です。白露型は8隻のはず……

妹たち3人は私のことをお姉ちゃんとは呼ばなかったはずですし。この方は誰なんでしょう……。

目を開ける。太陽が眩しい。顔をしかめながらゆっくり起き上がる。あれ、そんなに体が痛くない…修理してくれてるの…？

そんなことを考えていたら思いっきり私の胸に顔を埋めて泣きじゃくる女の娘が目

の前にいる。

服装は確に白露型に似ていたが、全く違うものだった。

隣に見たことのない戦艦が居る。大和型戦艦よりも大きい戦艦。扶桑型戦艦や伊勢型戦艦と同じ砲の数だが、扶桑、伊勢型みたいな2 1 1 2ではなく3 3
タイプである

それに見たことのないHの文字が付いている甲板。

私の船は……？

ゆっくり振り返ると見たことのない服を着た妖精が数人いた。

「報告！外装応急修理（完全洋上修理）完了」

「お疲れ様。エンジン部分はどうです？」

「龍奈さん達が今見てくれています。龍奈さん、春雨の船に乗ると何故か気分悪くなってしまうみたいなので艦の甲板の上ですけどね」

「そうか、わかった。りゆなさーん！エンジン部分はどうですかー！」

とか話をしている。

え、応急修理完了？完全修理の間違いでは…

というか、私の体内時計が間違つてなければ大破してから3時間も立つてない。応急女神は轟沈しないと発動しないし、何よりその装備は鎮守府側のミスで積んでない。なのに……。

その時夜雨のサイレンがけたたましく鳴り響いた。

—————
夜雨 side
—————

「副長です。電探に感あり！空母6戦艦5巡洋6駆逐15…それ以上！ 打撃艦隊です！攻撃機発艦準備中！航空機距離400！方位175！敵味方識別不可能！しかし方角は第一次攻撃隊及び第二次攻撃隊と思われる航空機が飛んできた方向と同じです！」
まずい、このまま春雨の機関始動を待っていたら確実にやられる。

ならば

「春雨に曳航索を急いで繋げて！応急修理班一部は春雨に残り修理調整！そして万が一に備えること！その他は撤収！機関始動！防空戦闘用意！神電IIの装備を多目的ミサ

イルに交換後発艦せよ！アビスは飛行甲板待機！桜花改は距離200で発艦！春雨ちゃん、あなたの所属基地はどこ？」

混乱した頭は何故か正常な判断を下す。お姉ちゃんと一緒の所属だったはずなのに。

「え、えつと…パラオ第二鎮守府です。あと聞いたことない言葉が…」

「その件は引つ張りながら話すわね。とりあえず、そこまでの海図と地図ある？あるなら貸して欲しい」

「え、えつと…艦橋の海図用本棚左のほう、です。でも私なんか置いていつて下さい…：足でまといですし」

「そんなさみしい事言わないで…あなたを無傷で連れていくわ。大丈夫、防空戦艦を甘く見ないですよ。ね、お姉ち…：ゲフンゲフン何でもないデス…」

やっぱりお姉ちゃんによく似てるから姿がかぶる…：ここでようやく私の混乱が溶けてきて正常に動き始める。

「艦長！曳航索取り付け完了！いつでも引つ張れますよ」

「ありがとう、微速前進！無傷で春雨を送りおどけるわよ！速度61knotまでゆっくり増速！進路このまま直進！」

ろ、61knot?!とか驚愕の声をちらほら聞いたがガン無視して私のCICに急いで戻る。

大和型よりも大きな船体がゆっくりとしかし着実に急加速して曳航索が軋みながら1隻の駆逐艦を引っ張っていった。

?????
side

我々が全力攻撃した駆逐艦が3時間足らずで無傷状態になり引つ張られて離脱しようとしているらしい。あの戦艦といい、青い航空機といい、奴らはは何者なんだ……

第1時攻撃隊の稼働機全部を飛ばしてどこまで削れるかが勝負になる。いや、航空機に蹴落とされて無傷で切り抜けられる可能性の方が高いかもしれない。

それでも……

『ミカクニンコウクウキガチヨクエンキノモヨウ!カズー!レイノアオイキタイデス!』

(未確認航空機が直掩機の模様!数1!例の青い機体です!)

「ココロシテカカレ!セントウキタイガユウセンシテコウゲキセヨ」

(心してかかれ！戦闘機隊が優先して攻撃せよ)

たった1機。しかも例の青い意味不明な航空機。こいつはガン無視するしかない。多少の損害は出るかもしれないが勝てるだろう。

そして母艦は戦艦。

そう、普通の戦艦なら良くて最高速度は30knotちょい。仮に即最高速まで加速したとしても会敵から戦闘まで弾薬には余裕がある。燃料は心細いけどギリギリ帰り分まで足りる。

この勝負、貰った。

そう必勝の笑みを浮かべていた。

0—4—A 〈始まりの島、導かれた鷹と鷲〉

?????
side

「ソ、ソシバカナ……」

（そ、そんな馬鹿な……）

「オイツケナイ……」

（追いつけない……）

艦隊のほぼすべての艦に動揺が走る。

駆逐艦と軽巡で構成された快速水雷戦隊の速度は30〜37 knot。

それを駆逐艦といえど曳航しながら余裕で振り切れる戦艦。

唯一追いつくことの出来る可能性のある空母搭載機も航続距離的にそろそろ限界我々は途方もない悪魔を相手にしてしまったのか……。

『オエ！オйкаケロ！ナントシテデモシズメロ！』

（おえ！追いかける！なんとしてでも沈める）

「コウゾクキヨリテキニムリデス。イッタンキチニモドリマス」

（航続距離的に無理です。一旦基地に戻ります）

「ツギアツタラゼツタイシズメル。カクゴシロ」

（次会つたら絶対沈める。覚悟しろ）

そう言い残して海中に身を没する。

そう無慈悲な声が電子の風（無線電波）に乗って飛ばされるのを夜雨たちは知る由もなかった。

夜雨 side

「艦長！距離275！敵航空機引き返していきます！航続距離の限界のようです」

レーダー手が安堵のため息をつく

「航続距離短つ。いや、でも助かりましたね。神電Ⅱに着艦指示。パラオ第二鎮守府まで欺瞞進路を取りつつ対空対潜警戒を厳として、宜しくね♪」

「言われなくてもやってますよ。艦長」

「レーダーに感あり！2時方向！距離390！数1！下駄履き機だと思われます！速度210！」

「多分味方ですな。神電Ⅱは着艦を続行せよ。面舵15、速力そのまま。レーダー効力を上げよ」

流石副長、的確な指示を出す〜と言いたいけど副長、私の仕事取らないでください。真面目に私の居る意味が無くなっちゃいます。

「あ、艦長、仕事取っちゃいました。申し訳ないです」

「あ、うん」

ため息をつきながらトランシーバーのスイッチを入れる。

春雨に残った応急修理班との連絡用だ。

「春雨ちゃんにこのまま進めば後どれぐらいでつきそう？って聞いて欲しいです」

『あと2時間半ほどで着くはずらしいです』

「あーい、ありがと。んじゃ、進路、速力このままで。下駄履き機の敵味方識別よろしく。ちよつと外の空気吸ってきます」

CIC艦橋を後にする。

1時間半後、パラオ第二鎮守府とパラオ第一鎮守府の艦隊が手荒い出迎え？をしてくれた。全ての砲を最大仰角にしたんだけど、ダメだったかな……。

—————

パラオ第2鎮守府

弟提督 s i d e

「まずい……まずい。非常にまずいぞ」

駆逐艦1隻の行方不明。

たった1隻、されど1隻。大切な鎮守府の一員が突然居なくなってしまった。

気が効いて、堅実で、そして場の空気を和ませてくれるその駆逐艦が居なくなってしまった。

一応姉の運営しているパラオ第一鎮守府と共に搜索艦隊を付近の海に交代で派遣してはいるが、敵艦隊や敵艦載機の執拗な攻撃を受け撤退と派遣を繰り返している状態だ

が、手応えがない。

そろそろ諦めようかな。でも轟沈1の数字は嘆いても消えない。でもまだ生きている可能性はある。

悩み、嘆き、全力で回らない頭を回して考える。

今日はそんな1日になるのか……と思っていた時、第一艦隊旗艦、赤城から奇妙な報告が入った。

由良搭載の偵察機、零式水上偵察機によると大和型よりも大きな船体に金剛砲サイズの砲を積んだ味方と思われる艦が春雨を引っ張っているようだ。

しかも御丁寧に発光信号で『私は日本、ウイルキア国海軍所属、春雨型防空戦艦 夜雨。あなたの所属はどこですか』とか送ってきてる。全砲最大仰角状態で、だ。

日本の艦艇に「防空戦艦」というジャンルはない。というか、大和型よりもでかい船など存在しない。もちろん、ウイルキアとかいう国も無い。

一応サイズならタンカーなどの商業船とかなら存在する。が、戦艦なら大和型が最大

のはず。

物凄く奇妙だ。どうする。コイツを信用しているのか。敵じゃないのか。

突然部屋の電話が鳴る。とりあえず、俺は秘書艦の五月雨ではなく近くにいた漣に取らせた

「はいモシモシ。御主人様、姉提督の鎮守府パラオ第一鎮守府から電話ですよ♪」

——第一鎮守府から？奇妙だな。なんか俺やらかしたか？

「漣、変われ。もしもし、第二鎮守府でs……」

『所属不明の戦艦1駆逐1を発見。駆逐1はあなたのところの春雨よ。あなたのところの由良搭載機の零水偵が発見してくれたわ。良かったわね。』

「やっぱり春雨だったのか。協力ありがとう」

さつきまでのもやもやが一変して歓喜に変わる。

「キタコレ！」

漣も釣られる。

五月雨は目に涙を浮かべている。そりやそうか、白露型同型の姉だし。

『それと寄港の許可を求めてきてるわ。修理のために機材等も貸して欲しいらしい。あなたの所なら大和型が居るし、多分ドックにも入るんじゃない?』

「ああ、そうする。姉貴ありがとう。助かったよ」

『いいの。みんなの為、だし。ちなみにそれを言うべきなのは私じゃないよ。それと姉貴と呼ぶのはやめて頂戴。あんたもいい歳なんだから。それに』

「細かいことはいいの。んじゃ」

説教が長くなる前に電話を切る。そのまま内線電話の方に繋げ変える

「大淀! 第一艦隊に連絡を頼む。不明艦にパラオ第一/第二鎮守府ここまで来てもらおうように言ってくれ。

決して無礼は働くな。以上」

そう言つて切つた瞬間全力でガッツポーズを決める。

無事。行方不明になつた春雨の無事の帰還。この鎮守府の轟沈ゼロ記録は守られた。

「やった。神様ありがとう。うおおおおお!!! 来ましたわ W W W これ来ましたわ W W W ぬ

んほおおおおおお www あばばば www www www

／キンコーン☆／

〔～弟提督の歓喜の舞が10分ぐらい続くのでカット～〕

「御主人様、しつこいとぶっ飛ばしますわよ☆」

「お前なあ……ぶっ飛ばしてから言うなよ」

完全に提督室がお花畑ムードだがまだ彼らは保護してくれた戦艦が規格外過ぎるのをまだ知るよしもなかった。

夜雨 side in 提督室

「ちよつと待つてください！いくら何でも理不尽過ぎませんか！」

春雨と由良の悲鳴にも似た声が提督室に響き渡る。

それに便乗して春雨搜索艦隊の面々＋白露型＋αが講義の声を上げる。

「いくら何でも酷すぎよクソ提督！もう知らない！」

曙に関しては半泣き状態で司令室から飛び出ていく始末。

慌てて後を追う潮と浜風。

皆が皆、大切な仲間を助けてくれた人をスパイ扱いするのが理解出来ないようだ。

「私もいくら何でも理不尽過ぎるのではないか？と思うのだが。提督はそのところはどうかんだ？」

退出した三人を横目に搜索艦隊旗艦の長門が提督に問を投げる

「少なくとも長門の言う通り、かなり理不尽だ。だけど大本営が決めた話だ。俺らがどうこう言おうが仕方がない。それに軽く明石や夕張に装備を見せたがどれもこれも技術不足で夜雨同伴じゃないと何もわからない」

「でも……」

春雨達が何とかして待遇を変えようと必死に説得を試みている。

パラオ第一／第二鎮守府に半ば強制連行された私は正規の艦娘みたいにドロップ扱
いではなく鹵獲、漂着扱いにされている。

深海棲艦とか言う人類の敵のスパイ容疑をかけられてるらしい。多分上層部からの
命令だと思うので、提督も大変なんでしょうね……。

まあ、一応この世界の艦じゃないからね。仕方ないと言えば仕方ないか。
ちなみに提督曰く

1. 私達は艦娘である。艦娘は大日本帝国海軍の軍艦のみが確認されている。
2. 敵は深海棲艦という。日、米、英、独など複数国の連合艦隊だが国旗や国際連合
旗は付けてないので見分けはつく。
3. この世界の海は前いた世界とほぼ同じ地形、海流、気候である。が、羅針盤が息
をしない。
4. 深海棲艦は仲間以外手当り次第に船舶を攻撃し、沈める。陸地を侵食し海に変え
る。が、なぜ攻撃するかはわかってない。
5. 陸上では艦娘、深海棲艦ともに大幅に弱体化する。が、陸上でも特徴は引き継が
れる。例えば走るのが速い、夜目が効く、など。陸上型の例外もいるようです。

6. 現代兵器は一応通じるが効果は今ひとつ。艦載機程度なら撃ち落とせる。が、基本ぼろ負けする。

8. 艦娘は自分の艦を手足のように操作出来る。また、男の艦娘は今のところ確認されていない。

9. 乗員、乗組員は妖精となる。一部例外の人はいるが基本人は乗れない。人として乗れる人は極めて稀である。その人は執事、巫女、等といういろいろな呼び方をされる。妖精の技術はブラックボックス状態だが極めて優れている。

10. 艦装と呼ばれる装置を着用することが出来る。一応生身でも洋上を移動できるがその装置をつけると楽に移動できる。また、船は仮想領域に展開、格納できる。

らしい。

(ちよつと待て、ミサイルつて効かないんじや。というより超☆規格外つてことですよね。というか、こんなでつかい船格納展開出来んのかよ。超便利だなこのシステム)

私用の艦装は後で工廠で作ってこいと書類を渡されている。

勝手に作つていいものなのかこれ。

「あ、そうそう。夜雨ちゃん、だっけ？自己紹介が遅れました。私はパラオ第一鎮守府の提督よ。便宜上姉提督と呼ばれるわ。そしてこっちの娘が私の秘書艦の鹿島よ」

女性にも提督っていらっしやるんですね。

でも、姉、提督ってことは…

「秘書官の演習巡洋艦鹿島です。よろしくおねがいします。ふふふ」

鹿島と名乗った娘が丁寧にお辞儀をする。

白髪癖つ毛のツイントールの髪が踊る。しっかりとした秘書艦娘さんのようだ。声も可愛い。

「んで、そつちに突つ立つてる男が第二鎮守府の提督。ほら、シャキツとしなさい」

「あー、姉貴うっさい。小言は後で受け付けるから今は余計な事言わないで。あ、第二鎮守府の提督だ。第一鎮守府の弟でもあるから弟提督と呼ばれてr」

「あんな余計なこと言い過ぎよ！」

姉提督の盛大なツツコミを後頭部に入れられる。今の絶対回転動作を入れたフルス

イングですよね……痛そうに頭を抱えてうずくまる弟提督。

「え、えと、私が弟提督の秘書艦の五月雨つていいます！ よろしくお願いします。あ、あれ、あれれ、あれれれれ」

急に慌てる五月雨。必死にお辞儀をしようとしている。よく見れば水色の長い髪の毛を思いつきり右足で踏んでいる。

お辞儀をしようとして体を前に傾けているのだが、髪の毛に引っ張られてほとんど傾かない状態で止まる。

つまりこれは……ドジっ子？なのかな。普通に可愛い。

「あれれれれ……なんでお辞儀出来ないのぉ……」

鹿島と姉提督がホンワカしている。その後には控えている大淀も笑いを必死にこらえている。どうしよう、ちゃんと指摘するべきか。

「とりあえず、春雨ちゃんのこと、ありがとね」

姉提督が五月雨から意識をこちらに向けて彼女のドジに意識が向かないように話の

話題を変える。

「春雨の事についてなんだが、なにかしたのか？ 装備も外装も俺らが知らない金属のようだし」

「あー、沈みかけてたので引つ張りあげてちよちよと直しました。若干代用部品使っちゃいましたが、何か問題でもあつたんですか？」

「若干じゃないだろおい……どうやったたら洋上で近代化改修カンストと改二……いや、なんと言えばいいんだ。便宜上改剛としておくぞ。をしたんだよ」

「え、うちの応急修理班が応急修理をしただけです……」

「いやいやいや、改造としか思えないよ。洋上完全修理に高性能レーダーの付与、防衛装甲の追加にボイラーが見たことない羽根車に変わってるし、あの砲、ただの12・5cm砲じゃないでしょ。これのどこが応急処置だよ」

「え、壊れてたので普通の電探を付けただけですよ？ ボイラーは我々の知識じゃ直せなかつたのでガスタービンエンジンに積み替えさせてもらいました。本人が嫌がるようなら載せ変えといてください。砲に関しては127mm連装速射高角砲にして連射性

の向上と対空射撃をする時により上を向くようにしておきました。というか、それがデフォルトだと思っっているのですが…」

「「え」」

由良、鹿島、姉弟提督、長門型2人がフリーズする。

話についていけない五月雨と本人の春雨以外がフリーズしたと言った方が適切か。

「ま、まさか、とは思いますが…違う感じですか…?」

恐る恐る聞いてみるとなんとか再起動に成功した姉提督が

「そのまさかね」

となんとか答えてくれた。

「あれ、そうだったんですか…。常識が通用しないとは思ってなかった…」

「常識どころか吹っ飛んでるよ。それほんとに。つか、姉貴。こいつホントに大丈夫かと思っただけど結構マジだわこれ」

「吹っ飛んでるだけで済んだらいいですけどね。あと姉貴やめろ」

「あ、御主人様く大本営から返事きましたよ」

「漣か、ありがとう。どれどれお、これは……読み上げるぞ」

弟提督の顔がみるみる明るくなっていく。

「該当戦艦については第1、第2鎮守府に着任したものとみなせ。正式な手続きは演習の結果も考慮に入れて判断する」だぞうだ。良かったなお前ら」

提督室が歓喜の波に飲まれる。中には涙を流す娘や抱きついてくる娘も居た。

「と、とりあえず部屋割りと演習のルールは私の方で決めておきますね」

と、姉提督が言った直後

……ドドドドドドドドドド

いきなり地鳴りのような轟音が響き渡る。歓喜に湧いていた皆が皆サツとドアから弟提督とを結ぶ線から離れる。長門と呼ばれていた艦娘が姉提督前に躍り出て身構える。

弟提督は五月雨を姉提督の後に下げて完全に防御態勢。え、何が起こるの。

私は動かずあたりをキョロキョロする。その行動がまずかった

「ヘーイ提督ウー！！バーニングlove！！♡」

蝶番が外れドアが文字通り粉碎され飛び散る。扉を開けるのにそのような力を使う人は見たことがない。というか、パワーにものを言わせて開けたに違いない。

扉の破片と共に巫女服のような服を着た金髪碧眼の女性が放物線を描いて空を舞う。

しかし、扉を粉碎するのに力を使いすぎたのか、跳躍の力が足りないのか。扉の破片とともに物理法則に従って弟提督の目の前にいる私の所に落ちてくる。破片と女性の間違いなく私に直撃コース。

しかし、悪あがきで私の頭を踏み台替わりか跳び箱代わりにして弟提督に飛びつこうとしていることは直感でわかった。

ならば対応は一つ。

破片を浴びてしまうが、飛んできてくる人の片腕の袖を掴んで背負い投げの要領で床に叩きつける。その一択。これが最善であろう。

扉の破片は私に降ってこなかった。流石に女性は降ってきたが。

「アウチツ！」

投げた女性が変な声を出したが気にしないでおう。

「こんにちは。そしていきなりゴメンね。というか、これは新手の歓迎？それとも
こんにちは、いい天気ね！　そしてサヨナラ
出　オ　チ　？」

床に伏した女性に声をかけて制圧体勢のまま問を投げる

しかし、その問の答えが返ってくる前に

「お姉様に何すんじや我エ!!!」

「比叡が！敵！とります！」

鬼のような形相をして同じ服の2人が飛んできた。

いきなり胸ぐらをつかんでくる。2人は目がマジだがそんなに怖くない。

膠着状況で睨み合いが続く。

「そんなに殴り合いがしたいのですしたら、演習で決めたらどうでしょうか。はい」

突然横から吹いた声が場を凍りつかせる。

私に投げ飛ばされて床でもがいていた金剛や私に飛びかかってきた2人がその場で

動きを瞬時に止めて振り返っている。

意外にもその声の主は金剛型戦艦3人に絶対零度の笑みを浮かべた春雨だった。

「一応鹵獲艦は提督と同等の丁寧さで扱うのが鉄則なのを知らないんですか？ それと、鹿島さん、演習の話はそれで構いませんね？♪」

鹿島にその状態で無慈悲にも話を振られた鹿島は

「アツハイ」

としか答えられていない。というか、この空気の中で固まっていけない人が居ない。

「えつと…まだ正式にこの鎮守府に夜雨ちゃんが所属していませんので、その手続き及び大本営からの指示、調査等が終わってからデータ取りついでの演習を行います」

続いて再起動に成功した姉提督が方針を固めていく。

「とりあえず、お前ら、俺に抱きついてくるのはいいけどほかの奴らがヤキモチ焼いたりして場の空気が乱れるからやめろよな。てことで、この部屋から3人も退出。わかったか？」

姉提督と弟提督の見事な連携プレイで金剛型戦艦はすごすごと退散していく。

「ごめんなさいね、いつも元気いっぱい
で弟提督大好きな金剛四姉妹で。あ、後
これがあなた用の端末。ここで鎮守府の
情報やメンバーが見れるわ」

姉提督に手渡された割と旧式の端末。
私の世界ではグラスタイプ眼鏡型、ウインドウタイプ仮想展開型などが主流で
タブレットタイプ端末型は少し前にすだれ始めた感じだ。

しかし、私は仮想展開型、眼鏡型、
端末型の三つとも使っているので一応使
えるはずだ。

そう思っていた私は甘かった。

ー物凄く使いにくい。そしてすごく重い。
物理的にもソフトウェア的にも。

後で龍奈に私の端末にシステムとかそのへんを移してもらおうかな。

「姉提督さん。この端末の中身全部そのまま移していいですか？出来れば私含めて4人分も欲しいのですが」

「移すのは別にいいけど、なぜ4人分？」

「私の艦に私と似たような人が3人居るんです。」

「「はい？」」

提督室に居る全員が全員こつちを向いて疑問符を並べてまたフリーズしていた。

「え？それが普通じゃないの？」

「嘘でしょ……」

姉提督が口元を抑えている。

「巫女が……3人も……乗ってるなんて……」

全員が全員信じられない的な顔を向けていたのでなんか気まずい。

（ていうか、巫女って神社の人ですよね）

とりあえず、端末をいじって見ることにする。

鎮守府の見取り図、島の概要

重油や軽油や航空機燃料などを示す【燃料】

砲弾、銃弾、魚雷、爆雷などを示す【弾薬】

装甲や船体の元となる【鋼材】

航空機の大元の元【ボーキサイト】

そして何故か”NEW”マーク付きの【貴金属】

の残量が表示されていた

結構備蓄はあるようだが何故か弾薬欄の魚雷残量が表示されてるところの下だけ、
unknown, となっていた。

(まさかと思うが私専用のミサイル欄なのかな)

「あ、そうそうここのページ見て。ここの赤い線で囲まれてる艦娘が私の鎮守婦所で青のアンダーラインが引いてあるのが私の自慢の第二連合水雷戦隊ね。未だに負け無しなのよねー」

姉提督が私の後から勝手にタブレットの画面に手を伸ばし、表示を変える。あん

まり後ろからは操作して欲しくありませんが…。

【第2水雷連合戦隊】

第1艦隊

旗艦 阿賀野型 軽巡洋艦 矢矧 改

球 磨 型 重雷装巡 木曾 改二

秋 月 型 防空駆逐 秋月 改

秋 月 型 防空駆逐 照月 改

綾 波 型 駆逐 逐 艦 潮 改二

綾 波 型 駆逐 逐 艦 龍 改

第二艦隊

旗艦 川内 型 軽巡洋艦 神通 改二

陽 炎 型 駆逐 逐 艦 浜風 改

陽 炎 型 駆逐 逐 艦 雪風 改

吹 雪 型 駆逐 逐 艦 吹雪 改

睦 月 型 駆逐 逐 艦 睦月 改

吹雪型駆逐艦 深雪 改

12隻の水雷戦隊と言ったところか。

確かに素敵、機動性、対空、対艦、対潜のバランスのいい艦隊だ。

だが、航空攻撃がほぼ出来ない以上、空母機動部隊とかち合ったら夜戦勝負になると私は思う。

それでいて連戦連勝とは相当な度胸や技量を持っているか、戦艦隊や航空機動部隊の前衛とし制空権優勢状態で戦っているか、である。

「ちなみに弟提督の鎮守府からは誰が出る予定ですか？」

「はい、はいよ」

だーかーらー。私の中から操作しないで……

【第1航空戦隊】

旗艦 赤城型 正規空母 赤城 改

加賀型 正規空母 加賀 改

蒼龍型 正規空母 蒼龍 改二

【第一戦艦隊】

	蒼	龍	型	正規空母	飛龍	改二
	雲	龍	型	正規空母	天城	改
	雲	龍	型	正規空母	雲龍	改
	旗艦	金	剛	型	高速戦艦	金剛
		金	剛	型	高速戦艦	比叡
		金	剛	型	高速戦艦	霧島
		長	門	型	戦艦	長門
	伊	勢	型	航空戦艦	伊勢	改
	伊	勢	型	航空戦艦	伊勢	改
			型	航空戦艦	伊勢	改

見事に戦艦と空母のみの編成である

「うわ、戦艦と空母ばかりでバランス悪っ！」

まさかの姉提督と同じことを口にする私。誰が見ても火力厨の編成としか思えない、
そういうレベルだ。

「返す言葉もない……」

「まあいいじゃないの。私たち二人合わせればピッタリの編成になるし。夜雨ちゃん、さつき言ってた巫女さん3人に上陸許可だから、工廠に連れてきてくれないかな？多分手続き的に明日になると思うけど」

「いや、巫女さんじゃなくて…」

「はいはい連れてくる。ついでに私を艦内案内してほしいな」

「あっはい」

問答無用というか、無理矢理というか。

私は反論を諦めて艦に行くことにした。

—————

0—4—B 　　く羽根休め、これからの家く

姉提督 side

「おー、凄く快適ね。こんな船が深海棲艦を一方的に殴り倒したなんて信じられない。」

私は防空戦艦夜雨を一通り見て回るために夜雨と春雨と由良と瑞鳳と5人で艦内に入っていた。

弟提督？ 提督室で書類作業を押し付けて来たった（

しかし、ものすごく広い割に物凄く快適なのである。

なんせ冷暖房完備かつエレベーター付きの過窒化オゾンウム＋蒸留電解式循環濾過処理装置により水が使い放題。

海水が燃料という核融合原子炉により電気も使い放題。

内装は大和型戦艦には劣るもののかかなり高い水準となっている。

お風呂はこだわりのヒノキ風呂。部屋は二人部屋だがシャワールーム完備。食堂と簡易的な娯楽室まで完備。

なんだこの戦艦は…。

あ、ちなみに過窒化オゾンウムというのは、窒素を水に過剰投入し、高音高圧の下でオゾンと触媒で反応させた液体のことです。

人体に完全無害である他、沸騰させると体積が水だけ沸騰させるより数倍膨張するそうだ。消火液としても優秀だが密室はNG。

沸点は窒素を溶かす量によって変わるらしい。

「この分厚い扉の向こう側がエンジンルームです。今は止めているので立ち入りはできませんが、稼働中は一切の立ち入りができなくなります。核融合反応の生成物である中性子が飛び交って危険ですので」

「……はあ。」

もうこれが何度目の疑問符&思考停止なのか数えられないぐらいにこの船はぶっ飛んでる。

「えとですね、海水中に含まれる水素と重水素と三重水素を超高温高圧下で……」

ちゃんと説明してくれているのだが、私の持ち合わせの知識ではさっぱりパーである。というか、やつとこき大型安全原子炉が安定稼働し始めて国の電力不足が解消され始めてる時に、超短時間で燃料1gからタンクローリー5、60配分の石油燃料からできる電力を発生させる装置が目の前に存在している。

というか、この戦艦には規格外の電力供給能力があるのね。最悪停電した場合この娘を発電機の代わりにするのも手だけどそんな事態は極力避ける運用をしないといけないのね。

「……まあ、これが8台全部合わせても急速前進等でフル稼働させると電力供給が追いつかないので初動用と発電用のガスタービンエンジンを2台ほど載せてます。完全に発電用なので推進力に使ってないから

ボイラーなどのエンジン類

主

缶

には入らないんですけどね」

「参った……もう説明は大丈夫。頭パンクしちゃう」

両手を上げて降参の合図をする。

私の頭でも理解はできるがぶっ飛びすぎてついていけない。

「次、航空機格納庫行きますね」

そうやって歩き出した夜雨を見失わないように走り書きのメモを取りながら小走りで追いかける。

ぶつちやけ歩く速度に自信がある私よりも歩くのが速い。

扉二つ抜けた所で真っ青な機体と無骨な2機とプロペラがありえない方向で付いたが出迎えてくれた。

普通に考えたなら空を飛びそうもない物体が4つも置いてある。

「ここが航空機格納庫で奥からオートジャイロみたいなのが深淵、旧大日本帝国？でしたっけ？の震電みたいなのが桜花改、青い前進翼の機体が神電Ⅱです」

割と日本名。まあ、他の世界とはいえ日本で造られたから当たり前か。

メモ帳にひたすら簡易的な説明を書き込んでいく。

「質問いくつか宜しいですか？」

「はい、好きなだけ聞いてください」

「なぜ春雨を助けたの？」

「愚問ですね。困っている人がいれば助けます。私が春雨型というのもありますけどね」

「それは我々に協力してくれるということかな？」

「少なくともあの気持ち悪い奴らに魚雷いきなり撃たれてますのでね。好意とは取れませんが」

「そういえば、副砲どこですか？外見限りでは無かったですか」

「積んでないですよ。そんな物。邪魔ですもん。重くてスペースを取る割には小型高速艦に追従できるほどの旋回速度が取れなくて、ね」

最早副砲嫌いかと思うような辛口回答。

私にはまだまだ聞きたいことが沢山あるので質問はまだまだ続いた。

新品のメモ帳が全て夜雨に関して埋まってることに気がついたのと、由良、春雨、瑞鳳の全員が戦意高揚状態になっているのは別の話。

「長々と質問攻めごめんね？そういうえばさつき夜雨ちゃんはデータ移し替えるとか言っていたけど何に移しかえるのかな？」

「あ、すっかり忘れてました。今からやります。そのついでに簡易工廠に案内しますね」
そう言って連れてこられた簡易工廠もまたぶっ飛んでた。

「えっと、この部屋が簡易工廠の、一部 となります」

「「え、これで一部?!」」

春雨と夜雨以外が声を揃えてそう言ってしまいうレベルで広い、大きい。

そして簡易とは思えないほどの充実した機材がある。

「残りはこっちです」

そう言って隣の部屋に行くとパソコンが5〜6台ほど置いてあるだけの部屋があった。

機材がある部屋と比べると案外こっちは少ないが重要度はこっちの方が上のようだ

「このパソコンを明石や夕張に見せた時の反応が楽しみです。はい」

「確かに気になるわね」

「特に由良さんは夕張の方が、でしょ♪（はい♪）」

「貴方達ねー／＼／＼」

（春由良キマシターw）

瑞鳳と春雨がニヤニヤしながら便乗して由良をいじる。

対する由良は耳まで真っ赤にしながら反論するが、見ていて可愛い程度の反論しか出ていない。

瑞由良もありだな。うん。

「え、えと、とりあえず、さっさと済ませますね」

夜雨はワイワイやってる3人とキマシターしてる私を尻目に作業を進めている。

というか、進行速度はやつ。

「ちなみにそのPCの性能はどれぐらいなの？」

ワイワイやってた由良が聞く。絶対夕張に作らせるつもりだ。

目つきが違う。

「えーつとW^{ウィット}i p p l e s X P 2 0 0 0 改のはずなので……CPUは龍奈さんがいじったからちよつと分からないけどメモリーが4 P B^{ペタバイト}がデフォルトだから：えつと」

「なんですかその未知数単位……」

由良と瑞鳳が固まる。春雨に関してはもう何を言っているのかわからなさそうだ。

「1 P Bが多分1, 1 2 5, 8 9 9, 9 0 6, 8 4 2, 6 2 4 (約1, 1 2 6 兆) バイトかな?なのでその4倍以上です」

「夜雨ちゃん、それ余計悪化したわね。えつと、提督室のデスクトップパソコンはわかるでしょ?いつも私が使ってる。アレが1テラバイトってのはわかるよね?単純計算でアレの1, 0 2 4 倍の記憶量があるのよ」

「[[はあ]]」

3人が再びフリーズ。

「要は物凄く頭のいいパソコンってことです」

「最初からそう言えば良かったのでは?」

「そうでしたね。ごめんなさい」

移し替えと四つに増やすことは五分足らずで終わってしまった。

と言うより「データを吸い出すだけに3分もかかっている」と考えると恐ろしい。

「由良さんが言っていた夕張さんという人、ってこういうの好きなの?」

「え、えと、はい大好きです。その……できれば……ですけど……私専用のも含めて2台分……欲しいです」

何故か由良の顔がほんのり赤色に染まっている。由良ってこういうのに強い人が好きなのかな。そしてさり気なくか頂戴アピール。

「私も欲しいです、はい!」

「私も欲しい」

春雨と瑞鳳がずるい、私も欲しいアピールをする。

「あー、3人とも待って待って。姉提督さん? 所属艦娘って何人います?」

「故障や破損、不調機もあるかもしれないので同じ型番のを300作れば足りるはず。余った分はストックすれば大丈夫よ」

「了解、300か。後で作らせておきますね」

その後約1時間ちよいで全員に行き渡る分の未来型端末が出来て鎮守府の皆が
 戦意高揚状態化したのと言うまでもない。

—————

夜雨 side

提督に連れられて鎮守府案内と遅めの晩ご飯を済ませた私は艦娘用大浴場に来てい
 る。

ちなみに私用の艤装と端末は妖精さんが作ってくれてる感じになります。

さっきの一悶着……食堂でご飯を食べていた時、龍驤というフラツシュデツキと呼ば
 れるタイプのフラツトトップ甲板、通称「フルフラツト飛行甲板」の美しい娘と千歳、千
 代田という水上機+甲標的母艦のムチムチ姉妹が胸のサイズで口喧嘩(?)をしていた。

その時、鈴谷というギャル系重巡洋艦や青葉という名前の記者系重巡洋艦他の艦娘が
 悪ノリで周りを巻き込み始め、遂に私まで空母だけに爆撃ゲブンゲブン。

巻き込まれてしまったこと……を思い出す。

(私も、もう少し大きな胸が欲しかったな……)

一般の人と比べてかなり控えめな胸のラインを視線でなでながら風呂への扉をくぐる。

「おお、広い」

お風呂はかなり広い。露天風呂や檜風呂、松風呂、岩盤浴、ヨーロッパ仕様の湯船、サウナまである超豪華仕様だ。

軽く見渡したところ私以外居ないようだ。

(割とお風呂はすいてたら嬉しいよね)

そう思いつ、つかげ湯をしてたらいきなり

「そうね。割とすいてるわよふふ♪」

とか真後ろ耳元で囁かれてみてくださいよ。普通の人なら心臓止まりますよ鹿島さん。

「ビツクリしちゃった?♪」

「いえ、気がついてました。振り返った方が良かったですか?」

「そこは素直に驚いて欲しかったかな?んふふ♪」

私はため息をつきつつ檜風呂の湯船に浸かる。日本に住んでいるなら多分1度ぐらいは浸かったことあるんじゃないか。

ザバア：お湯が少し溢れて床を濡らす。お風呂に浸かった事がある人はわかるであろう、至福のひとつが始まる。

(この所属の艦娘はこんなお風呂に毎日入れるのか……)

「そういえば夜雨ちゃん、明日演習なんでしょ？艦装修理調整間に合いそう？」

「うちの妖精さんに後で聞いておきます。慣らしの時間は流石に無さそうですけど、ぎりぎり間に合うんじゃないかな」

「てことは、私たちの鎮守府の最強艦隊とやりあうのよね？どう？勝てそう？」

「艦隊編成は見ました。もしそのままの状態で明日の演習に出てくるとしたらルールもよみますけど、全員大破轟沈判定で終わりますね。もちろん私は無傷で」

「そう簡単に終わらないかもよ？」というより、あなたの兵装は35.6cm連装砲と長12.7cm高角砲と35mm6砲身バルカン砲、そして艦載機4機と少し速い程度の脚だけ。実質、艦載機しか脅威にされていないわね」

うわ、私の想定カタログスペックがおかしい。

流星に速力や高性能レーダーやAGSや光学兵器、ミサイルの存在を公開してないた
めか、こうなるのは仕方ないと思うが。

「まあ、そうですね。鹿島さん、体洗ってきます」

無難な返事を返して話を切り上げる

(でも、αレーザーには気が付かないと思うけど、流星にミサイルハッチやAGS砲塔に
は気がつくはずだよね……そもそも、そういうのが存在しない感じなのかな)

「よーるーサーーめーちゃん♪」

鹿島の豊かな二つの丘が背中を押し当てられる。そして耳元で囁かれるねっとり
した声。気配を消していつの間にも移動してきたの?!というか、考え事をしていた頭で気
がつくはずもなく

「ひゃいっ?!」

思わず変な声を出して返事をしてしまう。

「突然だけど……耳元で囁かれるのは……好き?」

耳元で優しく囁かれる。

独特の感覚に体が震え力が少し抜けたその一瞬を鹿島は見逃さず、手に持っていた体を洗うタオルを奪われる。

「頭洗うから目を閉じてくださいね、はい♪」

「私も体洗いますね〜」

気がついたら春雨が頭を、鹿島が背中を、黄色い髪の毛の軽巡洋艦武くらいの身長限の人が上半身前面を、瑞鳳が右足を由良が左足をくまなくわしゃわしゃ洗っている。

もうここまで来たら抗うことが出来ないので大人しく抵抗するのを放棄することにした。

「さっきの胸の話結構グサツてきたでしょ？ふふふ♪」

（ば、バレてるし……）

「胸はそのうち育ちますよ」

「阿武隈も地味に被弾してたよね」

「お姉ちゃんそれは違いますー！」

「明日の演習、頑張ってください、はい♪」

抵抗を放棄したのが不味かったのだろうか。

風呂から上がると半ば強制的に髪の毛や体を拭かれてる私がいた。というか、自分でもできるのに「させて欲しいです♪(はい♪)(うふふ♪)」と強く言われると断れない私も悪いのだが。

脱衣場から出る頃には誰かに抱かれてしか立つことすらできないぐらい、情けなく力の抜けた状態で思考のとろけた私が出来上がっていた。

(長風呂をしすぎて少しのぼせてしまった……)

「夜雨ちゃん?のぼせちゃったの?」

「そうみたいです。担いでいきましょうか」

「了解です。はい♪」

幸いにも一緒にお風呂に入ってた

由良、瑞鳳、春雨、阿武隈、鹿島が文字通り担いで部屋に連れて帰ってきてくれたので風邪を引くということは無かった。

そして、姉提督にこの光景を見られて自動的に同室にされた。

(とういか、同室つてことは毎日される可能性があるつてことですよね…)

「ふにゆ…重かったです、はい…」

「あら、やりすぎちゃったかしら。ごめんね？」

「んふふ〜♪」

さっきのお詫びとか言つて瑞鳳に耳かきをしてもらっている。

普通に上手い。的確に気持ちいいところをコリコリ耳かきでかいてくる。

「痛くないですか〜？」とか耳元で囁かれたらわかかと思う。

どんどん思考が止まっていく。そして思考が完全に止まり本能に従うことしか出来なくなる。

とてつもなく眠いから寝るといふ本能。

「は〜い。お耳、綺麗になりました〜」

「オフトウン…ネリユ…」

「え、ちよ。それ私のお布団ー！」

完全に電源の切れた私は先に敷かれていた瑞鳳のお布団に転がり込んで意識を夢の国へと滑り込ませる。

その後、阿武隈と由良の

「ここはみんなで平等に一緒に布団で寝ませんか？」

という提案で普段ベットの鹿島や春雨も同じ布団で…とはならず、流石に入り切らないという事を見越して3人分の布団を横並びにしてみんなが私に抱きついて寝た、という事に翌朝まで私は気が付かなかったようだ。

0—5—A　　く　　バーチャル　　デモ　　ファイト　　く

夜雨 side　同室の5人にもみくちやにされた翌朝　in 鎮守府の食堂

「やつと朝ご飯食べれる……」

目の前に美味しそうな料理が並べられてるのにおあずけをされた状態で放置された犬の気持ち少しわかった気がする。

少し早めの朝ごはんとして和定食を食堂で頼んだのだが、それが不味かった。

完全に冷えるまで質問されるとは思ってた。しかも記者気取りの重巡1名が取材を始めるといっておまけ付きのフルコース。

なお時間は昼前である。

「残念。まだ食べれないわよ。ルールの確認のための用紙に承諾お願いね」

「ひいひい……」

ぐったりしていた私にいきなり追い討ちをかけるような姉提督。無慈悲である。そんな私にお構い無しでルール確認用紙の束を私の横の座席に置く。

今絶対にドサって言ったよねこの紙の束。

「とりあえずさっきの青葉……って言ってもわかんないよね？ 記者っぽい人はシバキ回しといたよ。質問めんどくさかったでしょ。ごめんね？」

さっきの取材してた人は青葉って言うのか。ほうほう。

「そういえば、今日演習訓練するって言ってたでしょ？ 少し変更になったから。詳しくはさっき置いた紙に目を通せばわかるよ」

「あ、御丁寧にどうもです」

「そういえば、夜雨ちゃんって、防空戦艦だったよね？ 昨日聞き忘れてたけど、何装備してるの？」

「さり気なく聞き出そうとしても答える気はありませんよ？ あ、一応見たままの装備です」

姉提督がこれは勝ったと言わんばかりの満面の笑みになる。わかり易いんだよねこういうタイプの人って…。

「なるほど、35.6cm連装砲と長12.7cm高角砲と多砲身35mm機関砲と目

と耳ね、わかったわ。夜雨ちゃん、お互い全力でよろしくおねがいますね」
姉提督はきつちり敬礼をする。流石鹿島さんの指導をきつちり受けているだけはあるようだ。

それに答礼をして急いで冷えたご飯を口にかき込んだ。

ここの飯は冷えてても美味しいです。

.....

i n 夜雨CIC

「今から一応ブリーフィングを始めます。今回の主目標は敵艦隊の殲滅です。机上^ゲ演習^ムです。すげえね。敵艦隊は公開されてるだけで戦艦6空母6巡洋艦4駆逐8。ここまででなにか質問は？はい、航空管理長」

「航空機の使用はしない方がいいと思うっす。変なデータ取られてこき使われるか、解体分析される未来しか見えないっす！」

「その点は心配無いわ。昨日私が予測したルールと若干変わった。これを見て」
今朝姉提督から貰った紙を作戦会議台と化してる机に広げる。

紙の端っこ
ドモ作者です☆

演習方式……机上演習^{ゲイム}

ステータス……w s g 2 pでちよちよつと私が作りましたデータを（艦隊……艦隊は同室の者と組むこととする。

夜雨のステータスについて……大和型戦艦を基準とし、本人の同意の元で制作する。主人公補正はマシマシ。

あとはテキストに頑張ってね〜夜雨ちゃんb

読者の皆様は置いてきぼりにはしません。任せてください☆

紙の端っこケッコ

☆キンコーン☆

【☆作品の演出です。間に受けないように☆】

「艦長、何ですかこのテロップ。後、おい作者てめえ引つ込んでろ」

副長、裏で色々あったからってそれはダメでしょ。

「という訳ですすね。机上演習ゲイムとなりました。私と航空機パイロット全員と修理班……そうだな。龍奈ちゃんが妥当かな。にはこれが終わったら来てもらおうことになります」

「いい感じに自艦の戦力が誤魔化せそうですね。後は作者をこう……シメシメ」

副長がいつの間にか腹黒モードになつてるのは置いときましょう。

私達の基本的な戦闘スタイル、各個撃破ができない代わりにステータスがごまかせる。ある意味ラッキーである。

「龍奈ちゃんと航空機乗りの3人は付いてきて。その他は自由にしていいですよ。以上。なにか質問は？」

「はい」

「副長さんどうぞ」

「これって完全に運任せですよ？ラッキーパンチが飛んでくるかもしれないので慢心せずをお願いします」

「そうなりますね、頑張ってください。ではお迎えが来たので行つてきます」

CIC扉の圧縮空気を背中に気合を入れ直す。

.....

in 演習室

「これから演習を始める。戦闘初め！」

「「「「よろしくお願いします！」「」」」」

パイロットs、由良、阿武隈、春雨、鹿島、瑞鳳、そして私が姉提督に指示された部屋に入る

ちなみに今私たちがやっている『ゲーム』は演習用の最先端のシステム

『艦娘用演習ネクストポータブル 2. 4. 12-β』

という、PVPゲームです。

とりあえず即席ですけど私の船のデータができたようなのでサクッとやっていきま

.....

「……どうやって動かすのこれ」

「……どうやって動かすのこれ」
厳密には航空機パイロットはいつも乗ってるコックピットの原寸大模型があるらしい。

しかし、私に用意されてた部屋にはそれらしきものが無いのである。唯一あるのは部屋の真ん中にある全球面スクリーンのついた椅子らしきものだけである

「こゝ、困ったな」

とりあえずそれの中に入しかなさそうだ。

少し窮屈だが割と大きな全面スクリーンには3重にぼやけた画像が写っている。

視界が揺れて正直かなり気持ち悪い。

椅子の座り心地はかなり良い。プラネタリウムの椅子みたいにフカフカでふわふわ。

しかし、視界のせいでほぼ台無しになっている。

(えーっと、起動ボタンを押して初期化、設定書き換え、初期最適化、フィッティングをすればいいんだっけ……)

起動ボタンを押す。ウインドと音声システムが立ち上がる。

『艦娘用演習ネクストポータブル 2. 4. 12-β』

の文字が浮かび上がり、読み込みが進む。

読み込みが85%を過ぎたあたりから急激に眠くなった。

(…みんなの迷惑にならないように…起きてなきや……)

しかし、催眠術にかかったかのように体は動かず、頭の回転も徐々に止まっていく。

ローディング100%の文字を私が認識することは無く、眠りに落ちた。

0—5—B 〈電子の海、0と1の世界〉

(眩しい……)

目を閉じているのに世界が光に溢れている。

頭の中の違和感。椅子に座っているはずなのに、私は立って眠っている。

(え、寝てい……る……?)

(……これは不味い)

演習に参加出来ないではないか。

目を開ける。

私は洋上に自らの二つの足で立っていた。

波に揺られてかなり気持ち悪い。

目の前に突然ウィンドウが現れる。

『フォーマット完了、フィッティング12%……』

フィッティングのパーセンテージが上がるにつれ気持ち悪さが減っていき、視界がクリアになっていく。

『フィッティング完了、オンラインに接続中……完了』

『W E L C O M E Y o r u a m e . 』

とりあえずフォーマット、フィッティングは終わったらしい。

『エンジンテレグラフ起動完了。正常作動確認。必要情報計器表示……完了』

突然の急加速。私は後ろに転倒しそうになる。

慌てて受身をとろうとするがスタビライザーが作動していて転倒することは無かった。

(多分これを切るとすぐに急速潜行しダイナミック沈没そうですね……)

『右舷回頭45。左舷回頭45。前進原速……主機動作正常を確認』

私の意思に関係なくグワングワン振り回される。スタビライザーが無ければ今頃海水まみれになっていたに違いない。

『主砲右舷旋回90。同じぐ左舷旋回90……Error [1番6番旋回せず]』

1、6番砲はαレーザー砲、つまり別系統の砲なので私は迷わず主砲では無い扱いに

設定することにした。

『……設定完了。ワールド生成中……Now loading……』

『ロード完了。後ろを向いてください』

この文字を残して周りの景色が一変する。

辺りを見回す。どこかの海域を模したような所である。

後ろにまだ見慣れていないが同室の人がいた。

瑞鳳を中心とし、私が最先頭、左右前列に鹿島と春雨、左右後列由良、阿武隈。簡易的な五角形の輪形陣である。

「航空機は瑞鳳ちゃんが指揮、対潜は春雨ちゃんが、対空、対艦攻撃は夜雨ちゃんね。うふふ」

鹿島の声が頭の中に直接響くという初めての体験。

結構気持ち悪い感覚だった。

「どう？海の上にたってる感覚には慣れた？」

「え？」

自分の足元を見る。戦闘用機装を纏った私は確かに海の上に私は自らの立っていた。

「……おおお」

フラフラとしながらもなんとかバランスは取れているようだ

「ぶっ付け本番みたいですね、はい♪」

「一緒に頑張りましょう♪」

春雨と阿武隈の声が頭の中に響く。

しかし、私からの返事は一々声に出さないと届かないようだ。

(頭の後、上30cmの所を意識して言いたい事を思い浮かべるってどういう感覚なんですか……)

とりあえず前に進もう。じゃないとなにも始まらないみたいだ。

「両舷強速（約15knot）…私は微速巡航になるのかな？」

メガネの左下辺りでエンジンテレグラフがチーンと音を出して動く。

皆に合わせるため、後ろを見ながら他の艦との間隔を見つつ赤黒調節を……。

「両舷赤……30じゃ足りないかな。とりあえず45」

しかし、それでも一気に距離が離れた。

「っ?!両舷再微速！」

一気に僚艦との距離が詰まる。

「最悪○knotで大丈夫らしいよ？試してみたら？」

「…了解…前進15knot」

前後に揺れ動きながらなんとか距離を保つ。

（速度差があり過ぎるので赤黒ではなくそもそもその出力調整で行った方が良さそうですね……）

「夜雨ちゃんスキーやアイススケートとかインラインスケートとかをやった事あるならその感覚でもいいらしいよ」

由良のアドバイスが飛ぶ。非常にこの一言は有難かった。

「あら、慣れるのがとても速いですね。うふふ。私の出番も作ってくださいね？」

鹿島が若干ふくれっ面気味に言ってくる。しかも同性でもドキツとする笑顔からのこれである。反則でしょこの女子力。

『最適化……完了……』

突然、また頭の中に違和感を感じる。見えてないものが見える違和感。

目を閉じてその在処を探る。

大きい船が12隻、小さい船が12隻。航空機が8……。

これが敵艦隊、ですね。

(えっと、これ報告した方がいいのでしょうか)

「由良さん索敵機飛ばして〜」

「はい了解。由良の良いところ、見せてあげる♪」

カタパルトから零観が射出され、飛び立つ。

「あとは発見待ちね」

（うわあ…非常に申し訳ないけどもう見つけてるのですが…言うべきなのでしょうか……言わないでおいた方がいいのでしょうか…）

「よーるーさーめーちゃん？モジモジしちゃってどしたの？」

いつの間にか真後ろに来ていた鹿島が耳元でささやいてくる。今回は真面目に気が付かなかった。

「ひゃい?!べ、別に敵艦隊なんて発見してなんか無いで……あ。」

まさに自爆ツンデレというヤツである。

「なるほど、見つけたのですね。どこですか？」

「えっ、見つけたの？」

由良と瑞鳳が驚きの声を上げる。22号電探を積んでいる鹿島はAスコープをのぞき込むが距離が距離だけに何も見つかからないようだ。

「え、えつと…レーダーの表示を…つと」

目の前にウインドウを展開して設定をいじる。

「ところで、レーダーってなんですか？」

由良が疑問の声を上げる。

「レーダーは、英語の Radio Detecting and Ranging から来ています。これはアメリカ人による命名です。当初イギリスでは Radio Locator と呼称されてます。つまりこの電探ですね」

「私たちのというと22号電探とかの事ですね。とりあえず、距離、方位、速度をお願いします」

なるほど、いつも乗員のみなさんがやってる事をそのまま私はやれつてことですね

「敵索敵機が方位0—4—5、距離175、数5、速度212? かな。本隊が方位同じ、距離225、数1、2、3、……24? だと思います。速度15knott程度」

「は?」

「え?」

「え……?」

「桁おかしくないですか?」

「というか、なんで数や速度まで……イージス艦じゃあるまいし……」

「こちらの世界の艦娘のリーダーは性能他全てにおいて数段遅れているようだ。」

「えっと、最大探知距離が450kmぐらいだから、だいぶ短距離ですね」

「45kmの間違いじゃないですよね？」

「なんですかその超超短距離リーダーは……」

「間違いじゃなさそうですね。私の索敵機が敵艦隊を発見したので」

「規格外というか……ぶったまげたわ」

艦隊内無線で話が盛り上がってるが、私は頭の中で響くのに慣れてないせいで正直うるさい。

そして探知圏内に敵機がいますとか一回言えばわかるって……。

「あの一……もう敵索敵機撃ち落とすとしていいですか？」

「150km以上離れてるのにどうやって落とす気なの？」

「まあ、見ててください。対空SAM発射よーい。前部A VLSハッチオープン」

私の艀装のVLSハッチが1つだけ開く。

皆が興味深く私の艀装を見つめる。

「目標、敵索敵機。対空SAM発射！」

私の号令と同時にVLSの中に収められたミサイルの初期加速用固体ロケットブー

スターに点火される。

VLSハッチの横につけられた排煙スリットから煙がこれでもかという程吐き出される。

そのまま天を焦がす光の矢となり空に舞い上がった。

続いて不要となった一段目を蹴落とし、ターボジェットエンジンに切り替わる。

「正常飛行を確認。命中まで約7分。開幕攻撃機となる深淵、神電Ⅱ、瑞鳳航空隊は攻撃機を飛行甲板に上げ即発待機せよ」

「ちよつと待つてください!!」

瑞鳳が声を上げる。

「どうしました?」

「直掩機は…ナシですか?」

「要らないですね。相手からは正規空母6隻分の爆撃、雷撃、戦闘機が飛んでくるのよ?それを掻い潜り、敵を捌くのは至難の技ね。だから確実に落とせる私を主軸とした防空戦闘で全部叩き落す。あ、瑞鳳航空隊には開幕攻撃をなんとかでも凌いでもらって敵機が帰還するタイミングで空母艦隊に奇襲をかけてもらわ。頼むわよ」

瑞鳳の顔が輝き出す

「由良ちゃん、阿武隈ちゃん、鹿島さん、春雨ちゃんも対潜対空戦闘を重視。1機でも多く叩き落として欲しいの。目標は私が指示するわ。何としても瑞鳳を守ってあげてね。」

「「「は、はい！」」」

瑞鳳が、春雨が、由良が、鹿島が、阿武隈が

5人の顔がキラキラ輝き始める。

(これが提督の言ってた戦意高揚状態か)

「あれ、みんなキラ付いてる！」

「ほんとだ！」

「夜雨ちゃんも付いてますね」

「これで頑張れます！はい！」

気がついたら私もキラキラ状態になってたみたいです。

「開幕攻撃隊発進せよ！瑞鳳攻撃隊発艦用意！第3戦速！」

ちなみに、第三戦速は約24 knot。ただし私はちゃんと調整しないとあつという間に距離が崩れます。

「ま、待って！私18 knotしか出せない……」

鹿島が悲鳴のような声を上げる。

「春雨、引つ張れるか？」

「任せてください」

鹿島と春雨が手をつなぐ

「春雨ちゃん……ありがと♡」

「頑張ってくださいね？」

そうこうしている間に私の艦中央のヘリポートから青い神電Ⅱが飛び立つ。

《ナイトメア発艦完了》

『了解、目標は敵水雷戦隊と開幕航空攻撃隊よ』

《了解》

青い機体が音より速い青い矢となり飛んでいく。

「続いて瑞鳳攻撃隊、発艦開始！発艦完了後、深淵は200km先に展開！100km以内に入った敵機は主砲他で迎撃する」

「了解、第1時攻撃隊発艦初めっ！」

瑞鳳攻撃隊の彗星艦上爆撃機、天山艦上攻撃機、零式艦上戦闘機52型が舞い上がる。それに合わせ、私のヘリポートから深淵が舞い上がる。

『瑞鳳攻撃隊、および深淵アビスに指示、空中集合完了後、敵攻撃隊とかち合わないように少し迂回して敵空母へ攻撃せよ。第1時攻撃隊が発艦用意をしてる所に季節はずれだがサントクロースの如くお土産を置いていってやる気持ちで大丈夫だ。深淵アビスは敵開幕攻撃隊の横槍と敵潜水艦の位置を探れ』

《了解、任せてください。あと青いの（神電Ⅱ）やこんなへんちくりんな航空機だけにはいい顔をさせません！》

《深淵アビス了解》

『いい心がけですね。慢心せずに連、装、砲 ですよ？行ってらっしゃい。ちゃんと帰っ

てきてね!』

《瑞鳳さん了解!行つてきます》

空中集合を完了した瑞鳳攻撃隊と深淵^{アビス}が空の彼方へと消える。

しかし私の眼鏡型画面とウインドウにはちゃんと表示されてます。

ついさつき切り替える方法がわかったので頭の中が幾分すっきりとした。

—————

《敵開幕航空攻撃と思しき第1波来ます。距離117。》

「戦闘機隊を α 、爆撃機隊を β 、雷撃隊をCと呼称する。取り舵5!主砲およびAGS起動。対空迎撃よい!AGS目標 β !距離55で攻撃開始!対空ミサイルVLSハッチオープン。目標C郡全機!シーアロー発射始め!」

VLSから50以上の煙を纏った光の矢矢が走り、割り当てられた目標に向かいひた走る。

「シーアロー全発発射を確認！VLSハッチ閉め」

元々音速ジェット機を落とすために制作されたシーアローにとって、音速にも届かないレシプロ機を落とす事は造作もないことである。

瞬く間にC郡が壊滅する。

「距離55！AGS対空射撃始め！」

四角錐をした物体から砲身が起き上がり、目標に向けて砲撃をする。

280mmという砲サイズの割に合わない発射速度、秒間2発以上のペースで砲弾が放たれる。

しかもそれが三連装であり、発射態勢を取っている砲塔が2基もある。

つまり秒間12発以上が投射される計算になる。

しかし普通の砲弾なら届くはずはない。

仮に届いたとしても航空機にはそこまでダメージは入らないであろう。

普通の砲弾ならば。

放たれたのはVT信管（近接作動信管）を搭載している砲弾。

しかもある程度誘導される砲弾かつロケットモーターと呼ばれる簡易噴進機構を搭載し、従来の砲弾よりもはるかに長射程であるというおまけ付き。

直撃。敵機体に穴を穿つ。

至近弾。破片をまき散らす。

そして少し遅れて爆散する。

「残存戦闘機に主砲、電磁誘導サーマルモードで交互射！弾種対空榴弾！全艦主砲対空戦闘開始！」

電磁誘導サーマルモードというのは、電位差のある二本の導体レール状の間に、導体

砲弾を置き、レールと砲弾を流れる電流に発生する磁場の相互作用によって、砲弾を加速して発射する「レールガン」と

入力された電流のジュール熱にて砲弾後方の導体をプラズマへ相変化させ、これに伴う急激な体積の増加を利用し瞬間的なプラズマ化に伴う爆発で高初速を得て投射する

【サーマルガン】の複合モードである

サーマルガンを普段は火薬で代用しているが私のお好みの装薬がシステム上で用意出来ないらしいのでこのモードを使うことにした。

夜雨の全砲門数は8。1門あたり6秒に1発を撃てるので秒間に直すと約1発か2発程飛んでくる事になる。

核融合炉が唸りを上げ、電気を生成する。

砲口からスパーク放電（電）が発生。

榴弾後部でプラズマが生成され、砲弾が弾き飛ばされる。

【主砲／主砲／気化榴弾／射撃指揮レーダー】のカットインが入り

空中で35・6cmの花火が舞う。

防空駆逐艦やどこかの弾幕厨の特型駆逐艦もドン引きするほどの弾幕。

気化榴弾の性質上、一定範囲に爆風による衝撃波や熱波が発生するため直撃しなくても風圧により破碎、姿勢維持不可能、パイロット気絶…エンジン損傷、爆弾誘爆…といった事による撃墜も発生する。

「て、敵でなくて良かった…」

この試合を見た全員がそう言うであろう。

無慈悲な砲撃で空が黒く煙る。

「全機撃墜完了。対空射撃やめ。主砲、対艦射撃用意！」

主砲の先から冷却液が零れ落ちる。

この冷却機構により長期間の継続的な射撃が可能になっている。

「え、り、了解」

ここにきて、やっと僚艦sの思考再起動が始まる。

『ラビリンスからナイトメアへ。現状は？』

《こちらナイトメア。パルスレーザーを砲身と魚雷発射管に向けて撃つだけの簡単なお仕事ね。全艦轟沈判定よ》

『グツジョブ。空母への攻撃の支援を頼む』

《ナイトメア了解》

【輪形陣VS単縦陣】

【反航戦　　↔双方砲撃の火力低下↔】

「主砲レーダー射撃。2番3番主砲連続斉射！弾種高速徹甲榴弾！敵1、2番艦！」

【35.6cm連装／35.6cm連装／高速徹甲榴弾／射撃指揮レーダー】
　　というカットイン表示が入る。

「あー。この表示ものすごく邪魔ア！」

そう叫んだ瞬間に消える。不思議な表示だった。

高速徹甲榴弾とは、装甲を貫くのに特化した弾である高速徹甲^H弾と榴弾を複合化させた砲弾で、装甲を貫通、その後爆発する砲弾である。

敵1番艦の金剛と長門に一、二斉射目で主砲横のバイタルに命中、対35.6cmや対41cmの壁をもつともせず艦内までめり込み弾薬を巻き込み爆散する。

次々に起こる誘爆。主砲が10m以上も吹っ飛び艦が3つに折れ、浮かぶ力を失い沈む。

「1. 2番艦の爆散を確認。目標変更、3～6番艦！」

次々に繰り出される砲弾になす術なく爆散させられていく。

圧倒的射程と投射力。力にモノを言わせたパワープレー。

「夜雨ちゃん……この距離だと普通の砲弾は届くはずないよ……むしろどうやって当てたの？」

最後までポカーンとしてた阿武隈がやっと再起動を果たす。

「え、レーダーで狙ってキックモーターで射程延長またはある程度誘導ができる砲弾でこうして……んで、気化榴弾で範囲攻撃、後は高速徹甲榴弾で戦艦撃破」
由良と阿武隈が降参のポーズをとる。

最後まで説明を聞いてもわからないということがわかったようです。

「そっさいえば、瑞鳳攻撃隊、どう？」

「全艦大破判定よ！数は少なくとも、先鋭だから！」

「さっすがあゝ」

――
交戦終了！

《完全勝利S》

【MVP】

・夜雨

・瑞鳳

「防空戦艦だからって舐めてかかるとこうなるのよ」↑MVP

「瑞鳳の航空隊が活躍したの？ やったあ！ 軽空母だって、頑張れば活躍できるのよ」↑MVP

「「「私たちも活躍したかったー!!」」」

6人中4人が銃弾すら一発も撃たずにこの演習は夜雨側の完全勝利で幕を閉じた。

0—6　　〽日時の壺時、荒ぶる狩人と防人〽

夜雨side

周期的に私を襲う不快な感覚。それが何かを知ろうと目を開ける。

見慣れぬ木製の天井。遠くで流れる聞きなれない音。

演習が終わってからどれぐらい時間がたったのだろうか。

私は下着姿でベットに横たえられていた。ちなみに下着は白のシンプルなやつね。

「あ、やつと起きた。そのまましばらく動かないでね」

優しい声を横からふりかけられる。

その声のする方向に顔を回すと黒いポニーテールが揺れている。駆逐艦娘にしては背は高い方。

軽巡夕張と姿は似ているが髪の色と質が違う。見たことが無い娘だ。

「貴方は……誰？」

「私ですか？秋月型防空駆逐艦、1番艦の秋月です」

「…あき、づき…？そんな駆逐艦居たっけ…」

私の住む世界には秋月型は計画段階では居たが、建造はされず、改秋月型として存在している。

「あー…：そちらの世界では睦月型、吹雪型からしつかりとした対空兵装が装備されていたと副長さんから聞いております。夕張型を少し小さくして主砲を長砲身の10cm高角砲にしたような艦です」

そう言つて秋月は水の入ったコップを差し出す。私はそれを受け取り半分ほど飲んでから名乗る。

「…：そういうえば私から名乗つてませんでしたね。春雨型防空戦艦の2番艦、夜雨つて言います」

「私の戦艦版、と言つた感じですかね。これから宜しく願ひします」

「こちらこそ、よろしくです。それで、ここはどこです？」

「医務室ですよ。初めてアレをつけるとみんなダウンしちゃうからここでしばらく休んでからほかのデータを取るつて言つてましたよ」

「まだあるんですか……」

「ありますよ？ えーつと、さつき姉提督さんが新しい子と一緒にデータを取って言うてました」

「新しい……娘？」

「確か朝潮型の娘って言うてました」

「朝潮型……か」

秋月の横からロボットみたいなメカが二機歩いてきた。

「このロボット秋月さんのかな？ 結構可愛いですね」

手を伸ばして砲身と思われるモノを避けつつ頭をなでる

きいーきいー言ってる。可愛い。

「この子たちは『長10センチ砲ちゃん』という名前ですよ。秋月姉え、軽めのご飯持ってきたよ」

オレンジ色の髪の色をした秋月と同じぐらいの娘が入って来る。この娘も長10センチ砲ちゃんと思われる2体のロボットを連れている。

「ありがとう照月。そこに置いて欲しいかな」

「りよ〜かいっ」

「長10センチ砲ちゃんか。私の主砲サイズの長35.6cm砲ちゃん造ってくれないかなあ…」

「流石に無理だと思うよ。長門さんが島風ちゃんの連装砲ちゃんを見て作れないか真面目に検討してたけどダメみたいだったし。秋月姉さん、飲み物追加で持ってきたけど足りるかな？」

新たに入ってきた娘は黒が似合うしっかりとした娘だった。この娘も長10センチ砲ちゃんを連れている。

「あ、初月、ちょうどさっき切れた所。ありがとう」

「他に僕にできる事はあるかい？」

私に向かって聞いてくる。

「え、えーつと…」

「僕のこととは初月って呼んでくれ。なあに、呼び捨てで構わん。私もついこないだ着任したばかりだ。新入り同士仲良くしようぜ」

「あ、はい。え、えーっと、夜雨です。よろしくね」

手を伸ばして握手をする。

「こら初月、夜雨ちゃん困ってるじゃない」

「え、えと、ごめん」

「大丈夫、気にしてませんよ」

この後2時間ほど秋月型3人十長10cm砲ちゃんsと会話してからグラウンドへ向かった。

朝潮side

「朝潮型1番艦、朝潮、入ります」

私の名前は朝潮。場所は扉のない提督室の前。無い、というよりも『破壊された』と言うべきでしょうか。小さな破片が散らばっている。

ついさつき私の艦装が建造されてここの鎮守府に来ました。

2つの鎮守府が連携を取ってる珍しい鎮守府らしいです。

「別に好きに入ってきていいぞ」

「いえ、これが礼儀なので。失礼します」

部屋の中に入る。

「本日付けで鎮守婦に着任することになっています。朝潮型一番艦、朝潮です」

「ようこそ、俺と」

「私の鎮守府へ。歓迎するわ」

「と、言いたいんだけど、とんでもない規格外がさつき来てな。ちよつとドタバタしてるけどあまり気にしないでくれ。しばらくしたら慣れる」

「規格外と言うよりも、異世界の戦艦ね」

「は、はい？」

そんな戦艦が着任したという情報は一つも入ってない。

「とりあえず、自己紹介だな。俺のことは弟提督と呼んでくれ」

「私は姉提督でいいわ。実際双子だし。後これが鎮守府用のタブなんだけど、どれがいい？」

見たことないタイプの情報表示機器が2つある。

（眼鏡のようなやつと空中に浮かびでるタイプ……それに普通の端末タイプ……端末一択ですね）

「端末タイプでお願いします」

この後、姉提督と弟提督が漫才みたいに

「フォーマットとフィッティングとセットアップは…ええとあ、取説貫うの忘れた」

「つたくしやーねーな。こここうして…こう」

「おお、動いた」

とかやってみました。そこまではいいんです。

「姉提督さん、質問してよろしいでしょうか？」

「はい、どうぞ」

「この端末、高性能過ぎませんか？いくら何でもおかしいスペックですよね」

「うん、そうだよ」

「誰が制作したのですか？」

「格外戦艦」

「夜雨ちゃん」

私を知る限りですが、そんな名前の戦艦なんて聞いたこともない。

「えーっと、姉提督さんか弟提督さんが造られた艦ですか？」

「流れ着いた、というべきかしら」

「だな。異世界からの漂着艦だ」

「…もう一回言ってもらってもよろしいでしょうか」

「異世界からの漂着艦だ」

「……もう大丈夫です。私では理解ができません」

「大丈夫、俺達もほぼぼ理解なんてしてない」

「あ、そう言えば能力テストして無かったわね。後で動きやすい服に着替えてグラウンドに来て欲しいな。部屋はその端末に表示される通りに行けば大丈夫よ」

「了解です。失礼します」

そう言つて扉の無い提督室からスタスタ立ち去った

夜雨side

私は今グラウンドにいる。

いや、何でかって陸上体力測定をすとか何とか。

風紗ちゃんはまだわかるとして、なんで龍奈ちゃんや鈴ちゃんまで一緒にこないと行けないのかがね、うん。

「夜ちゃん不機嫌ねー。まあ、さつさとやってさつさと終わらせましょう。これが一覧ね」

「変なあだ名付けないでくださいよ姉提督さん…」

「夜ちゃんの方が良かった？」

「もつとダメです…」

あれ、いつからこんなに弄られたっけ。まあいつか。

ちなみに体力測定の種目はこんな感じ。

・ 50 m 走

・ 1500 m 走

・障害物5000m／射撃5000m

・反復横跳び

・立ち幅跳び

・遠投

・シャトルラン

・重量挙げ

なるほど、燃える競技ばかりだ。

「とりあえず、やりたい奴からやってつてく。測定はこっちの妖精さんがやってくれる

わよ」

「んじや遠投から行きますか」

妖精さんたちが測定器具を手に取り出す。

しばらくして準備完了という報告が来た。

「んじや遠慮なく、ツアッ！」

全力で振りかぶり、遠くに投げ捨てる。

みるみる小さくなって飛んでいくソフトボール。

一番遠い所に立っていた妖精さんのはるか上空を通過し洋上へ姿を消した。

「あれ、こんなに私飛ばしたっけ？」

首をかしげながら飛んでいった方向を見つめる。確か前測ったときは25m〜30mぐらいだったはず……

「じよ、場外……」

「私も投げている？」

風紗がびよんびよん跳ねながら肩を回す

「風紗も投げたいって言ってますけどやらせていいですか？」

「大丈夫よ。ついでにその2人も投げたら？」

「なんで私まで……えいつ！」

「……まあいいんじゃない……ッ！」

「いつくよー！そおい！」

放たれた三つの球体は理想的な放物線を描いて私が投げた球と同じ道をたどる。

「全員……場外……」

空いた口が塞がらない朝潮。

姉提督や弟提督はまだ耐性があるのか、顔がひきつる程度で収まっている。

「次、朝潮ちゃん、投げて」

「あ、はい。行きます」

しかし、朝潮の投げた球は35mぐらいのところで地面に落ちる。

「むしろこれぐらいが普通なんだけどなあ……」

弟提督がぼやく。

反復横跳び、1500m走も夜雨sがぶつちぎりでも最高記録を塗り替えていく。

ちなみに。説明が遅れたが障害物500m／射撃500mとは、

障害物500m走の後、射撃をしながら500mの距離を駆け抜けるという速さと射撃精度を測る競技だ。

「そういえばお前ら、銃はどうするんだ？」

弟提督が思い出したように聞いてくる。

「私は愛用の対戦車／対物ライフルにしようかな〜って思ってるんですが艦の方…え、あるの？」

艦にあると思っていたが、龍奈が持ってきてくれたようだ。

「…私……」
デザート・イーグル50A E Y
 れ 2 丁……」

鈴奈ちゃんは有名なデザートイーグル50A Eのオリジナル改良型で、装填数が増えている。非常に大きな口径は高い貫通力や攻撃力を持ち、反動はでかいが殺傷力は高い。

「これにしようかな」
SG750

風紗ちゃんはSG750はSG550の7.62mm×51弾NATO弾バージョンで本体の値段がクソ高い。全体的に優れた性能を持っている。

「スターライトカノン
 M I J | S L C 一択」

龍奈ちゃんはこれまた良く分からない銃を持ってきている。

手元でこそつとウインドを開き龍奈ちゃんに聞いてみる。

夜雨『それなんてやつ?』

龍奈『スターライトカノン』

夜雨『まさか自作?』

龍奈『もち』

夜雨『了解』

青系列の色でまとめられた両手銃。かなり銃身が長く作られているようだ。

「姉提督さん、私は無いので一丁貸してもらえますでしょうか」

「これしか私持ってないけど大丈夫かしら?」

「大丈夫です」

出てきたのはワルサーPPK。割と有名であろうセミオートマッチク拳銃である。

こんなものを常時携帯する提督って一体……

「わーお物騒。んじや、あの白いテントのところに置いといて。安全装置は白テントを出てから解除ってことで」

「了解」「りよーかい」「……了解……」「ラジャー」「了解です!」

五人がテントに向かい、戻ってくる。

「んじや、置いてきたかな?位置について!よーい」

測定開始の電子音が鳴り響く。

それと同時に朝潮一人を除いた4人が狂った獣の如くすっ飛んでいく。

コースに指定されたルートにはそびえ立つ壁や普通では飛び越せないような段差などがいくつもある。

普通なら10分以上かかるコース。誰もがそう言っていた。

スタート直後の一般の人々ならまず普通に歩いては登り降りができないと思われるほどの急な下り坂。

それを駆け下りず、走る勢いをそのままに宙返りをする。

宙を舞う4つの光、地に映る4つの影。

坂の8割ぐらいをジャンプカットし、受身を取りつつ滑り降りる。

滑り降りた反動を使いすぐ立ち上がり走り出す。

小さな石の段差から飛び上がり一階建ての鉄筋コンクリート製平屋の壁に張り付きよじ登る。

4人は止まらない。

3メートル間隔の腰ぐらいのサイズの街灯突起の上を駆け抜け、6mもあろうかという兵舎の絶壁をよじ登り、落ちたら骨折だけでは済まないであろう高さの屋根をつたい、壁に張り付きながら素早く移動し、植え込みを飛び越え、腰よりも高いフェンスをあたかもそこに何も無いかのように疾走。

白いテントの中を駆け抜け支持された目標を的確に打ち抜く。

小気味の良い銃声のリズム。遅れて伝わる撃破の合図。

あつという間に全ての目標を粉碎し、クリア。

映画のスタントマンが如くさもそれが当然であるかのように4人が戻ってきた。

「今の……何？」

姉提督が驚愕の顔をしていた。

弟提督は完全にフリーズしている。

「パルクール／フリーランの応用です。必須技能ではないですけど私の乗組員は大抵で
きますよ」

「ぱるくーる……？ふりーらん？」

「今私達がやったあの動きです」

その場で一回転宙返りをしてみせる。

あのスタイリッシュな動きは相当訓練等でやり込んでいたので自然と体に染み付い
ていたようだ。

「あつぶねー、弾切れかけてた。無駄撃ち一発もしてないのに」

「次から別の銃使おう、これは重過ぎる」

「……だいぶ……なまった……」

このように3人ともだいぶ余裕の顔である。

「……何このペース。ありえないぞ」

弟提督がやつと再起動する。

「うちんとこの乗組員ほぼほぼできますよね？」

「できますね」

「……できる……」

「何人か連れてきてやらせますか？」

姉提督は流石に困った顔で

「いや、大丈夫です。むしろ何人か夜ちゃんたちの訓練をさせてみたいわね」とか冗談言える余裕はあるほど耐性が出来ているようだ。

そんな話をしていたらかなり遅れて息を上げながら朝潮が帰ってきた。

「き、規格化……あ、銃有難うございます」

「はい、どうもです」

「そういうえば、これ、ついで程度でこんなモノを拾ってきました。これ意図的に置いてたやつじゃなければ絶対邪魔ですよね？」

何故今まで気が付かなかったのかと思いつつ、手に持ってたでっかいモノを地面にそつと置く

「あー……46cm砲弾……それあのテントの所に置いといて」

「はい」

その物とは46cm砲の砲弾。言わずと知れた大和砲弾である。

1tどころではない、ものすごく重量物であるらしいが、私にはおもちゃのレプリカのように軽い。

こいつ、タダもんじゃねえバケモンだ…とんでもねえのが来やがったぞ…とか、弟提督がそんな顔で私のことを見つめている。

そんなに見ないで欲しいかな。恥ずかしいし。

この後、順調に夜雨達4人は規格外な記録を出し続けその場にいた者をドン引きさせたのは言うまでもない。

翌日 夜雨 side

「で、テストの一環で私の兵装も見たいと」

「そういうことですね」

姉提督を艦にのせ、島から少し離れた『パラオ泊地』に来ていた。

厳密には元パラオ泊地というべきであろうか。

前任者提督が深海棲艦との死闘の未敗れパラオ泊地は壊滅

提督、艦娘および島の人全員無事だったものの、超巨大爆撃機により文字通り鎮守府は瓦礫の山と化したらしい。

瓦礫を撤去し再建築するよりも新たな島を整備した方が格段に早く安いという事で今の姉提督および弟提督の鎮守府が出来たという。

「超巨大、爆撃機…?」

「とにかく大きいとしか私は聞いてないのよ」

「……始アルケオプテリクス祖鳥の可能性があるわね……」

「ん?何か言いました?」

「いえ、何も」

もし仮にアルケオプテリクスだった場合は艦娘が全員爆散する可能性があるのだから可能性は極めて低いと思うのだが……

「艦長、方位0—1—5、距離420に所属不明艦を確認」

「よ、420? 42の間違いではなくて?」

「なんですかその、目視の方が絶対に性能がいいですよ、レーダー。ちなみに数は?」

「駆逐艦クラス5、軽巡クラス1、輸送艦と思われる船団1、数14、合計20です」

「……敵味方識別は?」

「現在確認中……味方です」

「姉提督、該当艦隊は?」

「輸送船団とその護衛艦隊ですね。出迎えついでに護衛して帰りましょう」

「了解、進路0—1—5 速力70、急加速警報! 姉提督さん、これに座ってベルトをしてください」

「な、ななじゆう……?! knotですよね? km/hじゃないですよね? それでも異常速力ですが」

べらべら話す姉提督を座らせベルトをつける。私は艦橋についたポールに捕まり急

加速に対する衝撃に備えた。

急加速警報が鳴り響きとち狂った加速で姉提督が座席に押し付けられ黙りこむ。水しぶきが艦橋を濡らす。

「うっひゃー、濡れた！気持ちいい！」

「暑かったから丁度いいや」

そんな乗組妖精の声も聞こえてきた。

輸送船団との距離が100を切ったところでお気楽ムードの艦橋に旋律が走る。

「艦長、軽巡クラスからの緊急電、我、潜水艦からの襲撃を受けつつあり！」

「了解、ソナーの効力を上げよ。目標および護衛対象の行動を報告せよ」

「駆逐艦2隻が対潜制圧攻撃をかけようとしたものの返り討ちにあい中破した模様。速力低下されど航行に支障なし。輸送艦1隻に魚雷が命中したものの不発、全力航行可能。目標は4隻！」

「多目的ミサイルVLS（ASROC）ハッチオープン。目標、敵潜水艦」

重い音を立てて多目的ミサイル発射用VLSの装甲フタが全て開く

「目標捕捉、諸元入力完了！」

「発射！」

「了解、多目的ミサイル発射」

白煙が艦橋の超硬質防弾ガラスを覆い隠す。

白い光の矢が4つ舞い上がり獲物を求めて空を翔る。

煙を割って進む黒鋼の城。

「新たなる目標、方位0―4―5、距離9、数2！敵潜水艦です！こちらに魚雷を発射した模様。本艦のかなり後ろを通過するコース」

「了解、新たなる目標に攻撃せよ」

「了解、多目的ミサイル発射！」

更に追加で放たれる2本の矢。

パラシュートを開き減速後、着水。

スクリューを駆り各自の目標を自前のソナーで追いかけて、追いつき、爆ぜる。水柱が計6つ。全艦撃破の証である。

「目標全部の反応消失を確認。戦闘態勢解除。周囲警戒をおこたらないようにして」

「対潜水艦攻撃……貴方戦艦ですよ？」

「はい、防空ってつきますけど戦艦ですよ」

「なぜ戦艦が対潜水艦攻撃を……？」

「逆に聞きます。できない戦艦なんて居るんですか？」

「航空戦艦以外はできませんよ……航空戦艦は航空機を使って攻撃するので本体からの攻撃とは言えませんが」

「……ってつきり全員できるのだと思ってました」

「軽巡および輸送艦からの入電、見事なり！感謝する！です」

「返信！まだ気を抜かず最後まで任務を遂行せよ。頼みます」

「りよ〜か〜い」

幸い、負傷者程度で済み、損傷した艦艇は自力航行可能だったが、速力は少し下がったようだ。

「艦長、意見具申。本艦も護衛につきましよう」

「それが妥当ですね。しんがりを務めます。艦を輸送船団最後尾に回せ！距離1をキープ。速力は前と合わせて」

「了解！距離1キープで輸送船団の最後尾へ！」

ぐるつと大きく円を書くようにして回り込む。

「損傷した駆逐艦2隻は墮落してないことを見ると大丈夫そうですね」

「鎮守府まであと少し……何事もなければ大丈夫でしょう」

「方位1—8—5、距離405！不明機！数15！」

「……残念ながら姉提督さん、何事もないわけがなさそうですよ」

「本島に連絡をいれて戦闘機を……」

「神電Ⅱ発艦せよ」

《了解、神電Ⅱ発艦します》

姉提督が艦橋の窓から後ろを振り返る。

全身が真っ青の機体が航空力学ガン無視の軌道を描いて飛び出していった。

「……何よ今の……私、霊にでも取り憑かれた……？幻影でも見てるの……？」

姉提督が己の脚の力で立てずにへたり込む。

艦橋にいた妖精が口々に

「アレが神電Ⅱのいつも通りですよ」

と、言う。

「あれが正常なんです。むしろ、垂直に飛べなければこの艦からは飛べませんよ」

この後、神電Ⅱは不明機が敵機だということを確認、全機を撃墜し無事に輸送船団はパラオ鎮守府に入港した。

姉提督は陸に上がっても幽霊でも見たかのように 信じられない という顔をして
いたという。

0—7—A 好敵手、大和

夜雨side in 提督室

「夜ちゃん、朝早くにいきなり呼び出してごめんなさいね？明日と明後日に他の鎮守府と合同で貴方のお披露目式と観艦式とそのついでで演習があるのよ。出る？」

姉提督から告げられた聞き慣れない単語。私は戸惑いを隠せない。

「お披露目式と観艦式は問題無いのですが、演習というのは……またあの機械を使うのですか？」

「いや、普通の演習よ。相手は宿敵、と言つても過言ではないわね。私の永遠のライバルだわ」

姉提督のライバル……。つまり相手もランカー提督ということですか……。一筋縄では行かなそうですね。

「ところで、なぜ私が？」

「戦艦との1対1勝負だからよ」

1対1のバトル……。つまり、正面勝負ですか。

「姉提督さん、私以外の戦艦さんがいるのでは…?」

可能ならば私よりもほかの戦艦の方が色々ありがたい。能力的にも…

「お前が俺らの事実上最強メンツの一隻を除いてを全部問答無用で撃破したから。それ以上の説明はいらねーだろ。んで、相手も夜雨あんだを名指しで指名してるし」

弟提督が姉提督の後ろから援護射撃を飛ばす。

「…一応聞いておきます。相手はどちらさんでしょうか。そして『一隻以外』とは…?」

「えーつと」

・舞鶴鎮守府の琴音提督ことねさんの所の史上最強と名高い大和型戦艦『武蔵改』

・呉鎮守府のあひひな提督さんの所のアメリカ海軍から派遣されてきたこちら最
強と名高い戦艦『アイオワ』

・横須賀鎮守府のイツサケンタ提督さんの所のドイツ海軍の誇るタフ戦艦『Bismarck drei (ビスマルク ドライ)』とイタリア海軍の誇る超射程戦艦『リット
リオ／イタリア』

そして我が鎮守府から夜ちゃんともう一人よ」

「ちなみに、そのもう一人を今連れてきてもらっているところだ」

なるほど、今話に出てきた艦を上げると……

・大和型戦艦。

世界最強と呼ばれる艦載砲、〔46cm45口径三連装砲〕を3基搭載。

副砲として60口径15.5cm3連装2基や両用砲として40口径12.7cm連装高角砲12基を搭載。25mm機関砲を各所に大量配置しているが、船体の大きさの割に少ない気がする。

米軍の長時間の波状航空攻撃に沈んだ。が、相当な魚雷、爆弾を命中させても良好な注排水システムと対46cm防御、水中防御区画によりなかなか沈まず「不死身艦」かとも思われていたようだ。

大和型に共通だが、超巨大な船体のわりにコンパクトな旋回性能を持ち、安定性も良好。さらに、改装でかなりの重量増加にも耐えているので良好な設計だったと言える。実は船体基準だとかなりの良燃費だったりするが、それでも燃費は悪い。

最高速力は公には27knot程度とされているが、この時の機関出力は全開出力ではなく、さらにかなり浅い海で測定したそうだ。推定全開速力は30knot程度であ

るだろう。

・アイオワ型戦艦。アメリカ海軍の事実上最後の戦艦（※除籍された日基準）。非常に長い船体を持つ。

具体的に言えば格上の砲を積んでいる大和型戦艦よりも長い。

そのためか、旋回性能はあまり宜しくない。

長門型の41cm砲よりもわずかに小さい40.6cm砲：

あちらの言葉でいうと【Mark. 7 16インチ50口径三連装砲】というべきか
…を搭載。

高初速、良好な命中精度を武器に重火力を振るう。

そして大和型戦艦より2万トン軽い体を機関出力21万馬力で振り回し、30knot以上で海をかける高速戦艦。

40mm機関砲や20mm機関砲を60門以上搭載する洋上の対空基地であり、史実最終形態ではトマホーク対艦ミサイルも搭載している。

・Bismarck（ビスマルク）型。ナチス・ドイツが誇る高速戦艦

ビスマルクの主砲、〔38cm 47口径連装砲改〕は中々短距離での砲撃戦を意識した主砲で、射程がやや短く非力だが命中精度や発射速度が非常に良い。

副砲として15cm 55口径連装砲が、対空火器として10.5cm 65口径連装高角砲、37mm、20mm機関砲などが装備されているが対空性能は心もとない。

特筆すべき点は戦艦だが、魚雷を発射できるということであろう。

本来アウトボクサーである戦艦でありながら装甲、兵装はインファイト向けであるという変わった艦である。

・リットリオ／イタリア

正式名称は〔ヴィットリオ・ヴェネト級戦艦〕

ちなみに2番艦である。

〔381mm／50 三連装砲〕、正式名称は〔cannone da 381／50

Modello 1934〕である。1934年製50口径381mm（15インチ）3連装砲と日本語訳されるはず…。

散布界と砲身耐久度にやや難があるものの高初速と46cm砲以上の射程、わかりやすく言えば〔艦載砲の中で最長射程〕を持つ。が、中々近距離での射撃をメインにする

ことが多い。

副砲として15・2cm55口径3連装速射砲を、対空火器として9cm50口径高角砲や多数の連装機関砲などを搭載。そこそこの対空火力を有する。

30ノット以上の快速を誇るが、地中海のみの行動が前提だったため長距離運転になると燃料搭載量と燃費に不安が残る。

これまたアウトレンジ向けと思わせてのインファイト艦である。

……そんな奴らと私は戦うことになる。大和型もアイオワ型もリットリオ／イタリアもビスマルクも相手にとって不足はない。

全力を出して攻撃してくるならば、私も全力を持ってそれにこたえる。それが演習における暗黙のルールである。

「相手からの要求はお互い艦載機は一切無し。相対距離600から戦闘開始だ」

「つまり、向こうは自ら着弾観測攻撃を縛ってきたってことね」

「ちやくだんかんそくこうげき…？なんですか？それ」

「『制空権が優勢以上』のときに『水上観測機 or 水上爆撃機』を使って行う『特殊攻撃』よ。観測機が日の出てるうちしか飛ばせないから昼限定になるわね」

「観測機を使う理由がレーダー自体が低性能ってことや目視距離以上の距離で撃ち合うというのは察してますが…その観測機が対空砲火で撃ち落とされるリスクのある上で攻撃ですか？」

「確かに一部の艦では夜雨と同様に航空機殲滅攻撃が可能だからそのリスクもある。それは間違いではない」

「主砲最大仰角よりも内側や対空兵器の射程圏外から観測するという手もありますし、対空兵器として主砲を使えばその分対艦火力は落ちるからリスクよりもリターンの方が大きいのよ」

「なるほど。つまり、火力の分散という意味も含め、攻守一体の攻撃、というわけですね」

「正解、そういうことだ。」

「ちなみに、先程航空機殲滅攻撃は全員ができる訳では無いと言うことですね？」

「まあ、そうなるな。提督、強力な助っ人を呼んできたよ」

そう言つて入つてきたのはズイウンという下駄履き機を手に持ち、シンプルな服を身にまとつた航空戦艦伊勢。

そして連れられて入つてきたのは…

スラリと伸びた四肢。美しい肌。私とほぼ同じ大きさの体。白と赤が美しい服。正面についている二つの豊かな丘が揺れる。

「提督、お呼びですか？」

闘志を宿す目を覆う銀ふちのメガネが太陽の光を反射してて美しい。

「…大和型戦艦には大和型戦艦を、ですか？」

「ご名答。彼女がかの有名な戦艦大和だ。普段はメガネをかけてない。が、書類仕事を頼んでな」

「それじゃ、私は瑞雲の発着艦訓練をしてきますね〜」

伊勢がズイウンズイウンと鼻歌を歌いながらそそくさと退出する。
なんとというズイウンオタクなのか。

「大和型戦艦の一番艦、大和です。よろしくお願い致します」

圧倒的存在感。なるほど、これが大和型を名乗る者か。

存在しているだけで怯むこの威^{プレッシャー}圧感。

事実上、直接的な後継艦ではないにしろ、私が建造される時に彼女の設計図面が参考
になっている。

「春雨型防空戦艦、2番艦の夜雨です。よろしくです」

がっちりとかわされる握手。

「世界の大和型と握手できるなんて夢にも思ってませんでした」

「それは光栄です。提督、早速射撃演習と観艦式の予行演習をしてきてもよろしいで

しょうか?」

大和さんが早速提督に要望を出す。姉提督、弟提督両方を呼ぶ時は【提督】と呼べばいいのね、なるほど。

「行つてらっしゃい。手続きは私がしておきますね」

「残りの書類は俺がやつとく」

早速許可が出たようだ。私は机上で観艦式がどんな流れなのかの確認でm……

「夜雨ちゃん、行きますよ。付いてきてくださいいね」

「……ふえ、私もですか?」

不意打ちの1発をもちに喰らつて変な声が出る。

「勿論ですよ。大和型戦艦の実力、魅せてあげます」

「あ、夜ちゃん、チョイ待ち!はい、これ。出来れば寝る時も毎日着けといてね?」

差し出されたのは桃色の小さなハートの形の鍵穴付きアクセサリーのついた革製のバンド。

これは一体…。

「えーっと、チヨーカータイプのハートロックですね。こうやって首のところにつけるアクセサリーですよ」

大和さんが私の首に手を伸ばしサイズ調整も兼ねてつけてくれている

(…何気に器用なんですな)

同姓をも惹き付ける柔らかいサクラの香りが漂う。

(ち、近いです…////)

顔が少しずつ熱くなる。恥ずかしいという訳ではなく、ふつつつと湧き上がる心の中の揺らめき。

不可抗力だとは思いますが非常に豊かな二つの膨らみが目の前でポヨンポヨン揺れる。

それに比べて私は非常になだらかで控えめ。

サイズを気にしている人にとっては非常にショッキングな構図である。

(その…あの、胸揺らしているのは、不可抗力だとは思いますが、その、露骨な嫌がらせとしか思えないんですが…)

「はい、付けられましたよ」

私の気持ちが伝わったかどうかは定かではないがやっとな離れてくれた。
「ありがとうございます。んで、これはどういった効果が…」

「正式にうちの鎮守府に着任した印とパワーリミッターよ。オンオフ出力調整は勝手にしちゃっていいけど、普段は極力切つとした方がいいわよ。どこかの誰かさんがこないだ鎮守府演習場の地面をすり鉢状に陥没させましたし」

「……提督、それは言わないお約束だったはずですが」

大和の顔が少し赤くなる。お嬢様かと思っていたが意外と少女のようだ。
「部分的には凄く進んでる技術もあるんですね…ありがとうございます」

話の流れを変えようととりあえずお礼を言っておく。

「ごめんなさいね？大和、後でアレ、してあげるから」

「それならいいです…それでは、行きましょう♪」

大和の立ち直りが物凄く速い。提督の言うアレって何でしょうか。ものすごく気になります。

「うわあ、ま、待っ」

ひんやりした腕を絡みつかせてくる。

「15万馬力の牽引っ♪うりやあ♪」

「ちよ、ちよつと待つてえく……」

普通の人間と同じ

私はパワーリミッターを出力0にしていたため、まともに踏ん張ることも出来ずにズルズル大和さんに引つ張られて提督室から退出した。

0—7—B
（砲撃演習）

夜雨side

「全主砲、なぎ払え！」

爆炎を噴き出す艦前部の左右4門の46cm砲。そして発砲遅延装置が作動し遅れて爆風を吹き出す中央2門の46cm砲。

ちなみに、大和型の同時斉射可能砲門数は6。9門同時に斉射すると艦体に変型、損傷するからである。

はるか遠くで着弾により水柱が噴き上がる。

「前部主砲弾着！超遠1！遠1！至近2！近2！広散布夾叉！下げ2！」
「後部主砲弾着！遠1！至近1！近1！夾叉！目標そのまま！」

大和搭載の水上機【零式水上観測機】からのモールス信号文が届く。かなりアナログチックで敵からも解読される可能性があるが、極めて効果的な修正が行える。

広散布夾叉とは、「散布界は広いが一応夾叉した」ということであろう。

そして、後部主砲に関しては斉射1発目できっちり夾叉。

どちらもなかなかの腕を持つ証拠である。

「夾又か…… うん、次は直撃させます！」

主砲を艦の正面に向け、最速装填角度を取る。単純に速く装填をする極めて基本的な姿勢。

すぐに目標に砲を向ける。

再び爆風が吹き荒れる。

私達は鎮守府近海で砲撃／雷撃演習をしている。

ちなみに編成は

旗艦・戦艦 大和改

航艦 扶桑改二

航戦 山城改二

軽巡 大淀改

防戦 夜雨

軽巡 天龍改

となつてゐる。

「これが46cm砲…すごい爆風ね」

CIC艦橋の外部映像が映し出されているモニターを見ながら龍奈がそう呟いていた。

「確か、私達の世界では発射時の爆風だけで人間を無残に引きちぎり吹き飛ばす程度でしたっけ。あんなもん喰らいたくないわね」

私たちの世界には……それ以上の口径を持つ巨艦巨砲主義の破壊神は居た。

210mm133口径の【パリ砲】、【53cmの艦載砲】や61cm、80cm列車砲や【ロンドン砲】等でイギリスを屈服させようとしたドイツ。

イスラエル王国を直接攻撃するためにイルル国が制作した100cm100口径の【バビロン・ガン】

日本も一応計画倒れだが、改大和型用の試製51cm砲を制作している。

アメリカも914mmの圧倒的破壊力を持つ自走榴弾砲【リトル・デーヴィッド】などを生産している

(……そういえば演習開始前に自走砲数両と装甲車数両と水陸両用車数両を格納していたっけ。その担当の人も妖精化していたけど扱えるのだろうか)

大口径砲の近くに人間が立っている時、その大口径が発砲すると気絶や軽い怪我どころでは済まない。

即死級の怪我や肉片としてその辺に散らばってるかもしれない。

もしくは肉片すら存在しない、か。

「直撃2！目標爆散！」

艦前部砲斉射2発、後部主砲斉射2発で標的艦を仕留めたようだ。

「軽巡大淀、ストレス発散対地攻撃始めます」

標的が設置されている小島と一定距離を保ちながら大淀が目標と対峙する。

「ロケラン大淀……いい響きじゃねえか」

ちなみに「ロケットランチャー」とはドイツで開発されUボートに搭載された対地対艦攻撃用の艦載ロケットランチャー「WG42」のことを指す。

「そう、これが本当の大淀型の力よ！」

一斉に火を吹き飛翔。地面に突き刺さり、爆発。

付近の土を吹き飛ばしつつ標的を薙ぎ払う。

「計算通りです」

噴煙が晴れた時には地上の標的はすべて爆散していた。

「演習にならないなんて不幸だわ……」

「姉様、初撃でまた爆散させるなんて素敵です」

この2人は初撃で命中弾をだし、洋上に浮かぶ標的を爆散させている。ちよつと変わったバクトルで不幸なのかもしれない。

「次、夜雨さんの番ですよ？」

「了解。対艦、対地攻撃演習開始します。機関増速30knot。面舵2」

やっと私の番が来たようだ。

先頭の大和をゆつくりと追い抜き艦の向きを調整する。

《ラビリンズからナイトメア。本来は必要ないが一応観測頼むわね》

上空待機していた何故か3つも外部増槽かフロートのようなのが付いている神電IIに指示を送る。

《ナイトメア了解。ラ進R40。K45。S25kn。D》

この通信をわかりやすく言えば

一夜雨の進行方向に対して右方向40度、距離45km、敵速力25knot、同航戦方向に進行中

という事になる。

「了解、第一標的、算出中。主砲2・3番目標、標的艦。弾種通常榴弾。サーマルレーンガンモード」

2. 3. 番主砲が右舷の指定角度に向き、標的艦に照準を合わせる。

《艦長、何時でもどうぞ》

2. 3番砲から準備完了の合図が届く。

「…提督からの指示通り発砲警報を鳴らしますね。実弾発砲警報！」

…ピーツ。。。

警報にはかなり薄っぺらく情けない音がCICに鳴り響く。

この警報は空砲射撃用の警報、つまるところの礼砲用の警報だった。

「誰が礼砲の警報鳴らしたんじやドアホー！」

砲雷長妖精が館内無線機に向かって叫び倒している。

普段は警報すら鳴らないから無理も無いだろう。戦闘時や演習時に艦外に出る人は自己責任というルールだからだ。

ちなみに、発砲用警報などは砲雷長の正面にあるコンソールで管理されている。つま

り……

「砲雷長、貴方の正面の警報スイッチを押したのは貴方以外なら誰になるんですかね」

副長のドストライクの指摘。砲雷長が真っ赤になって怒っている

「ムキーーー!!」

「砲雷長、自分のミスを他人に押し付けるのは如何かと思えますよ。副長他数名でC I Cからこいつを連れ出してください。後、砲雷長のマイク切ってくれたら嬉しいですよ。うるさいので……」

「了解（っス）」

副長と手近な所にいた航海長と航空管理長が砲雷長を物理的に持ち上げて運搬する。

女性化、妖精化してるとはいえ、力は一応元のサイズの時と同じらしい。

「やめろ！はなせ！ぐあああ……！」

容易く持ち上げられ搬出される。

「……にしても暑いわね。夏だから仕方ないですが……総員、水分補給は適度にとってくださいね」

CICや艦橋その他全区画に冷房はついているがCICではコンピュータの排熱、室内に居る私や妖精さんの体温、太陽からの放射熱等が原因で最適温度にならず熱交換機が吠え回している。

「そろそろやりますか。副長、鳴らしてください」

やっと本来鳴らすべきである大きめのブザーが鳴り響く。

「実弾発砲ブザーの正常動作を確認。2番3番てえー!斉射!」

超高電圧がかかり砲尾の導体がプラズマ化して爆ぜる。

それとほぼ同時に複数本のレールに電位差が生まれ、砲口から稲妻が迸り、吼える。

《新たなる目標を確認、ラ進L35。K38。S32Kn。H!》

この場合は進行方向左35度、距離38km、速力32knot、反航戦方向に進行中となる。

ナイトメア
神電Ⅱからの命中の報告を待たずに新たな標的艦という目標に向けて機械音を立てずにクルツと2・3番主砲が旋回する。

先程放たれた四つの砲弾が音の壁を軽々と破り寸分狂わず標的艦に吸い込まれて直撃、装甲を貫き爆散する。

《弾着、今！3発直撃、1発水中弾！目標の爆散確認！》

そう報告が入った時にはもう既に別目標をロックオンしていた。

「…2番3番斉射！」
てえ！

再び砲口から稲妻が零れ落ちる。

飛翔する四つの砲弾。

まるで透明なパイプの中を通るかのように綺麗に標的艦に吸い込まれ爆散する。

《弾着、今！2発直撃、1発水中弾、1発至近弾！目標の爆散を確認！》

ナイトメアからの爆散報告を軽く聞き流して要求を出す。

《深淵、アビス陸上攻撃観測よろしく。神電Ⅱは上空で補佐と制空戦を頼む》

《了解！。リポジします》

神電Ⅱが淡く青い推進炎を吹いてほぼ垂直に急上昇していく。

《全部主砲弾着！命中2！至近2！目標爆散》

大和の観測機から報告がかなり遅れて入ってきた。

「……えっ？」

大和がすっぱ抜けた声を通信機に向かって出したのであろう。

ちなみに、私はお嬢様がこんな声を出すところを想像ができないが…。

「…主砲もどーせー。増速55knot。目標、地上標的。右舷高角速射砲、撃ち方用意！弾種対地榴弾！攻撃は指示があるまで待て！」

「艦長。自走砲もヘリポートに上げておきますか？」

「……副長、やっぱり積んでたのね。強襲揚陸演習できる時に頼んでおきます。あと演習場の手配も」

そんな話をしている間にも大和との間が広がる。

慌てて大和は機関出力を上げて追従しようとしているが、虚しく煙突が黒煙を噴き上げるだけで差は広がるばかりである。

《深淵水上着弾観測準備中！》

水面に対してほぼ垂直でゆっくり降下。海面にスレスレピタリと静止。ローター吹き下ろした空気が海面を波立てる。

《神電Ⅱ増設観測機器スイッチオン。精密計測モード選択》

先述した神電Ⅱに装着されている三つの増設物のうち、一つが赤外線／電波複合式の超高性能対地測定器である。

高度1万mからでも地上の様子をほぼ誤差なく測定し、観測できる。

普段はそこまで超精密に測定する必要が無いから外しているが、必要になれば増設することは可能である。

《深淵^{アビス}、データリンク成功。ポップアップ5前！3、2、1、今！》

彩竜エンジンがメインローターをぶんまわし深淵^{アビス}が上空へ飛翔する。

《目標補足。14α、4Dα、28β、12γ、16Δ、36ε！効力^{カモ}制圧射！》

今回の演習では

【 α 】アルファ ……戦車、自走砲、装甲車などの戦闘車輛。

【D α または α 】デルタ ……になると熱源を発していない（ \parallel 行動していない）となる。

【 β 】ベータ ……地上砲台、対空砲など

【 γ 】ガンマ ……通信設備やレーダー設備

【 Δ 】デルタ ……トーチカなどの堅固かつ小型な目標

【 ϵ 】イプシロン ……軍事関連の施設、航空基地など

【 ζ 】ゼータ ……その他の目標

となつている。

「了解！ラビリンズ効力制射撃……始め！」

主砲に比べるとかなり大ききで劣る咆哮。しかし鳴り止まない。

片弦に向けられる高角速射砲は7基。連装なので砲門数は14

1門あたりの発射速度は秒間2発に設定している。

つまり、一秒あたり28発の127mm砲弾が飛んでくることになる。

命中精度は二の次の制圧射撃。目標付近で榴弾が弾け、標的の破片が踊り舞う。

それに乗じて深淵^{アビス}から2発の「デスフレアーセレナーデ」が発射。すぐさま海面すれすれまで降下する。

「デスフレアーセレナーデ」というのはモノを簡単に説明すると気化性の高い液体燃料のをばらまくだけの無誘導タイプの空対地ロケットである。

単体ではあまり効果がないものの焼夷弾などの炎上物やエンジンなどから引火、爆発し広範囲を焼き尽くす。

大炎上する目標一帯。

《ラビリンス、射撃やめ！》

深淵^{アビス}からの一報が入る。

「了解、撃ち方あーやめっ！減速、15 knot！」

ピタリと止まる咆哮。

しかし、獄炎から移動して逃れた標的や範囲外の目標がまだ残っていた。

砲煙が晴れ、地上標的付近の煙がおさまる。

深淵^{アビス}が上昇し残りの目標の位置、数を報告する

「え、まだ残つてま……」

《……以上。残存目標を殲滅せよ。戦車は我々がやります》

深淵アレスからと大和さんからの無線に対して

「了解……アベンジャー35mmCIWS起動、殲滅せよ！」

こう答えた。

素早く向きを変ええるCIWS。バルカン砲身が高角速射砲よりもさらに細かく速い砲弾の咆哮を吐き出す。

音よりもはるかに速い機関砲弾が獄炎範囲外だった標的を跡形も無くミシンで布を縫うがごとく地面ごと耕す。

それに合わせて深淵アレスが上空から20mm六砲身ドアガン2丁と機首部20mmチエーンガン一丁を振り回し戦車を吹き飛ばす。

《…、目標の殲滅を確認。ラビリンス、攻撃やめ》

「深淵^{アビス}了解、撃ち方やめ」

私がそう言った時には地上は荒れた更地になっていた。

—————

大和 side

言葉にならない。圧倒的な破壊力。そして圧倒的な火力。
絶対的。パワーの暴力。

恐怖が私の心を支配する。こんな化け物と私の妹、そして最高のライバルとが殴り合
うなんて……

怖い所の話じゃない。本能が警鐘をガンガン鳴らす。

「……なんですか……今の……」

悪魔か殺人鬼でも見たかのような怯えた声を絞り出す。いくら絞り出してもしんない声しか出てこない。

「…う…これが私ですけど…何か問題でもありました？」

私は彼女のことを白露型と似た服を着た、改金剛型クラス、良くて改伊勢型クラスの高速戦艦だと思っていた。

しかし、そんな生易しいものではない。

駆逐艦以上の機動力

正確無慈悲な砲撃。

圧倒的な副砲類の対地制圧攻撃。

艦載機の強力で正確な運用能力。

データでしか見れなかったが、秋月型を3隻以上の圧倒的な防空能力。

どれだけ回避をしても追尾してくる神の弓矢「ミサイル」を放つ頭脳。

規格外にも程があります…。

「……夜雨以下5隻は帰投してください。私は後片付けをします」
「了解、お願いします」

岸に船体を横付けし、妖精を上陸させる。

破片や不発弾の処理をさせるためだ。

暑い夏の日差しが容赦無く照りつけ、地を焼き焦がす。

遠くに浮かんでいる入道雲が白く眩しい。

夜雨シュレッダーの餌食になった標的はもう手では集められない程焼け焦げ、塵になっっている。

「高角砲でこんなことができなんて信じられない……」

もし、この標的が地上部隊だったら……良くて壊滅。

いや、文字通り【全滅】

それ以外の表記ができないかもしれない。

もし、これが仮に私だったら……。

全身が粉々に碎かれ水面に散るだけで済むであろうか。

日本の最終兵器。

その大和型が沈むとなると太刀打ちできる艦が無い。

『怖い』という感情以上に私を支配する『焦り』

私が数々のライバルを自慢の主砲で殴り倒し、提督とともに築き上げてきた【最強】の二文字。

私に提督は絶大な信頼と愛情を注いでくれた。

ケツコンカッコカリという名だが、劣悪燃費、運用難題をかかえる私も育てて、私にも指輪をくれた。

そんな過去の努力が先程の一瞬で粉々に碎かれ、塵となり、消えた。

何もかもがわからない。今までの努力のすべてを否定された。

心にポツカリと大きな穴が空いた。その表現以外ない。
残らない真つ暗な闇。

それが徐々に大きくなり私を覆う。

世界が歪む。直線の物がグニヤリと曲がる。

(私ってこんなに弱くてちっぽけだったの……)

何もかも捨てて逃げだしたい。1歩でも遠くに逃げ出したい。

左手薬指につけた銀色の指輪が太陽光を鈍く反射して輝いている。

提督が私へとくださった大切な指輪……

提督……私ハ……ワタシは………無用のシロモノ………ホテル………?………?

頭が痛い……光が痛い……

意識が闇二墮ちて行く

「……助け………テ……」

ついに膝から崩れ落ち、床に倒れ伏した。

夜雨side

夏の暑い日は特に危ない。

大量の汗をかくななどが原因で体内の水分が不足し脱水症状を起こす日射病。

体内の熱を十分に発散しきれず高い体温に体が対処し切れなくなり熱暴走を起こす熱射病。

そして最悪の場合、その二つの複合版も起こりうる。

「総員、水分はしっかりとるように。しんどい場合は無理せずに冷房が効いている部屋でゆっくり休んでね」

「艦橋見張りからCIC、戦艦大和から発光信号。『ヤマトフス。SOS』です」
「えっ?!」

CIC内がざわめき立つ。

「^{アビス}深淵緊急事態発生規定により緊急発艦!外せる武装は全部外して医療器具を載せて!」
通信手!鎮守府とコンタクトを!航空管理長、深淵の指揮任せましたよ!」

「了解っス!」

航空管理長妖精が自席から航空作戦指揮管理座席に移動する。

《^{アビス}深淵緊急発艦!》

先程着艦した^{アビス}深淵にはほとんど燃料という燃料が残っていない。

増槽をつけかえれば鎮守府まで最速で送り届けられる。そう考えたのであろう。

飛行甲板に増槽と装着機が用意され、救護班が待機する。

ミサイル発射台とドアガン、チエーンガンを切り離す。

少しでも軽くし、速度を稼ぐためだ。

投下されたチエーンガンやミサイル発射台は即回収、艦内に格納する。

マーシャルの的確な誘導の元、素早く発艦準備をおこなう。

燃料補給をしながら増槽を付け替えつつ、救護班が乗り込む。

完了の合図。

《よし、深淵^{アビス}行けっ！》

《行つてくださいます！》

応急修理班長妖精や航空管理長妖精が熱血漢と化しているが私はそうなるわけには行かない。冷静に判断を下す。

《了解、発艦後戦艦大和へ向かへ。目標回収後、即この船の医務室へ。その後曳航しつつ鎮守府へ急行せよ》

彩竜エンジンが甲高く吠え、素早く上昇。

《了解、発艦完了。目標に向かいます》

「副長、戦艦大和の曳航準備指示その他を頼む。私は神電Ⅱで鎮守府に行くわ」

「了解」

私はC I Cから甲板へ向かう。階段を8段飛ばしで駆け上がり、甲板への扉を蹴り開ける。

その反動を使い上へ跳躍。艦橋の台座へよじ登り、全力疾走。小ジャンプからの着地、二段階目の跳躍で飛行甲板着地、前まわり受身をとり衝撃を受け流す。

神電ⅡがVTOLモードで降りてくる。

《……夜ちゃん、増設超高性能対地測定器例のアレを外すから受け取ってね》

神電Ⅱから赤外線／電波複合式の超高性能対地測定器が切り離され、私の手の中に収まる。

それを丁寧に専用のキャスター付き運搬機に載せる。
キャノピーが半分ほど開き手招きされる。

本来は1人乗り用だが大柄な人やロボットが乗り込むことを考えてかなりゆとりのある座席となっている。

私は風紗の膝の間に座り抱き抱えられる。

「夜ちゃん…OK?」

「OK。飛ばして」

神電Ⅱのキャノピーが締めまりゆっくり浮上した後、鎮守府まで雲行きが怪しい空を翔け抜ける。

鎮守府の本館の屋上。そのはるか上空でVTOLモードに切り替え垂直降下。

屋根にぎりぎりつかないぐらいで静止静止。

風紗から肩を2回タツプされる。降りれるよという合図だ。

キャノピーが半分ほど開き風紗にお尻を持ち上げられ体が宙に浮く。

そのまま屋上に着地。

それを確認した風紗は神電Ⅱを自動帰還モードにして降りる。

神電Ⅱは風紗が降りたことを確認して母艦から発される誘導電波を探りつつ飛んでいった。

「…えーつと、見た感じ出入口はないよね」

「無さそうね」

なーんて話をしていたら後ろから声をかけられる

「窓蹴り開けるなんてやめてくれよな。えーつと、夜雨だっけ？出入口はこっちだ」

真夏なのに白と黒のシマウマ外套を身にまとい、黒のガチ眼帯をつけ、サーベルを腰につけている緑髪の女の子。

「サンキュ。えーつと、木曾だっけ？」

「そうだ。とりあえずここから降りるぞ。んで、隣の娘が風紗だっけ？」

「そうよ。私は神電Ⅱのテストパイロットの風紗。覚えといてね」

「俺の名は木曾。以後よろしく」

話をしながらも壁4階から突き出ている錆びたハシゴを降りる。

めんどくさいから私と凧紗は4階にダイナミック着地をするが。

「やっぱり貴様らあの記録といい一航戦をボコしたことといいマジみたいだな」

「これでも身体技能は普通クラスなんだよ？ 男性には流星に負けるし」

「いや、それはないと思うぞ？」

「音よりも早い物を撃ち落とせる私にとっては音より遅いレシプロエンジン機を撃ち落とすことは朝飯前どころか出来て当然なんですよ」

「スゲエな、おい」

赤城と加賀……私の知ってる限りでは戦争の中盤ぐらいに出てきた凶悪空母。アメリカと同盟関係だったこともあり、合同で演習をしたこともあるが3倍の戦力差があっても負け無し。

頭の中で物凄く違和感を覚える。

「……：……：……：そういえば、赤城と加賀の2人、艦載機の使い方をいろいろ間違えてた気がする」
「凧紗もやっぱりそう思う？」

「一撃離脱機で旋回戦は流石にねえ……」

「俺は航空機に関してはからっきしだからわかんねえ」

木曾が速攻でお手上げポーズをとる

提督室で起こったことの報告の後、苦勞しながら説明を続けていたら艦が着いたよう
だ。

「夜ちと私で大和を医務室に運ぶわ。木曾とアンタ弟提督は医務室の1室空けといて」

「了解」

「なぜ俺だけアンタなんだ？」

「んなことはどうでもいいから行くぞ」

「ういーっす」

弟提督と木曾が扉の無い提督室から出ていった。

それに続いて私と姉提督が退出した。

0—8 補給

夜雨side

「明日のお披露目式、観艦式については後で送る電子版の方が見やすいと思うが、一応紙の資料も渡しておくぞ」

観艦式、お披露目式の流れなどを確認するために私はやっと扉の修理された提督室にいる。

「ちなみに演習に関しては私だけになるんですか？」

「そうなるわね。砲撃演習時に日射病と熱射病で大和が倒れてしまったから、仕方ないわ」

夕方、と言ってもまだ夏の日は残っているこの時間は蒸し暑い。さらに海が近いためか湿度が上がる。

そのためか皆が冷房を稼働させている。

おかげでたまにブレーカーが落ちるスレスレのところまで行ったが私《艦》から電線を引き張ってきて接続することにより、なんとか安定運転することが出来ているようだ。

室外機が重低音を奏でつつ熱気を放出している。

「病み上がりに無茶させるわけにもいかん」

「仕方ないと言えば仕方ないですが……なぜ盛大にお披露目式を？」

先程手渡された行事の流れや、このように動いてねという指示がびつしりと詰まった紙が10ページ以上は確実にある紙を流し読みしながらふと思う。

果たしてそこまで盛大にする必要性はあるのか、と。

「二応、貴女は書類上でチョット、アレ、なのよ。要は新技術のテスト艦娘とかいろいろめんどくさいことになって……わかりやすい説明ができないってこと。そこはほんとに申し訳ないわ」

「な、なるほど……」

（つまり、鹵獲艦娘か漂着艦扱い確定ですね）

「とりあえず今日この後の流れだが、日付が変わったぐらいに電力ケーブルを切断するが、それまでに神電Ⅱと深淵を基地滑走路の奥にある倉庫があるだろ？その中に止め

ておくように。んで、夜雨は特設4番ブースに艦尾《けつ》から入れて、シャッターを閉める。んで、部屋に戻って寝る。朝は8：00までに起きればなんとか間に合う。後はそれ見てなんとかしろ」

「なんとなくはわかりました。んで、特設四番ブースとは……？」

「その窓から見える小島あるだろ？あそこの裏だ。丁度観客席からは死角になる所、舞台袖だ。誘導は手空きの艦娘がやってくれる」

「んじゃ、あとはそれ見て頑張ってるね」

「りよ、了解です。それよりも大和さんの方は？」

「迅速な対応で大事にはなってる。お見事だ。まだ医務室で寝ているから様子でも見てこい。あ、22：00ぐらいから事前打ち合わせあるからそれには間に合わせろよ」

「22：00ですね。では失礼します」

足早に執務室から出て医務室へ直行。

医務室の扉をそつと開けると先客が一人居た。

裁縫道具の入った箱を椅子の上に置いてその上に座つてる女の娘。

割と小柄な体に青みがかつた黒髪のポニーテール。

そして慎ましやかなオレンジと紺の和の服装。

手には大和の服と思われる服を持っている。

「夜雨さん……でしたっけ？ いらっしやい」

「ど、どうもです」

（初めて見る人……誰なんでしょう。艦娘だとは思うのですが……）

「……航空母艦、鳳翔です。不束者ですが宜しく願います」

世界初の最初から空母として建造された艦で終戦まで生き残つた。

つまり、戦争の最初から最後まで知つている空母である。

「あつ…… ありがとうございます。こちらこそよろしく願います」

見事に思つてることが読まれてしまった。

「……大和さんの救命救急活動ありがとうございます。命に別状は無く明日の朝までには回復しますよ」

……考えていることが読まれ続けている。

私って考えてる事が顔に出るタイプなのかしら。

「…読心術です」

アツハイそうですか……。

「夜雨さん、ちよつとじつとしててね？」

鳳翔さんが立ち上がり私の身体をはかり始める。

肩幅、腕の長さ、足の長さ……胸囲までも。

「…慎ましやかなんですね。夜雨さんは」

反論しようとしてもが……けない。

何故か動くことが出来ない。

体に力を入れて動かこうとすればするほど体が固まる。

「…浴衣、似合いそうですね。ふふっ。いい香りのする髪の毛、美しいですね。…いい目をしてますね」

髪の毛を手ぐしでほぐされたり、顎に手を当てて……顎クイツ？とかいうアレをされたり……お腹のあたりを触られたり……ツインテールにされたり。

されるがまま、身体が動かない。

「今はね、んーと……麻痺状態と言いますか……仮の催眠状態というべきかしら」

なん……だと……。いつの間に……

「当て拍子と言うんだけど……。意図的に貴女が持つリズムを狂わせて私の配下に置いてしまう催眠術と言えればわかりやすいかしら」

全身が完全に麻痺したかのように動かない。

声を発したくても何故か発せない状態。

正しく「何も出来ない」状態である。

「今は何も出来ないでしょ？異世界から来たと聞いたのですが、非常に失礼な言い方も知れませんが、やっぱり人間の女の娘”なんですね」

「……よし。明日の朝までには浴衣を作っておきますので、観艦式までに袖を通しておいでね？女の娘なんだから、可愛い服の一つや二つ着なきや損よ？」

風紗ちゃんや龍奈ちゃんや鈴奈ちゃん……

「……もうそちらの3人分は出来ていますよ。後は貴女のみだけです。待っていてくださいね？ちゃんと繕いますから」

…あのー、鳳翔さん、そろそろ催眠術を解いて欲しいのですが。

「……あら、ごめんなさい。今解きますからね」

おデコに指が触れると身体を押さえていた不思議な謎の力が溶け体に自由が戻る

「お、戻った」

「…とりあえず、大和さんのお見舞いに来たんですよ？隣開けましょうか？」

「大丈夫ですよ。無事かどうかの確認だけなので…」

「……心配で来たんですね。少しは素直になってもいいんですよ？」

「ナンノコトカナー」

「……バレバレですよ。っと、そろそろ時間ですね。付いて来てもらってもいいですか？」

「良いですけど…大和さんは？」

「……彩雲の妖精さんを置いておきます。行きますよ？」

鳳翔さんの足元から彩雲妖精が3体ほど現れ部屋の中に散っていった。

「わあ…その能力私も欲しいかも」

「そう言えば、艦載機の操縦手が巫女さんと奇天烈な服を着た妖精さんでしたね」
「奇天烈って……」

実際こちらの世界で見ればかなり奇天烈な服を着ているかもしれない。

桜花改の妖精は確かに対Gスーツと呼ばれる全身タイツのような服を着ているし、深淵の妖精は防弾チョッキやパラシュート等の強襲揚陸装備をつけている。

こちらの世界では一番重装備の妖精でもスキー用の冬服程度である。

そんなことを考えながら鳳翔さんについていく。

すると鎮守府の本館の近くの二階建ての建物。

2番館の1階の暖簾のかかった店屋に入っていた。

「……え？」

こんな所に店屋ってあったつけ？

確かこの辺には海水蒸留、濾過循環施設とほぼほぼ使われていない備蓄倉庫があったはず。

「店屋に暖簾がかかっているということはこの店、営業中つてことですよね」

そう自分に言い聞かせて暖簾をくぐる。

居酒屋というべきか回らない方の寿司屋というべきか。

カウンター席と座敷席があり、座敷席で隼鷹、飛鷹、千歳、千代田等の軽空母が宴会という名の呑んべえ晩酌大会をしていた。

「ようこそ軽食喫茶／御食事処【ほうしよう】へ」

「いらつしやい夜雨ちゃん。遅かったじゃないの」

「……やつと来た……」

声の主をたどるとカウンターに瑞鳳、祥鳳、神通、川内が手をひらひらさせていた。

まさかのセルフ店員である。

そしてカウンター座席の奥から二つ目に鈴奈が座っていた。

「ヒヤッハー！お嬢様のご来場だぜー！」

「ちとせおねえくもつとのむよ〜」

軽空母の呑んべえ組はベロンベロンに酔っ払っていてろれつや行動がかなり怪しい。

「…カウンター席の鈴奈の隣いいですかね？」

「どうぞ〜」

「……どうぞ……」

あたりを見渡すとかなり凝った作りになっている。

熊が鮭を捕まえて食べてる木像や生け花、「夜戦上等！」と書かれた掛け軸等。

完全に艦娘達で運営されているようだ。

「そう言えばお金の方はどうなるんですか？」

「鎮守府関係者はタダですよ。はい、2人分のお冷と突き出しのおひたしになります」

そう言つて鳳翔さんがほうれん草のおひたしの入った小皿を出してきた。

「……注文してないんですが……」

「突き出しつて言うのはお酒のお供、そしてテーブルマナーみたいなもんですよ？」

鳳翔さんが説明をしてくれる。

年齢的にお酒を飲める歳では無いのやんわりと断つたが。

「そうだぜ〜！飲め飲め〜！」

「あの一、隼鷹さん？私も鈴奈も18なので飲めないんですけど」

「「「えっ?!」」」

話を聞いていなかった呑んべえ軽空母sと川内、神通が一斉にこつちを見てくる

「わ、わかい…」

千歳さんそんなに老けて見えてたんですか…。

「23ぐらいだとおもってた〜」

千代田さん私そんなにお姉さんじゃないです…。

「若いんですね…また今度一緒に演習しませんか?」

「……え?神通さんの指導…ですか?喜んで参加させてください!」

川内がギョツとした目でこつちを見てきた。

(華の二水戦を率いていた神通から手ほどきを受けれるのは、かなりのラツキーじゃないのかな?)

「艦娘に年齢なんて関係ないぜヒヤッハー!」

隼鷹が後ろから鈴奈と私に抱きついてきて耳元で叫ぶ

「耳元はやめて欲しいです」

「……隼鷹……さん耳元で叫ばないで……」

「あつ、わりいわりい」

「……はあ……」

「……とりあえず明日のやることを確認しなきゃ、ね」

おひたしを一口で全部食べてカウンターの上に書類の束を置きウインドウを開く。

「夜雨は律儀だな。今くらいは飲めよ」

「ちよつと隼鷹、いい加減にしなさい」

「飛鷹くそんな事言っちゃっていいの？お座り。かゝらゝの？？ほらあく飲め飲め
」

飛鷹が止めに入るもののおすわりの指示で素直に座ってしまう。

そして隼鷹は飛鷹の口に今さつき栓を抜いた一升瓶の中身を注ぎこんでいる。

飛鷹は逃げることなく飲み干すと潤んだ瞳で瓶の口までペロペロし始めた。

なんというか、非常に……うん……場所が悪い。

さつさと終わらせて修羅場になる前に逃げよう。うん。

「夜雨ちゃんかな？この着信音は」

「……夜ちゃん……メール……」

ユーロビートが持つ独特のテンポでテンションが上がる系の着信音が流れる。

「あ、マナーモードに変え忘れてた……っと、着信？」

いつの間にかディスプレイに現れていた着信の文字。

提督からの一斉送信のようだ。

—————

>>>艦娘全員

>>>巫女、妖精全員

明日の夜雨ちゃんのお披露目式と観艦式の流れの最終確認

I. 観艦式／お披露目式の前は一般有志の方々の舞台…9…00

II. 観艦式開始…11…00

?プログラム

司会?姉提督

記録?青葉

艦種説明等？各艦代表

一，軽巡洋艦／雷巡 代表？長良、木曾

二，重巡洋艦 代表？麻耶

三，航空巡洋艦 代表：鈴谷

四，特殊艦 代表：鹿島

五，戦艦 代表？大和

六，駆逐艦 代表？文月、白雪、涼風、陽炎

七，航空戦艦 代表？山城

？水上機

零式水偵、二式水戦、瑞雲

八，航空母艦／軽空母 代表？鳳翔、大鳳

？艦載機

1. 赤城、加賀、蒼龍、飛龍と零戦（2 1 熟、5 2 熟、6 2 爆）、九七艦攻、九九艦爆

2. 瑞鳳、祥鳳、飛鷹、隼鷹と天山、彗星、流星、流星改

3. 雲龍、天城、葛城と烈風、震電、紫電改、FW190T改

4. 瑞鶴、翔鶴と震電改、烈風改、紫電改二

九、潜水艦 代表？伊401

十、【防空戦艦】 夜雨と神電Ⅱ、深淵

注意 航行、安全 状態 緑旗 緑灯 等

砲撃、発着艦態勢 赤旗 赤灯 等

これを忘れずに。

※特殊艦：あきつ丸、秋津洲、大鯨、香取、速吸、明石
以上

早速ネットワークシステムを有効に使っているようだ。

電球の明かりがちらつく。

「……電力事情なんかならないんですかね。あ、大将さん〃激甘スクランブルエッグと……この【戦艦盛り】と【艦橋盛り】ってなんですか？」

「戦艦等の燃費の悪い艦娘は沢山食べるからね、特盛の上ってことよ」

「……へえ……」

「なるほど……炒飯と具沢山味噌汁と焼き鮭と野菜サラダでお願いします。全て多めで」

「それだけで足りませんか？」

「え？」

「大抵の方は戦艦盛りとかを頼むのですが、」

「まあ、足りなければ追加入れますので大丈夫ですよ」

「はい」

ちなみに、サイズは

大和盛り〳艦橋盛り〳戦艦盛り〳山盛り〳特盛り〳大盛り〳多め〳ちよい多め〳並〳ちよい少なめ〳少なめ

らしいです。

大和盛りは未だに1人で完食した者が居ないほどの量がでるとか出ないとか……。
ペア《2人》なら大型艦の一部が、トリオ《3人》なら大型艦の大半が完食したとい
う壁紙が貼つてあつた。

(…食べたい)

欲求が私を突き動かす。

「……挑戦したら……?」

鈴奈が意図を読み取り、催促する。

「やっちやいますか」

「……うん……」

鈴奈と私の凶悪大食いコンビが本気モードになるとは思つてないだろう。

「炒飯を大和盛りに変更お願いします」

私と鈴奈以外の全員がギョツとした顔をこちらに向ける。

後で聞いたのだが、大飯食らいの大和ですら半分弱残してリタイアした『大和盛り』に
チャレンジするのは正気の沙汰では無いらしい。

「えっ、あつ、はーい。大和盛りね」

なんとか再起動を果たした鳳翔さんが注文を書き換える

「……激辛炒飯に……豆板醤……タバスコ……三焦……秘伝鬼辛マシマシ……大和盛り……」

更にギョツとした顔を向けられた。

多分『激辛』に対してだろう。

（鈴奈は辛いもの好きだからなあ……仕方ない）

「いけ〜夜雨〜」

「鈴奈ちゃんやっちゃえ〜」

「ヒヤッハー!! そう来なくっちゃ!!」

呑んべえ軽母sがやし立てる

「3分ほど待ってて。人集めてくりゆ」

瑞鳳が艦載機を召喚しながら走り去っていった。

（……艦娘の特殊能力?とかいう奴らしい。私にもあるんですかね。あるとすれば電気関連か管制系か……いや、キャラ丸かぶりするからソレは無いな……）

30分ぐらいそんなことを考えていたら

「大和盛りの炒飯と激甘瑞鳳卵焼きと焼き鮭……さらには味噌汁か……。完食できるのか？」

長門と陸奥が大和盛りの炒飯の皿を運んできた所だ。

皿というよりもキャスター付きの釜というべきか。

一般的なバフタブよりもデカイ。が、

「……思ったより少なかったかな。いただきます」

味はかなり美味しい。箸（スプーン？）がどんどん進みあつという間に釜の中身が減っていく。

「嘘、でしょ……」

「なん……だと……」

姉弟提督が資材表と総重量を見ながら真っ青になっている。

「見かけよりもかなり少ないですね。野菜特盛ラーメン2つ追加で」

この時点で炒飯の残りはほぼ1/4。炒飯だけで大和がリタイアした量を超えたものが私の胃袋に入っている。

さらに他の出されたものは全て胃袋の中に入れているので実質大和よりも多く食べ

ていることになる。

お食事処「ほうしよう」は完全に私の大食い会場となっていた。

「お〜つと！釜の中身が空になっているぞ！これはどういう事だ！挑戦者の胃袋は底無しか〜！」

いつの間にか来ていた霧島がマイクとスピーカーを持って実況を始めている。

特盛ラーメン用のドンブリを2つ重ね、激甘瑞鳳の卵焼きを5皿重ねた上で特盛唐揚げを頼張る。

「夜雨ちゃん……そろそろやめといた方が……」

姉提督からストップサインが出る。

「そうですね。次ラストでやめておきましょうか。扶桑艦橋盛。パフェの大和盛り。パフェください。

会場がざわつく。

未踏の大和盛りをたいらげてからのラーメン2杯や焼き魚、卵焼き5皿を食べて「まだ入るのか」と。

天井につくかつかないかぐらい積み上げられた「扶桑艦橋。パフェの特盛」が運ばれて

くる

「美しいですね。食べるのが勿体ないですが、いただきます♡」

「いったー!!豪快にかぶりついた!!」

霧島が声を張り上げ実況する。

「すいません霧島さん。マイク音量五月蠅いです」

「アツハイスイマセン」

音量調整をして実況を続ける。

「豪快に食べる!食べる!提督ストップがかからなければ全てを喰らい尽くしてしまうのか?!」

「すいません!青葉です。今の気持ち、いかがですか?」

青葉がメモ帳とペンを持って取材しに来た。

「ひあわへへふ♡」

「成程……大和盛りの量は少ないですか?」

「はなりふふなひへふ♡」

「……夜雨盛りメニュー作らないと満足しない感じですかね?」

「ほへへほへほほまへはへまへんほ♡」

天井につくかつかないかぐらいあったパフエが全て私の胃袋の中に収まり拍手が巻き起る。

「ご馳走様でした。美味しかったです」

「夜雨が完食したぞ……!!」

「あいつの胃袋は化物か！」

「Congratulations!!」

ん……?なんか英語が聞こえた気がする。まあ、いいか。

「……ご馳走様……もつと辛くしても……大丈夫ですよ……」

鈴奈も顔色一つ変えずに完食している。

……周りの人数名が気絶しているが。

多分横から一口ほど食べたか舐めたかしたのだろう。

『気絶級』の激辛物が大好きな鈴奈のは平気だが、『ごく普通』の激辛物が大好きな程度では当たり前だが気絶する。

仮に耐えれたとしても2口目で爆散するであろう。

「……げえ、演習だけでこんなに使うのかよ?!」

弟提督が青ざめている。

「提督、見せてく……なっ?!」

一般艦娘の資材消費は多くても3桁後半程度である。

夜雨はそれよりも桁が二つほど多い。

「……うちの鎮守府でよかったわね」

「ああ、こんな化物が普通の鎮守府にいたら即破産だな……」

そんな声が各所で聞こえたとか聞こえなかったとか。

0—9—A
〈表舞台〉

私を含め世界の有名な戦艦4隻と正規空母2隻、米海軍の護衛空母2隻、戦艦1隻を中心に駆逐艦4隻、軽巡洋艦2隻、イージス艦数隻、ミサイル艇数隻、沿海域戦闘艦3隻が輪型陣を組む。

沿海域戦闘艦の本来の持ち場は沿岸海域なのだが、深刻な護衛艦不足ということで急遽駆り出されている。

私の就役よりかなり前に就役してから数多くの実験、深海棲艦との戦闘があったがほぼ無傷生き残ったということは相当な腕があると思っても間違いないであろう。

私と護衛艦はアメリカ本土から南アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア経由の陸伝いの長旅だったが、皆は疲れ一つ見せないようだ。

陸伝いではないルートだと通常艦艇は即深海棲艦に補足され数ゴリ押しや相性の悪い深海棲艦により撃破されてしまうらしい。

例えば「イージス艦」なら「通常の艦艇」なのでミサイル攻撃に数発耐えられる程度に硬い戦艦や重巡洋艦を盾にしつつ水雷戦隊を進めて砲撃戦で各個撃破する、と言った

ところだ。

……私は、昔、みたいに人間が乗ってくれた方が落ち着く。が、何故か乗った人は不可解な吐き気や腹痛、船酔いによつてすぐに降りることになった。

……これはこれで仕方ないのかもしれない。

道中で敵艦隊に数回襲われてイージス艦数隻が犠牲になっている。だが、我々は悲しむことは出来ても止まることはできない。

日は落ちてしまったが、このまま行けば何事もなく……もう既に何事かは起きてるが。

『先頭の沿海域戦闘艦1番艦、Freedom, 艦載ヘリからの入電！敵艦隊発見！数15以上！戦艦夕級F1隻、戦艦ル級Fが2隻、ヲ級正規空母Fが4隻、イ級後期型Eが7隻！雷巡チ級2隻他数隻が接近中！迎撃されたし！』

その通達よりやや遅れて私達を取り囲んでいたイージス護衛艦が一斉に艦対艦ミサイル『トマホーク』『ハーブーン』を発射する。

敵の頭数を減らす攻撃だが重巡洋艦クラス以上には命中しても装甲に阻まれてまともなダメージが入らないであろう。

護衛空母からの夜間攻撃は不可能なので実質減らせるのは
駆逐、軽巡、雷巡数隻程度だろう。

『第二艦隊、総員夜戦準備！川内！お待ちかね夜戦だ！』

三つつの鎮守府からなる連合艦隊を束ねるイツサケンタ提督の声が無線から流れる。
イツさんは小回りの効くミサイル艇やイージス護衛艦に分散して乗っているようだ。

「やったあ！夜戦だあ！！夜戦！夜戦！速く夜戦！」

おうふ……。

そう言えば大日本帝国海軍の水雷戦隊は夜戦フェチ雷撃厨のごとく夜戦好きだったわね。

「Let's go. センダイ。行ってこい」

「えーつと、Thank you admiral Mr. Issa Kenta で、
あつてたつけ？」

「えーつと、多分あつてますよ。姉さん」

「まあ、いつか。第二艦隊、総員夜戦だー！突撃！」

「「「おおー！」」」

「照明弾炸裂を確認。探照灯照射。私に続いて！機関全速前進！」

灯された二つの光とともに交戦が始まる。

探照灯の光の道筋がのび照明弾が打ち上がり煌々と敵艦隊を照らし映す。突撃。とにかく接近して意識を私だけに向ける。

交差する主砲弾と機銃、曳光弾の光。

水面下では魚雷の魔の手の駆け引きが繰り広げられ、牽制射撃と本命の交わし合いが行われる。

敵からの攻撃を的確に回避し、お返しとばかりに砲撃を加える。

暗い闇の中に隠れた”残りの5隻分”の無航跡の酸素魚雷ロソングランズが投げ込まれ、敵に殺到する。

「水柱四つ！酸素魚雷命中！2隻目のヲ級Fの行き脚止まりました！」

「ビスさん、Iowaさん、支援砲撃をお願いします！」

「了解、Fire!!」

「了解。さあ、私の火力見せてあげるわ：Open fire！」

38cm連装砲改が火を吹き重巡洋艦をなぎ倒す。

16inch三連装砲 Mk. 7から放たれた砲弾がヲ級Fの砲塔に突き刺ささり、中の砲弾を巻き込んで爆散する。

「次発魚雷装填完了まで後135です！」

「了解、隠密行動で！」

「雪風の主砲弾、バイタル貫通！イ級E—A炎上！」

「次ッ！」

「谷風さんの魚雷命中だよ！イ級後期型E—B爆散！」

「次ッ！」

怒声と波を切り裂く音を上書きする砲声と砲炎。

しかし、一番狙われるはずの神通は未だにほぼ無傷。6隻からの集中砲火を受けているが、ある弾は装甲に阻まれ、ある弾は波に阻まれ、ある弾はそもそも当たらない。

戦艦ル級Fからの砲撃を至近弾で回避。波をかぶりず濡れになりながらも妖精さんは勇猛果敢に機銃や砲を打ち返す。

「……次発装填済みです。皆さん、殺っちゃって！」

残りの5隻からの一斉雷撃。

水柱と炸裂音の後には残骸と無傷の12の艦の影しかなかった。

—————

夜雨side

in 御食事処 〳 鳳翔〳

「あひひな提督も琴音提督も久しぶり。元気にしてた〜？」

190の長身ボディが御食事処の机席に座っていた。

男性としてはかなりでかい方だがひよる長いと言う訳では無い。絶妙にバランスが整った体型である。

そして若干だが英語なまりのある話し方をする。

「元氣ですよ師匠。前回はぼろ負けしたので明日は負けられませんね」

その左隣にいかにも『マニア』や『ゲーマー』が似合うメガネが座っていた。

が、むしろ運動のほうができそうな体型の方が近いというギャップを持っている。

「ちーっす。今回の公開演習でも勝たせてもらおうぜ」

なぜこんなところに迷彩服を着た奴が居るのか、という疑問が出る奴もそこに鎮座していた。

というか、隣にアサルトライフルが置いてある時点で完全にサブゲーマーかミリオタですよ。

「やっとな。というか、おせーぞ」

「いやー、わりいわりい。アメ公がフルボッコされてたから通りすがりに武蔵とかるくお仕置きしてたわ。せやから遅れたwスマソw」

「琴音おまwwwお仕置きとか言って完全に、ずっと俺のターン、だったじゃねえかwww」

「あり？そうだったけ？w」

「すつとぼけんなwwwレ級出てきたときとか15.5三連装砲塔の上で腕を組んで『ヒヤッハー武蔵は最高だぜえw』とか言ってたじゃんw」

「いやー、一回やってみたかつたんよwまあ、お陰で助かったのも居るみたいだしね？」

「せやなww」

「で、隣のは？」

「防空戦艦の夜雨ちゃんよ」

「夜雨……？防空戦艦……？そんなやつ居たっけ？」

「え？この子が夜雨？こんな可愛いのが来たの？良いなー！！」

「マジかw」

「見るだけでわかる。普ww通wwにwwつwwよwwそwwうww」

「え、えつと……あの……その……私、ここにいても大丈夫ですかね……？」

「いや、むしろ居てくれないと困る」

「あ、自己紹介まだだったな。俺はイツサケンタつて言うんだぜwよろしくw」

「あ、はい。イツサケンタ提督ですね。夜雨です」

「俺は琴音つて呼んで。嫁艦は武蔵！最高だぜ」

「え、あの大和型戦艦の、武蔵、ですか？」

「おう。その武蔵だ。そのへんの武蔵とは一味違うぜ？」

そのへんの武蔵つてどのへんなんでしょうか……。
「え、えと、よろしくなのです」

「あひひなです。この中では一番の新入りですが頑張ります」

ズレたメガネを直しながら汗だくのカッターシャツの第二ボタンをけるあひひな提督。

…うわ、凄く腹筋周りが筋肉質。

「あひひな提督ですね。よろしくお願いします」

「あー……この流れで相当な変態キチとか梓あずつちとか夜峰やみねつちとか後3人ほど来て欲しかった人も居るけどまあ、仕方ないか。んじや、飲もうぜ。お茶ですが…」

「二乾杯杯を手に捧げよ！」「二」

「乾ば……なんですか、それ」

「ああ、俺らの儀式みたいなものよw」

「ま、気にせんといてくだしあ」

「アツハイ……」

———【ここから先はダイジエストDA☆】———

琴「とりあえずここをこうしてこうじやる？」

アヒナ「いや、こっちの方がいいかな？」

イツサ「それもありだな。ローテーション考えるとこれもありだけど」

姉「なるほどね。これはやめときましょ」

琴「んでここから射撃ぶっぱかな？」

姉「そうそう、そこから射撃ぶっぱ」

イツサ「基地航空がこっちから回り込んで増槽ぼーい？」

アヒナ「護衛機も増槽ぼーいですね。できんかったヤツは滑走路にgoで」

イツサ「このへんから客席と反対側にドーン？w」

姉「やな。客席にドーンはダメ絶対」

アヒナ「警備はは門前に2でしょ？」

琴「んで、こことこことここに立たせると。あ、ここも居るね」

イツサ「ここも必要だね」

姉「ここはそんなに必要じゃない気がする」

琴「んじやその分をこつちに……」

夜雨（…あれ、私の居る意味は……？）

—————

翌日

まだ日が昇りきってない時間だが、真夏の暑さに負けないほどの人々の熱気を放っている。

サングラスを装着してる人、日傘をさしている人、テントの中から減光板付き双眼鏡で見てる人、ノートパソコンを膝の上に抱えてる人、人の丈と同じぐらいの3脚の後ろにカメラを構える人、テレビの取材とかで使われるデカイ撮影機材を担ぐ人。

見渡す限りの人。

予想されていた人数をはるかに超えている。

初めて艦娘がお披露目された式が誇っていた過去最高記録を軽く更新する程の人が比較的小さな島に来ているそうだ。

おかげでスタンドには入りきれない人用の『立見席』や、本来船着場となつてはいる棧橋も満員。本来駐車場として使われるはずだった場所も人で埋め尽くされている。

人の圧力で落とされたか、自発的に飛び込んだかは知らないが膝や肩まで海水に浸かつて見ている人もいる。

勿論だが有料の観覧用フェリー、本来は規律違反だが自作のいかだ、カヤックやモーターボートで見ている人もいる。

『あーあー、マイクチェック。ワンツーワンツーさん、しー！』

今現在、海に面した仮設ステージの方では金剛型シスターズ四姉妹のコスプレをした自衛隊員が大道芸パフォーマンズをしている。

本来は白露型の格好をした人達のバンドと那珂君のダンスがメインである。

勿論この人たちも自衛隊員世界一？熱いお兄さんのコスプレであるが。

霧島が実機マイクでジャグリングをしながらバランスボールで練り歩き

金剛がティーカップで艀装の上にバランス積み上げをした状態で飲み物を配り

比叡地獄ッキングが魔法の用品をしている。

ちなみに、榛名はそれらを取りまとめる司会役をしている。

「しっかし、すつごい人ですね」

「……少なくとも……万単位は居る……」

私と鈴奈が特設4番ブースにつけられた二階の窓から外を覗いている。

「艀装主機点検完了！調整全部終わり。いつでも行けますよ」

「……どもです……」

「あとは出番待ちですね」

「……うん……」

わざわざ本体の艦をここに入れておく理由はわかりますが、何故私だけ入れないといけないのでしょうか。

春雨（剛）も入れておくとか……あるじゃん？

そして私よりも頑張っている妖精さんの方が出るべきだと思おうのですが……。

「そういえば。鈴はどうするの？」

「……本体の艦……そこにいる……」

「了解」

「あ、夜雨はここにいたんだ。お祭りの方を見に行ってもいいのに」

「長良さんでもです。え、いいんですか？」

「勿論。ほら、お鈴も行くよ」

「……え……ちよ……待つ……」

「ほら、走る」

「……はあ……」

「私も浴衣を着たかったー!!」

「艦娘は基準服固定なんですよ……ごめんなさいね？」

「……動きにくい……」

私以外の3人が鳳翔さんに問答無用(?)で浴衣に着替えさせられていた。

ちなみに私は基準服とか呼ばれる各艦娘に割り振られた指定の服を着ている。要はいつもの服だ。

鈴奈が黒ベースのカラフル水玉浴衣を着ている。

「まーまー久しぶりのお祭りなんだし?別にいーじゃんw夜ちゃんはどんまいってこと

で」

そんなことを言う風紗は水色ベースの金魚ちゃんだ。

「ごめん、遅くなりました」

「え。」「……………え……………」

これが大人の余裕というものか。

美しい。その一言でしか形容できない。

普段は油やススで汚れた作業着を着ているから目立たないためか、元々がかなりの美人さんであったためか。

同性でも思わず見とれるような容姿。

黒ベースの赤、緑、水色、黄色4色ラインの浴衣だが、何故か少しえつ……………セクシーである。

そして龍奈にしては珍しくポニテである。

唯一どこかの厚みが絶望的に足りないため台無しになっているが…。

「んじゃ、祭り行こー」

4人で人の流れの波をかき分けていく。

射的、亀掬い、綿あめ、たこ焼き、ベビーカーステラ、金魚雷掬い、爆雷落とし、え？

「金魚雷掬い?!金魚じゃなくて?!w」

「爆雷おとし…絶対駆逐艦娘が考案したやつですね」

「……なんでもあり……」

「安全面的には大丈夫なんですかね……w」

「ちよつと私射的するわ。オツチャン1回分お願い」

「夜ちゃんの神エイムに期待やなwオツチャン私も」

「……私も……お願いします……」

「みんながやるなら私もやるよw」

店番のオツチャンが射的用具エアライフルを渡してくる。

隣の自衛隊所屬と思われるおじさんが

「弾込よーし安全よーし」

とか言ってる横で4人が射撃を開始する。

「大漁大漁♪」

ボコボコ商品を落としまくった4人はその後数店をめぐりさらに大量獲得をしていた。

水風船ヨーヨー(?) 数個、お菓子2袋半、綿菓子、金魚数匹、スーパーボール1袋
e t c …。

4人でも分担しないと持ちきれない量となり一部は(こっそりと部分展開した艀装に)格納している。

「……ビヨーンビヨーン……」

鈴奈は水風船ヨーヨーが気に入ったのが、ずっとビヨーンビヨーンしている。

「綿菓子美味しいです」

……龍奈は色気よりも食い気のようにだ。

「頭キーンk t k r」

「たこ焼き6個入りくだはいな〜」

よくよく見れば他の艦娘も私服or浴衣でお祭りを楽しんでいる。

意外かもしれないが、艦娘や他のキャラクターに化けているコスプレイヤーも多い。

「いよいよその銀髪ボインと淫乱ピンクヘアのネエチャン！俺等とイイコトして遊ぼうぜ？ついでにそこのお嬢ちゃんの4人も」

8人ぐらいのチャライ不良に半ば取り囲まれる。浜風ちゃんと春雨（剛）ちゃんも絡まれてるし……

「いいことしようぜ??な？女ぼっかりだったらつまんねーだろ」

唐突のオシをされても困るんですが……というか、息くつき。

「夜ちゃん、コイツら殺っちゃっていいかな」（ハンドサイン）

「向こうからの身体接触があればOK。コイツら刃物類持つてるかも」（ハンドサイン）

「そのノツポとペったん、ナニしてるんや？」（肩ほ…）

龍奈の肩を触った、いや、触ろうとした金髪の金属チャラチャラサングラスが放物線を描いて海に落ちる。

「気安く触るのはいいけど、私の気には触らないほうがいいわよ?」

「頭が世紀末のお猿さんの相手してる暇は無いのでお帰りください」

「黒髪ロングヘアアの貴様アア!! ついでに浴衣あ!! お前ら俺の息子で泣かせたくなつたわ!!!」

刃物を抜いて切りかかってくる不良品。

まあ、頭から不良品と決めつけるのは良くないか。

「はあ……どうして頭が世紀末のお猿さんは刃物を持ち運ぶんですかね……」

一応程度の連携は取れているがそれよりも数が多い方が厄介だ。

応戦用にこちらも飛び道具や刃物を出してもいいが、事が大きくなる方が更に厄介だ。

「女に刃物使う屑が。使っているものぐらい考えろし。あ、そんな頭もないから考えれないんですかああ?」

絶対零度。冷徹無慈悲。からの無駄な煽り。

横合いから出てきた男のグーパンチがチャライ男の顔面に食いこみ吹っ飛ぶ。

その後居た男に拳の雨が降り注ぐ。……煽りさえなければカツコ良かったのに勿体無い。

「夜雨さんだっけ？大丈夫かな？」

「あ、琴音提督！ありがとうございます。全員無傷よ」

「ならよし。とりあえず、伸びたチンピラの山を憲兵さんに押し付けさつさと逃げるぞ。ことがでかくなるとまずい。浜風と春雨も逃げるぞ」

「了解」

「ですね」

「……賛成……」

「OK」

「はい」

「了解です」

「……………やっとな……………式……………始まった……………」

空砲3発。始まりの合図だ。

艦載砲から放たれる砲撃音や機銃の射撃音が響き、零式艦上戦闘機五二型や烈風改、紫電改二、震電、二式水戦、などがエンジン音を轟かせながら空中戦を繰り広げている。本来は高高度迎撃戦闘機で一撃離脱機のはずの震電に旋回戦をやらせるのはどうも理解ができないが……………。

旋回でもたついている所を可変式水力偏向ノズルや可変翼を使い航空力学を半分ぐらい無視した軌跡で神電IIが襲いかかる。

そのまますれ違いざまに数機撃墜判定。

圧倒的な数の差はあるがどれもレシプロエンジン機なので深追いをせず『一撃離脱戦法』に徹すればまず負けることはないだろう。

海に目を移すと新造艦娘のIowa、神風型2隻、ポーラのお披露目。本家川内型軽巡洋艦シスターズの洋上ライブ。

大きな盛り上がりを見せているがあくまでコッチはオマケらしい。

本チャンは私達……………。

—————

「えー、次は本日のメイン、新造実験戦艦のお披露目です」

歓声と大和音楽隊のファンファーレとともに対空特化の艦が6隻：吹雪、秋月、照月、初月、麻耶、皐月と

世界の戦艦が4隻：アイオワ（Iowa）、イタリア（Littorio）、ビスマルク（Bismarck dreie）、武蔵が袖から入場する。

『そのまゝに今からちよつとしたデモンストラーションを行います。この6名+4名、計10名の艦隊にに対空戦闘をして貰います。攻撃側は自衛隊の方で有名な6機、目標は彼女らの中央にある3隻の曳航船です。では、演習始めっ！』

手に、腕に、腰に、背負い込み式の艤装に付いた砲や機銃を目標に向けて射程内に入るまで構えて待つ。

「さあ、行くぞ！ 撃ち方：始めっ！」

「ビスマルクの戦い、見せてあげるわ！ Feuer！^{発射！}」

「一番、二番主砲狙え：今よ、撃て！」

「Lady：OK。さあ、私の対空火力見せてあげるわ。Open fire！」

「行っけえー！」

「撃ち方始めっ！」

「ガンガン撃って!!」

「摩耶様の攻撃!喰らええ!」

「ボクの対空攻撃、始めるよ!」

「僕が、皆を守る!」

爆音とともに濃密な砲弾幕が形成され、黒煙の花が開く。

それを縫うように機銃の曳光弾が空を切り裂く。

それぞれが得意とする分野での分担攻撃。

対空カッツトインと呼ばれる猛弾幕を展開する。戦艦Sもそれに負けじと嵐の如く空に弾丸を撒き散らす。

それをやすやすと貫く5機の編隊。先頭のF/A-18Fスーパーホーネット、F-22ラプター、F35ライトニングIIの鶴翼陣形。

それに続いて直線翼の無骨な機体が突入する。

特徴的なターボファンエンジンの音。

A10サンダーボルトIIだ。

先頭のF/A-18Fスーパーホーネットとが白煙を上げる。

一機撃墜判定。急上昇して編隊を離れる。が、もう既にA10は投弾態勢に入っている。

『対空戦闘として必要な物。それは各艦の連携や対空砲火の精度、射程です。が、音速を超えるような航空機相手なら既存の鑑娘では機銃等の旋回速度が遅く、まぐれで落とすのがやっとです』

A10が30mm機関砲をぶつ放してから3発の誘導爆弾を投下する。

吸い込まれるように曳航船を貫き、3本の赤と黒の煙が上がる。3隻の標的艦は大破炎上判定。

「もし、仮に深海棲艦が音速機を運用してきたら残念ながらこのような事が起こります。一方的な虐殺もいい所です。が、我々にはそれに対抗するために造られた……というよりも来てくれた心強い方が居ます」

会場がどよめく。

そんな奴を待ってた！

新しい改二爆誕か？

いや、それは無いだろ。

江風改二
マローン？

どうせ深海棲艦への攻撃は出来ないんだろ。
とか、口々にやじを飛ばす。

「…えー。この映像をご覧ください。皆さんは目を疑うでしょう。こんな事があつてたまるか」と

司会の姉提督がスクリーンに映っている映像を切り替える。

そこに映し出された光景を見た者は皆、こう言うであろう。

『一言で言い表せば虐殺されるだけの未来しか見えない』と。

潜水艦4隻に対してたった1隻のごく普通の戦艦。

普通に考えれば一方的に潜水艦が戦艦を沈めて終了。戦艦は手も足もですにやられるだけ。

そんな構図だった。

しかし、そこに映し出されていたのは一方的に沈められる潜水艦の映像だった。

『普通は攻撃できない』はずの潜水艦に対して砲弾や噴進弾を浴びせる戦艦。

映像が終わった瞬間、凜とした声とともに夜雨が降る第四特設ドックが盛大に大爆発した。

0—9—B　　〽洋上演習〽

夜雨side

時間は前回よりも少し遡る。

注水警報と共に特設ドックに注水が始まる。

「……………すう……………はあ……………よし。各班点呼！搭乗確認後、主機起動用意！」

《総員点呼！》

《点呼よし！搭乗確認！》

「了解！外部送電用電力ケーブル切断！」

《了解、切断します》

艦舷と集電板を接続していたケーブルが妖精さんによつて抜かれ、格納される。

背面艤装の中からガスタービンエンジンのファンが甲高い音を奏でる。

不安定になりながらも私の足が地面から浮かぶ。

そろそろ艤装の電源を切れば多分私の足のくるぶしぐらいまで沈むだろうか。

『両腰の接合部が正常に接続されているのを確認……内部電源onの確認……スタビライザー出力5……正常域……確認……』

脚部につけられたスラストノズルのようなものが下を向いて私の安定を保つ。

『システムの最終チェック……完了。安全起動水量、水位を確認……よし！』

いくつものウインドウが私の周りで開いては閉じ、数字をスクロールする。

そうこうしている間にも注水され続け、海水は私を10m以上持ち上げている。

多分後ろに格納されている艦も浮き始めている頃かな？

時計の針が14:00を指す。本来の予定よりも1時間程遅れだが、この時間と昼に指定されているから大丈夫だろう。

「14:00、予定時間ですね。機関、主機核融合炉もとぎ起動！」

『了解。主機核融合炉、起動！』

吸水システムを起動……核融合炉の安全起動域まで加圧と加熱をする。

足の裏から海水が吸い込まれて水素と重水素、三重水素を生成、核融合炉がプラズマ化してぶつけへりウムとともに莫大なエネルギーを艤装に供給する。

「出力、炉心圧、温度正常。重水素濃度よし。起動確認。正常動作、発電出力確認よし。」

総員傾注せよ」

副長から艀装の上から艦内用の……いや、艀装内用と呼んだ方が正解か。

マイクと猫耳のようなものがついたヘッドフォンを渡される。眼鏡の邪魔になりにくいタイプなのでかなりありがたいけど

(なぜに猫耳……)

演習用の砲弾が近くで爆発したのか、小さな爆発音とともに仮設ドックの壁がカタカタと揺れる。

「爆発音……？まあ、いいか。総員、緊張して待機。今日は我々の為に皆が用意してくれた晴れ舞台だ。縁の下の力持ちの皆、提督の皆、艦娘一同に感謝と敬意を持って堂々としていきましょう。大丈夫。誰でも必ず始めてという物がありますよ」

「とかいう私も緊張してますけどwまあ、頑張ってくださいませよう」
「鈴ちゃん、龍奈ちゃん、艦をお願いね」

上半身だけひねって後ろ向きに敬礼。

二人もそれに答礼する。

後は開門を待つだけ……

《スリットオープン…ゲート… Error!!》

門の下部のスリットが開き海水がダバダバと流入するが、門は一向に開かない。

(……あれ? 時間を間違えたのかな……?)

一応密閉空間ではないが、気温と海水による湿度により蒸し暑くなっている。

「えーつと……冷房のスイッチは……これかな?」

空中にウインドウを開き冷房のスイッチと思われるモノを叩く。

ヒンヤリとした空気が身体を包み不快な空気をシャットアウトする。あー、快適。

「こんな便利な機能も付いているんですね。変な所は先進的というか…無駄な所に力を費やし過ぎというか……」

《…あのー…夜雨さんでしたっけ? 冷房ありがとうございます。しかしこの艦は快適ですね。》

灰色の救命胴衣を身につけた赤いリボンをたなびかせる青いセーラー服の妖精さんが双眼鏡を手に持って居た。

なんとなくだが鳥海に似ている。

「えーつと、確か……演習の時に判定をする妖精さんでしたっけ?」

《あ、はい、そうです。厳密には「熟練見張り員」って呼ばれてますがそれでも構いません。あ、えーつと。これから私は貴女の専属になります♪》

「専属…ですか。慣れないと思うけどよろしくお願いしますね。」

《こちらこそよろしく願います！》

何この娘びよこびよこ可愛いんだけど。

よく見るとサイコロとか謎のカードとかルルブとか持っているんだけど。これが終わったたらTRPGでもやる気なんですかね。私も一回やってみたいんですけど。

《にしても開きませんね》

「ですねー。時間を15分も過ぎてますし…」

《どうなってるんですかね…（双眼鏡で開閉装置を観察中）…あー…あそこの回線がショートして開閉装置のワイヤーを切断してますね》

指をさされた方向を見上げるとワイヤーがプランプラン揺れてたまに火花を発している。

「あちゃ…ほんとだ。あ、扉の近くの妖精さん！電気が漏れてるから近づかないで！」
『えっ、り、了解！』

直そうと梯子を登っていた妖精さんに注意を促す。

《ナイス判断》

「とりあえずは感電回避できたから良しとしましょう」

漏電箇所を修理するためにブレーカーが落とされ一気に真っ暗になる。

ソナー用の猫耳のようなものが見ついたヘッドフォンを外し壁の外に耳を傾けるとまだか、まだか、と催促する声が出てき始めている。

扉開閉装置が息をしてないから外にでるには扉を引っぱがして開けるしかない。

これ力ずくで引っぱがして大丈夫かな……。

「艦長、弟提督から通信です」

「繋げて」

『夜雨、聞こえるか?』

猫耳ヘッドフォンから弟提督の声が聞こえる。通信機も兼ねてるようだ。

「こちら夜雨、感度良好。どうぞで」

『時間が押してるから端的に言うぞ。扉をぶっ壊しても構わん。とりあえず出てこい。』

「了解！ドック内の妖精さんと甲板員は退避せよ。弟提督さん、次の私の発言を拾ったらミュートにして頂戴。スピーカーをぶっ壊したくなかったらね」

とある面白いことを思いついたので、一応程度の空砲警報を鳴らす。普通に考えれば入り切るはずが無い艦装内に次々と妖精さんが入っていく。なんですよ。

最後に熟練見張り妖精さんが入ったのを確認して扉を閉める。

それを確認してから眼鏡と猫耳ヘッドフォンを装着、同期を行う。

「妖精さんの退避を確認。超重力電磁防壁、定格出力で起動！主砲1、6番、仰角65度でシャッターと屋根の接合部をなぎ払え！2から5番まで左右25度、仰角20±10度！火薬空砲！斉射！ソナーミュート！」

光線が開閉装置を蒸発させ、腰の艦装についた主砲の爆風によって特設ドックのシャッターの開閉機と厚さ5cmは確実にある分厚いシャッターとの接合部を無理矢理引き剥がす。

「……よし。超重力電磁防壁、シールドフレア！主砲第2射！」

腰を落として手を伸ばし、シャッターに触れる。

私を中心に半円形に覆うシールドから外向きの斥力と主砲のプラスト圧による爆風が発生し、建物の壁や天井を吹き飛ばす。

金属製のシャッターは紙吹雪のように舞い、海面に落ちる。

突然の炸裂音と聞きなれない声で観客スタンドが静寂に包まれてこちらの動きを注目しているであろう。

「…甲板員は外に出る時、出てる時は落ちてくる破片に注意してね？ 軸ブレーキ脱！ 微速前進！」

ゆつくりと扉をと屋根を吹き飛ばし、基礎部分とわずかな壁だけが残った特設ドックから進み出る。

まさか私が直々に出て戦うとは思ってなかったけどこれはこれでかなり新鮮かも。

「空砲斉射。てえー！」

水面を凹ませ、髪の毛をやスカート等を吹き乱す。

「主砲、もどーせー。一応砲身を冷却して待機。前進10 knot！」

剛と水面を切り裂き波が爆ぜる。

『皆さん、あの艦娘が見えますか？ あの人が我々の期待の星、春雨型防空戦艦 二番艦

夜雨 です』

観客席に向かって敬礼。それからヘッドフォンを首に下げ、手を振る。

ざわめきと歓声。

わざわざ、防空用、の戦艦を用意するなら、普通の防空駆逐艦でも良くないかなにこの娘かわいい！という声も聞こえる。前二つは置いといて最後のはちよつと恥ずかしいかな…。

『夜雨、いきなりだけど対空攻撃演習よ。目標、上空機！』

「了解、右舷対空戦闘用意！取り舵20！」

ゆっくりと左旋回を行うが、身体は正面を向けたまま標的敵機を捉え高角速射砲とCIWSの砲身を向ける。

編隊は回避機動を取りつつ私に攻撃を仕掛けてくるであろう。

「距離370！ちよつと近過ぎるけど一齐砲火するからね。右舷上空3機を α とする。撃ち方よーい！」

電探連動射撃装置により常に矛先……高角速射砲とCIWSの砲口は α 編隊を追い続ける。

『演習はじめ！』

「攻撃開始！」

「タイミングはほぼ同時。CIWSと連装高角速射砲が空薬莖を排出し、演習弾を打ち上げる。」

先の6隻の対空攻撃を合わせて同時に放つよりも多い弾幕が空で青黒い花弁を開く。見た目重視で無作為にばらまいてるわけではなく、その殆どが正確に直撃弾、もしくは至近弾である。

あつという間に4機が^{撃墜判定}白煙を出す。

的確に攻撃する目標選択、追尾能力。そして1発目から至近弾、命中弾を出す照準能力。

高レベル艦娘が熟練砲や高性能電探、高射装置を用いてもほぼ不可能な高速&正確な射撃能力。秋月型や海外艦娘《主にアイオワ》も裸足で逃げ出したくなるような対空火力

「全機撃墜判定を確認。対空戦闘用具収め！」

「……このように我々が誇る最新鋭の超音速機も易々と撃墜出来ます。この娘は艦娘なので深海棲艦にも有効打を勿論与えられます。……みなさんは夜雨がどれぐらい強い

か気になりますよね?』

《え、プログラムそんな流れありましたっけ……?》

「絶対ないですね。誰かがアドリブで入れたのでしよう」

あたりめーだろー!!

早く魅せろ〜!

《やっぱりそうなりますよね……》

「デスヨネー……あ、これ戦艦4隻と戦う流れですね……読めましたよ……」

《いや、それは流石にベタ過ぎじゃ……》

《どうしてこうなった……》

熟練見張り員妖精も頭を抱えている。

演習に関しては全く問題無い。演習弾を利用するとかそのへんのルールにも問題は無い。

問題が有るのは編成のほうだ。

イタリヤ代表 Italia

アメリカ代表 Iowa

ドイツ代表ビスマルク

そして伊、米、独、日の混載、最後の砦。戦艦武蔵。

《…表現的にこれが一番しつくりきますね…しかも予想通り…》

全員が全員ゴツイ艦装を担ぎ、いかつい砲身を水平に掲げている。

「全員倒せばいい事だけですし、なんとかなりますよ」

《理屈はそうですけど…いくら何でも…》

「…超兵器アイツらが居ないだけまだマシです」

《アイツらとは??》

「あー…えっと。戦況をそれ一つでひっくり返せるほど強い艦船等です」

《成程。また後でコソツと教えてくださいかね??》

「はいはい。そのうち、ね」

『それでは演習を始めます。全艦前進15 knot。READY?』

煙突から濃いめの煙を吐き出し、各艦がゆつくりと加速し始める。

「……んじや、やりますか。前進15knot」

煙突からはユラユラと陽炎の揺らめきが空に吸い込まれるが黒くなることは無い。

『Fight!!』

「一番、二番主砲狙え…今よ、撃て！」

姉提督からの開始の合図と同時に砲をこちらに向けたItaliaが砲撃する。

大和型戦艦よりも長射程なのはItalia砲—改のおかげか。

4発の砲弾がこちらに向かって飛翔する。

「戦艦Italiaの砲撃を確認。命中コース。両舷増速40knot。面舵10。艦の被弾面積を減らします。2・3番主砲、AGSは砲撃用意！熟練見張り妖精さん何かに掴まって！」

私をゆつくりと前進させていたスクリュー軸を引き込み、電磁水流推進システムによる急加速を行う。艦首が海水をかき分けて大きく揺れる。

同時に三角錐のてっぺんをそぎ落としたような物体から起き上がった三つの砲身が目標からはるか上の青い空を睨む。

《っ……な……なんだこの加速は……！》

「まだまだ序の口ですけどね。増速55knot」

《(じゆう……)……?》

多段階で加速する私に砲身の旋回が追いつかず、水柱がはるかうしろに上がる。

「主砲交互射撃、AGS、攻撃開始！」

お返しと言わんばかりに砲口から走る稲妻。大気をかき分ける砲弾。それに続いて三角錐から超高弾道で飛び出す砲弾。

私が積んでる主砲はほかの主砲と違いライフリングの刻まれていない滑腔砲に近い。厳密に言えば超電磁砲機構レールガンシステムの電流用ガイドレールの出っ張りはあるが、そのせいでライフリングが刻めない。

その代わりライフル砲とは違い砲弾の初速が桁違いに速い。

海面すれすれを飛翔しイタリア周辺に水柱を、遙か上空からほぼ垂直に降ってきたAGS砲弾が直撃し、模擬砲弾ペイント弾が模擬爆炎を発生させる。

「武蔵の射程までにItaliaを倒せれば……」

《熟練さん、マイクを失礼。戦艦武蔵の連装砲からの発砲を確認！》

「……え？連装砲？」

大和型戦艦の主砲は三連装のはず……。

簡単に積み替えられるシステムをこちらでも……。

「つ！減速取り舵！回避後増速！後部主砲も撃ち方始め！」

このまま直進していたら確実に直撃するであろう位置に水柱が上がる。

「危なかった……」

武蔵とアイオワからの砲撃を回避するために急加速、急減速を連発する。

その間にも倍に増えた主砲と上空へ砲弾を打ち上げ続けるAGS砲が回避行動を続けるItaliaを的確狙い、直上から降り注ぎ続ける。

「いやああ?!……くう……かなりのダメージが……でもこのくらいでは、沈みは……しません！」

『戦艦イタリア、命中弾多数により轟沈判定!』

「そんな……皆さん、あとはお願いします」

イタリアが敵の戦列から離れる。

「撃沈判定を確認。次目標、ビスマルク。砲撃！」

金剛砲よりも少し大きい砲塔が素早く旋回し、狙いをつけて砲弾を放つ。4発と上空からの6発の砲弾がビスマルクに突き刺さる。

「初弾命中。諸元そのまま！」

《なっ…初弾から?!》

さすがに数発は耐えたがビスマルクにも轟沈判定が出た。

「……残るは武蔵とアイオワ……っ！超重力電磁防壁展開！」

私と砲弾の間に虹色の六角形の障壁が浮かび輝き、そこに着弾する。

金属同士が擦れ合う鈍い音。

”4発”の内の2発の砲弾が第1の硬い壁で粉碎され爆発し、残りの2発は重力領域により急減速、第二の壁により弾かれる。

《あれ、砲弾が空中で爆散…?どういう事…?》

「二種のバリアですよ。取り舵増速65！」

《つまりダメージは受けないと》

ふと艦装を見ると今まで大量の砲弾を休みなく撃ち続けていたAGSの砲身が、モニターでオレンジ色に表示されている。

「そゆことです。面舵減速25！そろそろAGSの砲身冷却を！」

AGSが正面を向き、その砲身の先から冷却水と湯気を出す。

《……話が変わりますが武蔵の砲弾の種類が多いですね》

「多分……重いのは46く51cm連装砲。早いのはイタリア連装砲、命中精度が良いのはビス子連装砲。…残りの三連装砲は誰のでしょうか……増速85knot面舵反転！後部砲で砲撃継続！」

＊夜雨脳内＊

アイオワ ビス子 Italia 46or51

三連装砲 連装砲 武蔵 連装砲 連装砲

← 正面 ←

《成程……主砲論者の混載タイプって事ですね》

「多分そうだと思います。っ！全速前進！」

脚部のアーマーの一部が変形し、スラストスターが露出。

慣性の法則により妖精さんが振り落とされかけたが、ほかの妖精さんが引っ張ってい

るので何とかかなりそうだ。

《…物凄い…加速…》

「…成程…レーダー射撃装置はやはり無いようですね。超重力電磁防壁のジャミングの意味が無いみたいです。なら、よっ」

更に激しく右に左に前に後ろにチヨコマカとフェイントを入れつつ回避行動をとる。

バレリーナのように美しくは無いし、タップダンスのように激しくもない。

髪の毛を振り乱しながら海面を疾走する。

《よくもまあ…こんな動き回れること…オエツプ…》

私も負けじと主砲弾を五月雨式に撃ち込むが、アイオワの上部構造物の損傷判定しかない。

ヴァイタルパートに当たった砲弾はあらぬ方向に弾き飛ばされている。

「流石にIowaと武蔵は硬い…ならば。多目的ミサイル²発射！全速前進！」

艦装のVLS部位から白煙を纏う白い矢がIowaめがけて殺到する。

砲弾より貫通力に劣る多目的ミサイル²が装甲を貫通するわけもなく、艦装の表面を焦がしたり凹ませたりする程度だが、回避行動をとらざるおえないため確実に2隻の行足が遅くなっている。

「全速前進！回して！！」

最大速度の120knot以上で海面をすつ飛び、Iowaの背面滑り込もうと突っ込む。

「AGS、高角速射砲、CIWS、直射モード！撃てるだけ撃ちまくれ！弾幕展開！」

無限装填装置から繰り出される無尽蔵の砲弾を竜の咆哮の如くアイオワにたたきつける。

文字通り弾幕のミシン縫いをかけられながらも防御姿勢で突っ込むが、。

「oh shit！ うう：」

何かを察してか急速後退を始める。しかし、所詮その速度は私にとってほぼ止まっているのも同然の速度。

背面にスライディングしながら回り込み、艀装にそつと手を伸ばす。

それと同時にシールドフレアを放つ。障壁に蓄積されたエネルギーが一方方向に開放され吹き飛ばす。

「?!? やってくれたわね…必ずお返ししてやるんだから！必ずよ！」

艀装込みの戦艦娘アイオワが文字通り空中を舞う。

『戦艦アイオワ大破判定!』

(これって一応大破判定なんですね…明記されてなかったの…。)

《これは…一応こちらは無傷なのですが…Iowaさん大丈夫ですかね…?》

「多分大丈夫だとは思いますが。殴る所は一応選んだから…」

海面にうつぶせで突っ込んだアイオワ。ごめんよ…。

重量物を吹っ飛ばした為か超重力電磁防壁の状態が不安定になり、警告メッセージが出る。

「…超重力電磁防壁解除。面舵ー!次目標武蔵」

《超重力電磁防壁再展開まで後30秒!》

「前進70 knot。主砲!V^{ヴァイタルバート} P外に交互射撃!高速徹甲榴弾!」

8つの砲弾が武蔵の艦首と思われる所に当たるがあらぬ方向に弾き返される。
「くっ、硬い…VP外もこんなに硬いなんて…弾種榴弾!」

武蔵の上部構造物に数発着弾し、機銃座や高角砲を薙ぎ払う。そして、右に左に回避するが…。

「この主砲の本当の力、味わうが良い！」

私に向かって吸い込まれるように直進する各国の合計9発の砲弾。

ラッキーパンチ……よければ！

「……………！」

小型の4発の砲弾が至近に着水し、水柱を上げる。

海水が顔にかからないように両手を目の前でとつさにクロスにする。

残りの5発が私の艦装に突き刺さり、私は煙と炎に包まれた。

0-9-C 〈決着〉

弟Tside

司会席の左右にある屋根付き来賓席に鎮座する天然スキンヘッドのおっさんの隣に俺は座っている。

このおっさんは本州最南端の鹿児島／種子島臨時鎮守府に所属していた元提督だ。元、元、ただけあって今は引退しているが、深海棲艦の出現直後から自衛隊を指揮して応戦し、艦娘と深海棲艦についての数多くのデータを残した偉人でもある。

「おっさん。コイツをどう思う？」

「うーむ。まずは装備の割に主砲が弱すぎですな。せめて主砲41cm以上で同じ型のを作らないと話になりませんわ。」

後は対物障壁装置の強化及び装甲の電化or手持ち式のを追加、三角形の砲の換装ぐらいはしてあげるとダメですね。アレは重過ぎですわ」

「やっぱりおっさんもそう思うか。……データ上では改大和型の装甲を持つのに主砲は金剛砲に毛が生えた程度だからな。対物障壁は超重力なら防壁とかいうらし

い。あの珍三角砲はエージーエスっていう長距離砲戦用の半垂直打ち上げ型のロケット誘導砲で、本来は対艦／対地用らしい。適正距離よりも遙か手前で撃つてる状況だから振り回しにくいんだろ」

「なるほど。それは撃ち辛いでしようね。後は……うーん、そうですね。排煙の出ない主機エンジンという事はへんちくりんなもんを積んでるんとちやいますか？」

「ご名答。それもとびきりへんちくりんな奴、核融合炉だ。水素と重水素と三重水素を合体させてるとかなんとか。詳しくは俺もわからん」

「核動力…ねえ…。ちなみに、本来の数よりも積んでませんよね。違和感しか無いですよ」

「やはりおっさんの目は誤魔化せんか。スペースの関係上本来の半分しか積めてない」

「やはり。51cm砲が弾ききれてないですし。試合として成立させて大丈夫なんですかねこれ……」

「俺にもわからん。上がそうしろと言ってきたからな。俺ら（と言っても厳密にはランカー提督s+a）で猛抗議入れたけどダメだったわ」

走行してる間に試合が進みアイオワの後ろに夜雨が素早く周りこんで腰を落とし、シールドフレアでアイオワが吹き飛ばされる。

「おお、これまた豪快な体当たりですね。しかし、自分にもダメージが入るから控えたほ

うがよさそうだな」

「いや、タツクルというよりも吹き飛ばしたのほうが近いと思う」

「…防壁がなくなりましたねえ。これの原因も多分出力不足でしょうね」

「……すまん」

「遠慮はしない、撃てえ！」

武蔵からの砲撃で黒煙に包まれる。

「……煙幕弾？流石にダメージ入らないですね。目くらましかな？」

武蔵が夜雨の周りを移動しながら高角砲や副砲弾と煙幕弾を叩き込む。

「一応正規の演習用砲弾だから規約には違反せんがあまり関心はせん。徹甲弾なら確実にダメージ判定が入ってるものを…」

「……いや、違う。武蔵が撃ってるのはレーダージャミング用の煙幕弾だ。アルミ粉末か何かが入ってるのだろう。」

レーダー射撃と目視射撃を妨害して46cm砲のプラスト圧で損傷を与える作戦か？俺には意図が読めん」

その声と同時に夜雨にまわりついてきた黒煙が吹き飛んだ。

「……ほう」

「……不味いな。手間が増えそうだぞおっさん」

夜雨 side

夜雨「……あれ？」

艦装を見下ろすが、砲弾が当たったところがわずかに焦げただけで特にこれといったダメージは受けていない。

「……っ！対ジャム行動！総員煙を吸い込まないように！金属粉末が含まれてるかも！」

右手の服の袖で口元を抑え片目を閉じ、半開きの片目装備格納用スロットのパネルを左手で叩く。

(……粉末の成分はアルミニウム、か。判断が遅れていたら確実に吸い込んでた。あと砲撃をガードできそうか盾のようなものとか積まれて……る！展開式の障壁ね……これはラッキーかも)

《防壁再展開可能です！》

「了解。超重力電磁防壁、再展開！」

青紫色の重力場が私を包み込みアルミニウム粉末と煙を私の周りから吹き飛ばす。

それに合わせて左手にエネルギーが集まりほぼ全身を覆うほど大きな板状の盾のようなものが展開される。

「……なるほど。これはガモン○ス・ラン○スの盾みたいに使う感じですか……」

「ほう。そんなものを持っていたとはな。だが、この武蔵の主砲は伊達ではないぜ」

左手を伸ばしエネルギーシールドを私の目の前に掲げる。

46cm、51cmの砲弾が受け止められ爆散するがエネルギーシールドは貫かれな
い。

少し斜めに構えて別の方向に弾き飛ばすこともできるようだ。

「この主砲の本当の力、味わうが良い!」

防壁が虹色に輝き三式弾の小弾を弾く。

『展開式防壁稼働率85% これ以上はまずいです!』

「…くっ。2345番主砲高速徹甲榴弾斉射！次発^H曳光^E成形炸薬榴弾^T！てえー！」
 「ふんっ！」

気合一喝。八発の砲弾を明後日の方向に殴り飛ばす。

「…流石ですね。なら、これならどうですか！」

「何度やっても同じだ…っ?!」

8発の曳光成形炸薬榴弾が武蔵の艦装に張り付き爆ぜる。

「くっ…そんな攻撃、蚊に刺されたような物だ！」

「第二射！」

更に武蔵の艦装に張り付き爆ぜる。

「その程度か！この武蔵は負けんぞ！全速前進！」

「…全速後進、取り舵35！主砲1番6番、攻撃、用意」

艦装の左右最前列の砲が武蔵を追従する。

【 α 】レーザーという α 線…ヘリウム原子核による粒子攻撃と思われがちだが、分厚い装甲板だろうが焼き切ることができ程度の強力な指向性を持ったエネルギー波とレーザーによる攻撃である。

強力な指向性のおかげで比較的長距離を進むことができ、水中も200m程度なら水による減衰はあるものの「ある程度の威力」を維持したまま目標に攻撃することができる。

「演習用出力で、短時間連続照射、始めっ！」

ストロボフラッシュのように数回ほど赤い線が砲口と武蔵の主砲塔をほんの一瞬だけ結び、上部構造物を根こそぎ薙ぎ払う。

《戦艦武蔵、1番主砲全損！2番主砲火災判定！3番主砲砲身損傷！4番主砲旋回不能！中破！艦橋損傷！副砲爆散判定！高角砲沈黙！機銃蒸発判定！ええい、読み上げるのがめんどくさい！！中破判定！！》

「なっ……！」

流石戦艦といったところか。短時間なら数発程度の照射は耐える。だが、これで厄介な主砲をすべて無力化できた。

「第三射！！てえー！」

曳光成形炸薬弾が武蔵の艦装に張り付き艦装の半分が吹き飛ぶ。

「まだだ…まだこの程度で、この武蔵は…沈まんど！」

《上部構造物大破！》

「全速前進！」

背面艤装から金属物か何かがこすれるような音がしてガクンと加速力が落ちる。

「ぶっ壊してもいいから回して!!展開防壁解除！」

再び擦れるような音が発生するが無視。

武蔵が拳で殴って攻撃してくるがさばき、かわし、懐に潜り込む。

「…?!」

海と空が反転。重力が頭の方にかかる。あ、投げられたのか。

《武蔵ショールアメイジングダースグ!!》

司会さん何実況してるんですか。あ、受け身…間に合うかな…。

そのまま半回転して着水。そのまま反転して突っ込む。

「ふんっ！」

武蔵が両手を広げそのまま突っ込みながら回転する。

「っ！」

無理矢理武蔵の姿勢を浮かして崩し、懐に無理やり飛び込む。

「ふつつ飛べ!!!」

武蔵の腹に拳をたたきこみシールドフレアを放つ。

(…手ごたえあり!!)

「もら…っあ?!」

後ろから強烈な衝撃を受けて私も吹き飛ばされる。

(な、何が…)

もつれるように、二人とも、海水中に落ちる。

(………あ……海水…?私…沈む……の……?)

上に行こうともがくが重い艀装に引っ張られ浮かぶことが出来ない。

重力に従ってふらふらと沈んでいく。

(酸素……さんそ……げぶつ……)

突然武蔵に手を引っ張り挙げられ空気中に顔を引き上げられる。

「ゲホッ……ゲホッ……はあ……はあ……」

空気ってこんなに美味しかったっけ。口の中がやたらと塩っぱい。

「夜雨……はあ……はあ……艦装を外せ……はあ……ゲホツ……沈むぞ……ハア……はあ……」

「はあ……はあ……了……解……ゲホツ……」

私の背中から艦装と妖精の乗ったカッター艇数十艇が滑り落ち、私の体が極端に軽くなる。

《おつとおおおおお?!?!二人の艦装がパワーに耐えかねて吹き飛んだ!!両者戦闘不能によりここで試合終了おおお!!引き分けだああああ!!》

「……流石大和型ね。……はあ……はあ……最後助けてくれてありがとう。多分そのままだつたら溺れてた……はあ……はあ……」

「いや、一人の日本人としての精神だ……ゲホツ……。演習中は敵でも終わった今は仲間だからな。演習ありがとう。いつかは決着つけるぞ」

「はい。またよろしくお願いします」

なんとか妖精さんも全員無事。よかった……。

「あ、艦装……」

猫耳ヘッドフォンとメガネ以外はすべて海の底に転がっている。

「心配すんな。後で造改良新調つてくれるさ。海の中のヤツは潜水艦が拾ってきてくれると思う

ぞ

「は、はあ……」

結構愛着あつたので結構淋しい。

それよりもエンジンブローが何故起こつたのが気になるところです。

はあ……とりあえず岸まで泳ぎますか。

うええ。濡れた服って泳ぎづらい……。

—————

「いゝきゝかゝえゝるうゝ」

はあ。幸せ。

お風呂つていいよね。お風呂つて。

全身ずぶ濡れの私は即時鎮守府のお風呂に直行、艀装をつけたアイオワ以下4名は艀装着脱所を経由してお風呂に入ることになった。

ビスマルクさんとイタリアさんは2人ならんで肩までお湯につかっいて、武蔵さんとアイオワさんはシャワーをその辺にぶちm…違つた。体を流している。

皆が皆二つの豊かな丘を揺さぶりながら。

(なんで私だけちっちゃいんでしょか……物凄く場違い感が……)

微や貧がふさわしいぐらいしか膨らんでいない自分の丘を見下ろす。つま先まできつちりと見えてしまうのがなんか悔しい。

同期とも訓練生時代には皆同じぐらいのサイズだったはずなんですけどね……なんで皆おつきくなつちやったんでしょうか……むしろ私が小さいだけ……?

犬が水を落とすように首を降るが、シャワーで長い髪の毛から塩分を抜きながらそんなことをつい考えてしまう。

(はあ……気が滅入っているのかな……さつさと風呂上がって寝よう。うん。そうしよう。)

左手で髪の毛をまとめながら右手をシャンプーなどが置かれているところに伸ばす。

(あれ、シャンプーどこだろう……。これはボディソープでこれはリンス……)

「ああ、ちゃんと塩分を抜いておかないと髪の毛がすぐに痛むぞ。こちらの言葉を借りるなら髪は少女の命だからな。後これ私のやつだけど。受け取とれ」

びす子そおい ノシ 三 シャンプー

??????
—

「?????湯船
どうもありがとうございます」

…それよりもビスマルクさんが日本式の檜風呂でも違和感が無いことに驚きなんです。すが。

「…日本と同じく温泉大国だからな。欲を言えばサウナも欲しいところだ。……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～ええば申請とかあったな…」

私ってそんなに顔に出るほうなんですかね。

武蔵とアイオワがやつと洗い終わり湯船につかる。洗い場まで水が数センチ溜まるほどに大量の湯が流れ出る。

……私の方が多かったのは内緒だが。

「そういえば。夜雨サンは本来のパワーを出せなかったって本当？」

「……ふえ？」

唐突に私の知らないところで変な話が出ていることに相当な疑問が浮かぶ。

「私も聞いた話ですけど、本来の搭載エンジン数の半分しか積まれてない状態だったらしいですし、その出力自体も過負荷運転で3/4ぐらいまでしか出ないとか。提督さん

が言っていましたよ?」

「……………それマジですか? 私は一切そんな話を聞いてないのですが……………まさか、私の臆装は不良品……………」

「少なくともこの4人はそう聞いている。」

うそでしょ…。

「まあ、その気を落とすな。そうなってしまうっ…」

《舞鶴鎮守府所属、戦艦武蔵。鎮守府所属戦艦ビスマルク、同じく戦艦イタリア。琴音提督と姉提督がお呼びだ。なるべく早く早く執務室に来るように。以上だ。》

……………おっと、書類かなんかかかされるのかな。ちよつと行つてくるわ」

「なんでワタシまで…」

「とりあえず書類は私たちで殴り倒してくるわ。腕が鳴るわね」

入った時と同じぐらい大量の湯が流れ出して3人が脱衣場に消える。

やつと足が伸ばせるほど広くなった湯船でめいっばい伸びをする。

(……………はあ……………いいお湯……………)

そういえば海が見える露天風呂があつたんだっけ。

そつちに行つてみようかな。

—————

?????

side

照明の落とされた機械音と合成音声がこだまする部屋。そこに椅子と一体になつて
いる男がいた。

二つの空中投影型ディスプレイに浮かぶ戦闘のリプレイ。先の夜雨と武蔵の戦闘だ。
ただ、その画面には力学矢印、慣性、重量などの数値が並んでいたり、数式、力学的
エネルギーやシステムプログラムが並んでいたりとかなり異なつたものになっている。

「……成程。これは面白そうだ」

「…私の声は相変わらず筒抜けのようね。ならば逆に問うわ。できるかしら」
ディスプレイの端に移る女が問う。

「ぶつちやけ余裕なんだよなあ…」

向こうには聞こえてないのに答える。いや、聞こえてなくても伝わるものがあるの

か。

「……いや、愚問ね。機心一体の君にできないわけがないし」

心の読み合いというよりも阿吽の呼吸と呼ぶ方が近いやりとり。

「…盗聴対決はまた今度やりましょうか。それよりも今は目の前の課題をだな」

核融合炉の大電力を生かした超電磁砲機構とフレミングランチャー機構とサマールカノン機構を備えた発展型電探連動高射装置。

砲弾をほぼ無尽蔵に出せる無限装填機構とそれを素早く放つための超高速装填装置。

重い凶体を振り回すための特殊電磁水流推進機に現代レベルの電探。どれも未知の装置だが科学者や技術者はそういう未知の部分に惹かれるものがあるのか。

「……さて、始めますか」

ディスプレイを操作すると部屋の奥の方の作業台と思われる部分から溶接の火花が飛び散り、化学式推進スラスタとプロペラを組み合わせたような板が出来上がった。

「ランカー提督同士だしちよつと本気出すかあ…。資材的にこつちに押し付けられるのは勘弁じゃけん、サポート枠に回つちやおうね」

死ぬほど情けないコンプレックス音とともに溶接機から火花が飛ぶ。

「どうせこつち来ると思うからそれまでにナイトレーゲンを改装できるレベルまでうPつといてくれたら嬉しいんだけどな」

作業台付近の無造作に積み上げられた大口徑砲タワーから怪力マジックハンドで砲をつまみ上げる。

「……真☆ながもん砲・改【☆+10】……じゃなかった」

それを元の場所に置きその隣に置いてある砲と砲塔にしてはやたらと縦に長い円柱物体をつかんで溶接作業台に載せる。

「……前に送られてきたデータからガワだけ作っておいだ私製432連を【なにこれぜかましいいするための奴】。これを転用するに限るね」

その物体はどこか島風の連装砲ちゃんや秋月型の長10cm砲ちゃんの頭の部分と胴体の部分によく似ていた。

ただ、砲身をセットする台と砲塔旋回装置等が長門型……いや、大和型クラスにでかい。

「私は、後始末、をしてくるわ。聞こえてるでしょうね。頼むわよ」

円柱型の物体をひっくり返し連装砲ちゃんという腰の部分に先程作ったプロペラスラスタを取り付ける。

「……パツチリ聞こえてるっつーの。じゃあの一」ノシ

空中投影型ディスプレイが一つ消えて四つほど増える。

「さーて。やりますかあ……ランカー提督としてではなく1人の技術者の端くれとして」

—————

夜雨 side

夕焼けを見つつお風呂に入れるとは思ってなかった。真面目に。

「……夜雨サン。隣失礼するワヨ」

「どうぞぞ〜」

アイオワ級ネーム¹ムシッ^{番艦}アイオワ。……そういえば個人的にいつも殴りあってたモンタナ級イージス戦艦の準同型艦で快速な足と試作品の光学装置を積んでいたっけ。

……そういえば皆はどうしてるんでしょうか。先輩や航空技研の皆さんも私のことを心配してますよ、ね……。

訓練生世代の同期がいろんな船に乗ってたな…。

皆元気で生活してるのかな……。

帰りたいな……。

「……Hey 夜雨。why are you 泣いてweep？」

「……へ？」

慌てて目の下を擦っても擦っても汗のように湧き出てくるお湯とは別のものが確かにそこにあつた。

「……昔を、そちらのworld^{世界}の仲間を思い出しましたか？」

「ち、ちがっ……」

必死で目の下を擦るが消えない塩辛い水。

……みんなの所に……帰りたい……けど……。

——こちらの世界にも居たい……

不意に優しく抱きしめられる。豊満な二つの丘に包まれて動けない。ちよつと、なに……。

……ああ、こつちに来る前に優しく抱きしめられたあの人の匂い……。

「……………思い出したデシヨ？」

戦で勝っても人間としてはぼろ負けの私は黙って頷くしかできなかった。

その後、1時間ぐらい泣いてのぼせてしまい、しばらくアイオワの膝の上を借りた。その時に豊かな丘で窒息しかけたのは言うまでもない。

1—1—A 夏イベE—〇の静けさ

1—1—1—本編—1—1—

夜雨side

「イベント、ですか?」

公開演習から約1ヶ月。私は艦隊行動演習や防空射撃演習、出撃等を数多くこなし、非常に上がりにくかったレベルもやっと2桁に乗ったらしい。

そして唐突に告げられたイベントの存在。

不特定時期に行われる特別な名前を持つ強力な深海棲艦を皆でタコ殴りにする作戦の事で、普段見ないような外見、能力を持つ個体が多数出現する高難易度の代わりに【報酬艦】と呼ばれる非常に珍しい艦娘や艦装がドロップする可能性があるらしい。

そしてその件で提督室に呼び出された私。なにかの仕事が与えられるかと思ったら艦装のCIWSと超長砲身連装高角砲やらを借せとの事。

「あー……それらはコンピュータやセンサーや処理装置等やSPYレーダーやフェーズドアレイレーダー、そしてそれらを安定的に動かすための電源と装填装置が必要なの

で非常に重くシステムが複雑で仮に艦には載せられたとしても艦娘に持たせるにはちよつと厳しいかと……」

仮に持たせられたとしても筋肉痛や極度の疲労感、重心バランスの悪さで転倒、損傷する未来しか見えない。

戦艦クラスならまだ大丈夫かも知れないが……。

「電気関連ははずみ車なり何なりで回転運動から発電機噛ませば何とかなるとして既存の艦娘に載せられる電探とかそのへんじゃ性能足りない感じ？そしてそんなに重たいの？」

「提督さん、フライホイールはずみ車はそう使うものじゃないですよ。そしてレーダーに関して は全然性能が足りません。ちなみに12.7cm75口径連装高角速射砲は1基あたり約22t程度です」

「おうふ……。つまりイージス艦クラスの性能を持った戦艦なり巡洋艦なりを持ってこいと」

「まあ、そのレベルなら何とかなるんじゃないですかね。やったことないので一切わからないですけどw」

「まあ、一応確認して正解だったわ。なら、長10cm高射装置を持たせておくわ」「その高射装置ってなんですか？前々から気になってたんですけど……」

「へ？高射装置は高射装置よ。射撃管制装置の一種。標的の【位置】【高度】【測度】から未来位置を計算して狙いをつて、時限信管をドンピシャの所で発動させるように調定する機械の総称」

なるほど、対空用の切り札という物か。

つまり、これが付いていないモノは全部手動なりなんんりの人力でしているという事になる。……いや、妖精力か？

そして対空砲弾もVT信管などの近接作動信管ではなく完全にタイマーによる起爆。命中精度が悪過ぎるなと思うていた原因がそこにあつたとは……。

「なんとというアナログチックなモノを……いや、それしかないんですか？電探連動射撃装置とかは……」

「あつたら今まで一切苦労しないわよ」

「デスヨネー」

多分そのようなものを実装できそうな技術力を持つのはドイツ、アメリカぐらいだろう。

「で、私を呼んだ理由つて、それだけですか？」

「いや、それだけでは無いのよ。今回のイベントは出張して鎮守府と前線基地を作り、そこから敵補給、航空基地をぶつ壊すのとインド側への航路の安全を取り返すつて言う

のが概要なんだけど、今の段階で前線基地の資材の揚陸が終わって仮説航空基地と鎮守府を作ってる所かしら」

「結構大掛かりな作戦なんですね」

「いや？今回はそこまでかな。深海棲艦も頻繁に空襲なり砲撃なりをしようとしてるから今後はそれを抑えつつ敵の拠点を殴る感じになるけど……はつきり言つて夜雨ちゃんの出番は多分無いよ。あ、役立たずとかそんなんじゃないやなくて、「わざわざ出る必要が無い」って事ね。むしろ、鎮守府の……いや、人類の最後の切り札状態だからまだ出て欲しくないって言うのもある」

「そんな、大袈裟に言わないでください。私の性能を買い被りすぎですよ……」

「大袈裟な事はないわ……提督さん、電話がなっているのです……失礼。電話よ」
タイムリングがいいのか悪いのか、部屋に備え付けられていた黒電話機が鳴る。

「はい。パラオだい……え？」

姉提督の顔が電話の内容を予想できるかのようにみるみる変わっていく。

青ペンキ缶に顔面を突っ込んだレベルまで青ざめた提督は古参組で今日の秘書官である電ですら見たことがないらしい。

受話器を投げ捨てて提督用の机の上にある館内マイクをひったくる。

「……前言撤回。夜雨、出撃準備をして」

「へ？」

「えーつと館内放送館内放送……《提督です。総員、手を止めずに聞いてほしいの。そして忙しい時にごめんなさいね。イベントで想定外の自体が発生しました。詳細は夕飯後に資料を取りに来てほしい。緊急時出撃時間は明日朝8：30。台湾で武蔵の連合艦隊他三艦隊と合流し仮設鎮守府を目指して航行、そこからは現地の提督の指示に任せます。旗艦は夜雨。僚艦は霞、春雨、秋月、照月、初月、阿武隈、摩耶、瑞鳳、蒼龍、飛龍、榛名。以上。》：電ちゃんごめんね。書類の手を止めて大淀を呼んできてくれる？」

「はいなのです！すぐに行つてくるのです！」

「……さて夜雨ちゃん。ちよつと付いてきてくれるかしら」

「……あ、はい」

—————

妖鷲夜雨 side in 通信室の控え室

その部屋に機械が大量に捨てられている、と言つても過言ではないほど大量のホコリをかぶつた機械が無造作に置いてあつた。

ガラス越しの隣の通信室に大淀と電、姉提督さんがいて、それを私が監視するかの様

な構図。いや、厳密には私が本来居たら不味い話を聞かせようというのか。

話声は一切聞こえないので詳細は掴めない。

「……アレと同じ原理で聴けるらしいのですが……ものは試しですよね」

扉の薄そうなところに耳を当てて。

「……です。至急援軍を……！」

悲鳴のような泣きそうな声が聞こえる。

『巫山戯るのも大概にしろ。そのような意味がわからない艦など居るか。貴様、まさかと思うが寝ぼけてるのか？』

『寝ぼけて等いませぬ！ですが、我々の艦隊の主力がこぞって大破や艦喪失大破などの甚大な被害を……』

『だから、それを巫山戯ていと言うのだ。もつと気を引き締めてキラキラ状態で行けと言っているのだ。戯けが』

『全艦Lv. 99キラキラでこれですよ……そして事前情報にも一切該当が無い船です！』

『何寝ぼけたことを言っているのだ。それで勝てないはずがない。貴様が無能なだけか』

？二回も言うがそのような巫山戯た艦は存在し無い。1隻で連合艦隊の機能を持つレベルは居ても80knot近くで暴れ回る艦だと。笑わせてくれるわ。勿論全員無事なんだろうな？」

『大艇で撤収済みです……！』

……私のことを言ってるのでしょうか？

でも、前に対戦した琴音提督と声が違う……そして2人……？

なんとなくの予想ですが大本営さんと通信してみたい……？

「……お言葉ですが。少し話に入ってよろしいでしょうか。」

『……何？ああ、パラオ第一鎮守府の提督か。構わんぞ』

「そのような【意味のわからない艦】ですが、私の所に1隻90knotで走り回るといふその条件に該当しそうな艦が居ます。あながち間違いではないのでしょうか」

……え、私の話じゃない……？

となると、該当する他の艦……数が多すぎて絞り込めない。

最悪の話、私の姉の可能性もある。

『……貴様も重務の連続で遂に頭が逝ったか？そのような船などいるはずがない。少なくとも60knot以上で走り回るなど有り得ないのだよ。深海棲艦と言えどいくら

その性能は物理法則からしておかしい』

「ならその物理法則を完全にぶっ壊した【艦娘】を呼びましょうか。……夜雨。聞いているわよね。出てきていいわよ」

……ギクツ。何故バレたし。

ため息を吐き捨てて扉を開ける。

「……お呼びでしょうか提督さん」

中はプラネタリウムのようなドーム状になっていて中央のプロジェクタで映し出しているようだ。

……そういえば、小惑星に行つて奇跡的に帰る奴見たかった全天候CGまだ見れてなかったつけ……。

「はい、ここにきてあそこのモニターを見て挨拶して頂戴。」

ドームに映しだされている二人の男の大人……

パツと見、1人は非常に位が高い。肩が見切れて階位は分からないが軍服と刀らしき物を所持しているということから推測して相当高位なのだろう。元帥までは行かないと思うが……。

もう1人は健康的に日に焼けた黒い肌を持ちイケイケ系のオーラを放っているが、ヤンキーや不良・うえいW系の人ではなくスポーツマンの方が近い。

「…春雨型防空戦艦、二番艦の夜雨です」

『…なっ?! 貴様が、か…下の者の噂は本当だったんだな…おいロリコン。無礼なことを言つてしまった。申し訳ない』

「……彼女の事は軍秘なので他言はしないで、と言つても伝わつてるのであまり気にならないでください。援軍ですが明朝に我々の艦隊を出します。台湾でほかのランカー3名の艦隊と合流する、で宜しいでしょうか。私からは旗艦夜雨他11名の連合艦隊です」

『……構わん。好きにしろ。……それと。今回の作戦に関しては資材面は気にするな。こちらから大量に送る。……これは俺からの無礼の詫びだ。後で書類に判をつけて送る』

「ありがとうございます!!」

「…貴方もランカー提督なんだから、ありがたく貰つといてね。では現地です」
映像が消えて部屋の明かりが灯る。

「夜雨、そういう事だ。まあ、まさかとは思うけど思い当たる船とか居るか?」

「兵装次第ですね…もしかしたらお姉ちゃんの可能性も…」

「…航空撮影した写真の見える範囲だけど長砲身の連装4門、機銃多数、魚雷発射管…後は……はこみたいものかな」

「うーん……該当が多すぎてわからないです」

…大体見当は付いてるんですけど。

最悪な事が起こらなければいいんですけどね……。

1—1—B 防空戦艦夜雨出陣！

夜雨 side

朝日のまぶしい港に指名されたメンバー＋αが整列する。

「もう一度作戦概要の確認をします。パラオ第一第二鎮守府連合艦隊以下十数名とそのサポート隊は防空戦艦夜雨に搭乗・点呼・艤装確認後我々の基地航空隊の上空支援で見送りつつ一度台湾に航行。

・陸上攻撃機編隊に分乗している舞鶴鎮守府連合艦隊の琴音提督率いる武蔵，以下，十数名

・二式大艇に搭乗している単冠湾鎮守府連合艦隊の梓提督，指揮下，二十数名

・幌筵鎮守府連合艦隊の矢嶺提督率いる響^{ツェルタイ}，以下，二十数名、

・大規模輸送船団

と合流。

その後は琴音提督の指示に従い臨時前線基地まで輸送船団を護衛してください。その後は現地のガチホモロリコン提督と琴音提督の指示で作戦行動を開始してください。

概要は以上です。道中確認されている深海棲艦は駆逐、軽巡、重巡、雷巡、戦艦ル級、

軽空母又級、空母ヲ級です。未確認情報ですが名前持ちやレ級と言った深海棲艦も出現する可能性があります。十分に注意してください。なにか質問はありますか？」

長身の身体からスツと手が一本上がる。

「……やはり。夜雨ちゃんが聞きたいのは

・ 高速航行の許可

・ 深海棲艦に対して攻撃をして良いかの許可

・ 現地である程度の資材を調達し開発することへの許可

・ 万が一の時の責任

……と言ったところですね。すべて許可します。そして責任は私が取ります。それ

で宜しいですね？」

「……ありがとうございます」

「いえいえ。年の功と言いますのよ。まだ私も20歳ちよいですけど、ね。…1度旗艦夜雨に引き継ぎます。夜雨、前に来てなんか喋ってちょうだい」

唐突になんか喋ってとか言われましても困るのですが…。

無難に当たり障りの無い作戦中の行動で場を繋ぎますか…。

「了解、引き継がれました。各員には事前には荷物、部屋の場所や船のルールを一式書き込んだ規約及び艦内見取り図をPDF形式と書面で配布しました。それに従ってください

い。

台湾までは皆さんの燃料弾薬の消費の低減及び疲労を貯めないために高速で突っ切ります。艦上からの射撃は許可しますが洋上に降りての射撃は許可できませんので悪しからず、です。

最後に。前に紹介しましたがこちらの世界では「巫女」と呼ばれる龍奈、鈴奈、凧紗が私の艦には乗っています。その子達とも仲良くしてください。

鈴奈は仕事で忙しいためあまり顔を合わさないかも知れませんが…。

それでは各員の搭乗及び点呼が終わり次第出発します。以上。姉提督さんにお返しいたします」

応急修理女神

「夜雨ちゃんありがとう。最後に出撃メンバー全員にコレを渡す。主砲を下ろしてでもいいから持っていきなさい。そして、最大の作戦目標は全員がちゃんと帰ってくること。海域解放よりもそちらを優先しなさい。いいわね！以上。解散！」

——

「搭乗、点呼確認完了」

バディ点呼、グループ点呼、チーム点呼の報告を副長から確認する。

「……確認……確認、ラスト。応急修理女神隊搭乗確認！全員乗艦確認よし！点呼完了

！」

「総員乗艦確認、了解。ガスタービン起動！」

停泊時に使用していたガスタービンの回転数がゆっくり上がる。そしてもう1機が吸気用チャージャーの甲高い音と共にタービンブレードが回り始める。

「タラップ解放、格納！ガスタービン回転数安定確認！錨上げー！」

数十段のタラップを折りたたみ格納。

ゆっくりと巨大な金属鎖ごと錨を巻き上げる。

「上げよし、格納よし！舳い放てー！」

岸の舳い杭と船を結んでいたワイヤーロープを外して艦と港の拘束を解き放つ。

「スラストーサイドキック。ゆっくり離岸せよ！」

艦首、艦舷、艦尾に備え付けられた水流生成装置スラストにより発生した水流でコンクリートで護岸された港からゆっくりと離れる。

「前進湾内航行速！核融合炉、起動用意！」

4基のスクリーンブレードと4基の大型電磁式水流噴射機が大和型よりも重い図体をノソノソと前に進める。

「右前方250m暗礁、通過可能。左300m岩礁、通過可能。前方より味方貨物船2

隻、タンカー2隻、護衛艦4隻艦娘6の計14隻。輪形陣から単縦陣形へ移行中」

「了解。暗礁を抜け次第ちよい右。舵で対応」

「了解、暗礁通過後ちよい右。舵で対応」

『暗礁通過完了まで……3. 2. 1、艦尾通過確認』

「おーもかーじ。ちよい右……もどーせー！」

「味方先頭護衛艦より発光信号！」

……ワレ……アキツキガタガタゴエイカン……スズツキ……キカンノブジトアンゼンライノル。イツテラツシヤイ……

我あきづき型護衛艦、すずつき。貴艦の無事と安全を祈る。行つてらっしやい。以上」

「答光！見送りを感謝する。行つてきます。以上です。」

「……艦長、意見具申です。波を立てないように機関微速ゆつくりの方をお願いします。多分重量ギリギリまで積んでるのでしょうか。4番艦以降の喫水線が低過ぎます」

「……うーん……。とりあえず手空きのものは左舷整列。一応機関微速ゆつくり」

先頭からすずつき、天龍、皐月、タンカー、コンテナ船……と続いていく船団の横を波を立てずにノソノソと進んでいく。

龍奈曰く下手に波を立てて輸送船や護衛艦が座礁したらしたでめんどくさい事になるらしい。

……この程度の波で制御不能になるほど安定性の悪いのは大問題だと思いますが。

「左舷敬えー礼っ！」

私の後ろに続くほとんど無いに等しい波を乗り越える度に大きく揺れる駆逐艦。

大きく沈み込み海水を被る輸送艦。

超がつくほど無理矢理載せているのでしょね…。

違法積載と言うべきでしょうか。そんな法律なんて無いに等しいらしいですけど。

「……すれ違い完了及び十分に離れた事を確認。核融合炉起動！前進増速。機関

ハイスピードクルーズ
高速巡航。黒5！」

艦尾のスクリューが格納されて電磁水流噴射機により艦首から白波を立てて進む。

時は流れ時間は夜。

深海棲艦と数回エンカウトしたが、問答無用で夜雨とその搭乗艦娘によつて爆散させられたため何事も無く初日の日も暮れた。

灯火制限時刻も過ぎて消灯時間になり、大半の艦娘が床につき一部の艦娘はぐつすり夢の中の頃。もう少しで交代時刻という時に電探が光点を2つ放った。

「……電探に反応あり。正面505、高度：およそ1000に不明機1。低空飛行中。極めて低速です。方位同じく距離510、高度及び速力計測不能。極めて低高度に居るかと思われます。多分水艦上艦かと」

「不明機及び不明物体をunknownと呼称。やや迂回して回避します。速力そのままゆつくり面舵20。電探発信やめ。赤外線式探信機赤探と逆探のスイッチをON。超重力電磁防壁をステルスモードで起動用意してください」

（……夜間偵察機と艦娘でしょうか。それとも味方イージス艦とその艦載機でしょうか……一応警戒しておきましょう）」

| | | | |
 ???
 side

「……妙だな。500km先まで電波を投射できる深海棲艦など居なかったはずだが」
 艦隊の目と耳役、イージス艦。

その中でも特に大型で高性能なヘリ搭載型護衛艦、またの名をヘリ空母「いずも」を旗艦とする艦娘を伴う輸送船団は沖繩を指して輪型陣で航行している。

「艦長、どうなさいますか？」

「……よし。電探停波の状態を維持。護衛の艦娘に発行信号で報告。追加の哨戒ヘリの発艦準備を急がせろ。艦隊ゆっくり取り舵、15!」

「了解。失礼致します」

「艦隊ゆっくり取り舵15!」

「……平時なら白昼堂々と電波を放ち『私はここですよ』とアピールするほど艦娘は馬鹿じゃない。」

深海棲艦も対空警戒艦となる「レーダーピケット艦」以外は基本的に同じだ。

ただ、それらが装備する電探よりも遥かに高性能かつ高出力のビームが船隊を撫でて
いる。

「……不明感の電探波止まりました！逆探によりおおよその位置は掴めてます。距離約
540km、方位0—0—5。出力からして超大型艦です！」

「……クソツ。ランダム時間経過で電探を回すか……？いやそれともジグザグ回避か
……」

「艦長……？らしく無いですよ？」

「……今回ばかりは本当に嫌な予感しかしないんだ。相手の掌の上で踊らされてる感じ
がする……」

「例のあの艦ですか？」

「……それもある。」

「大本営が言つてた異世界から来た戦艦なんて戦意高揚のとおとぎ話のようなもんです
よねw 信憑性も微妙ですし……」

「……とりあえず現状維持をするしかないな」

「……なんて本心から綺麗事言えるほど落ち着いて居ればまともな指示が出せるのに
な。」

—————

夜雨 side

CICを不穏な空気が包み込む。

艦載機パイロットは明日の朝に備えて睡眠取らせて味方なのか敵なのかは確認出来ない。

つい先程、電探を1回だけ回した。いや、しなければ良かったではなくして良かったと思ってる。

輝点が増えた。いや、増えるはずのところに増えていた。

正面の unknown 集団の数が増えているだけならさほど驚かない。

その約100km左に unknown に突撃する集団が写っていた。

「……川内さん、夜間偵察機発進させましょう。貴方の立っている飛行甲板脇にカタパルトがあります。そこから『召喚』してください。場合によっては夜戦になりますよ」

「…川内参上！夜戦なら任せておいて！……って、バレてたか……ってことで、借りますよ」

「私の艦内なら誰が何処にいるか、何をしているかなんてだいたいの把握できますよ」

艦装を召喚し左弦カタパルトの先端に立つのを確認してからカタパルトを発信位置まで上昇させる。

そして、進行方向から10度ほど角度をつけて固定する。

こうすることにより川内は向かい風を受けてより発艦が楽になるらしい。

「川内搭載一番機発艦完了」

『川内一番機に告ぐ。君のコートネームは夜鷹《ナイトホーク》だ。以後そうして呼ばせてもらう。進路とミッシェンは川内経由か直接こちらから随時指示を出す。以上。規定高度まで上昇しながら初期進路を取れ。幸運と無事の帰還を祈る』

1-1-C
艦隊戦???
side

妙な胸騒ぎがする。

いつもなら何も無いこの海域。所属不明かつ超強力電波を発する unknown 一隻。

「……長。艦長？」

航海長の声で我に帰る。

「……ああ、すまない。考え事をしていた。もう意味度言ってくれ。」

「艦長らしく無いですよ。……で、その考え事とは、嫌な予感がする、ですか？」

「……君に隠し事は出来んな。その通りだ。護衛の艦娘もまだ若い。しかも水雷戦隊だ。航空機動部隊、戦艦を多数含んだ水上部隊にでも来られたら……つて考えるとな。」

『逆探に反応！方位正面、距離不明！』

「……艦長。航海長として意見具申します。電探を回してください。一回だけでも構いません！」

「……よかろう。電探、一回だけませ。一回だけだぞ。」

「電探一回転作動。」

輝点が移動した。敵密には正面にいるはずの1隻が消えた。そして輝点が我が艦隊のすぐ横に移動していた。それも複数が増えて大型深海棲艦特有のレーダー波の揺れを伴う表示というおまけまで付いて。

「……嫌な予感とは当たるもんだな。艦娘に連絡。……いずも他数隻と共に退避させよ。」

C I Cの中の視線がすべて集まる。マジかよ。

「艦長?!何を!」

「……艦娘あいつらを護るんだよ。そうじゃなきや仮に深海棲艦との戦闘後まで残ったとしてもデカイ不明艦に喰われるぞ!そもそも残れるかの方が怪しい規模だ。」

「艦長、それは無茶です!」

「無茶でもやらなければならぬのだ!……嫌なら今すぐ降りろ。許可する。」

「艦長?!」

「……なら降りさせてもらうヨ。コンなことなんテやつてられないニ。シシシ……」

この一言でC I Cの空気が凍りついた。

—————

夜雨side

「接触まで推定後10分程度!」

「機関増速。CICより飛行甲板上の川内さん、一応中継着弾観測の用意をお願いします。インカムの使い方がわかりますよね?」

「バツチリ!」

「おkです。警戒態勢!指示があるまで持ち場で点検、待機せよ。艦娘の皆さんを招集。機装を点検し何時でも出撃できるようにしてください。」

A F Kの文字の書かれた旗:通称アホか旗が掲げられる。

正式には『A w a y F r o m K e y b o a r d』。

パソコンなどの前から離れてますよという意味らしい。

人によつてはROMと言った方が通じる可能性もあるが……。

これを装備していると何故か修理中に無人浮遊船として処理されるため攻撃されない(されても無傷で済む)ことがあるらしい。

……何故A F Kが選ばれたのかは未だに謎である。

(弾薬20%増加のE C O旗も捨て難いが無限装填装置を積んでると空気どころか意味をなさないとかそんな研究ありましたね……)

「こちら川内。夜間偵察機の接触を確認。正面の艦隊は味方！側方から突撃してきているのが敵！」

「了解！総員戦闘態勢！全速前進で50km以内に入り次第砲撃開始！」
船体が揺れて一気にトップスピードまで加速し艦隊集団との距離を詰める。

—————

???
side

CICの出入口から近いところに立っていた男がツカツカと艦長席の前に立つ

「こんな船と一緒に沈むなんて嫌だネ。我々の祖国の戦闘艦ならまだわかる。それに比べてこんなちっぽけで安い船、そんな船に元々乗りたくて乗っ……」

艦長の拳が飛んだ。しかも若干しゃがみこんでの踏み込み加速のついた拳だ。そして襟元に手を伸ばし引き寄せ、持ち上げる。

「……か、艦長！落ち着いて下さい！」

「艦長?!鉄拳制裁は無しですよ！」

「……俺は至って冷静だ。……おい貴様。もう一回言ってみろ。艦娘あいつらだつて怖いという感情を必死に押し殺して俺らの代わりに海の平和を守ってくれてんだぞ！それすら分から

ねえか? あ?」

「わからないネ。わかる気もないシ、あんなロボット兵器の事をわかりたくもないニ。大人しく暖かい布団ノ上で慰安婦に……」

艦橋の雰囲気殺意に塗り替えられるほどの覇気と共に艦長怒りの拳が顔面にめり込んだ。

C I Cの壁に腰の入った左アツパーで叩きつる。

馬鹿でも『強攻撃が来る』とわかるようなオーバードモーションのバックスイングをとり、腰の捻りとダメ押し踏み込みを加えた破壊力抜群のストレートが男の顔面に吸い込まれた。

壁と拳に顔が挟まれ歪み、鮮血がモニターに飛ぶ。

C I Cの壁が男の後頭部の形に凹んでがっちりホールドしているために左右に首を振ったり、しゃがんだりして逃げられない。

左右二つの拳を六砲身バルカン砲の如く叩き込む。

「艦長! 落ち着いてください! もうコイツのライフはゼロですよ! どうか、失神して失禁してます! オーバークイルですよ!」

3人がかりで押さえつけられてようやく俺は拳を握る手の力を解いた。

「……誰でもいい。……扉際のお前。コイツをC I Cから叩き出せ。そして海に捨て

ろ。艦長命令だ!!」

「ヒツ……り、了解しました。ただ今!」

呼ばれた男がビビりながら顔のえぐれた血肉の塊を運び出す。後続の者はまるで汚いものを触るかの如く鮮血の飛び散った肉の破片をビニール袋に入れていく。

「……で、他の者は?」

静寂。誰も答えない。ぶん殴られる事を恐れているのか、それとも答える必要が無いということか。

「……他の者は?」

扉がゆつくりと開く音により静寂が消えた。

「……ああ……皆すまん……見苦しいところを見せてしまったな。正直俺もあんな事はしたくなかった。すまない。」

血腥い手で帽子を深くかぶり直す。

1人の男が前にでる。

「……俺は艦長について行きますよ。艦長に幾度となく窮地を救われた。そして今、俺は艦長を止めなかった。止めれなかったのではなく『止めなかった』。……それだけでついでに行くには十分過ぎる理由ですよね?立派な共犯者ですから。」

「……俺もついていきます。護衛艦はまし、まは俺の家ですから」

「俺もです。艦長、地の果てまでお供致します。」

「俺は愛しの嫁さんと息子と娘、親父を深海棲艦に殺された。帰る家はねえ。ぶっ壊されてんだ。気にすんな！みんな天国で待ってる。」

「……ぼ、僕も新入りですが、精一杯お供します！」

「……皆すまん……。通信回線開け。……。あー。緊急事態だから前置き無しで要件だけ話す。深海棲艦の大艦隊接近中。、いずも、ほか数隻は退避せよ。艦娘は進行方向左側に直進するように魚雷発射後、いずも、ほか数隻を護衛し離脱せよ。本艦及び残存艦艇は撤退支援をする。拒否権は無い。以上。該当艦は右回頭75度！」

艦娘が進行方向左側に魚雷を放ち全通式飛行甲板を持つヘリ空母の異名を持つヘリ搭載型護衛艦いずもを中心とした輪形陣形を組み直す。

「急ぎ全速離脱せよ!!!……………すまん。皆……」

『了解、機関全速離脱』

煙突から灰色の排煙をあげて離脱していくのを見送った。

「……さて、砲雷長。一仕事と行こうか。総員戦闘態勢。」

それに応呼するようにガスタービンエンジンが甲高く吠えた。

――

夜雨 side

「……把握した……。」

うたた寝していた鈴奈をゆすり起こして状況を説明。

(無能なゲフンゲフン) 副長がお休みになっていたため仕方なく、ね。

「当直夜勤が始まって早々ごめん。今は鈴奈ちゃんが臨時副長になるけど…艦娘の皆さんのことを任せても大丈夫？」

「……大丈夫……今さつき……しっかり寝た……いける……。」

鈴奈の端末と副長席のコンソールボックスを物理回線を繋ぐと鈴奈の周りの空中に薄緑色のウインドウが複数開いた。

「……コネクト……システム……オール……グリーン……感度良好……セットアップ……完了……おっけー……。」

「了解。艦娘は艦装を装着し飛行甲下格納庫前に集合待機。緊急時マニュアルαに従い

夜間戦闘で味方艦隊を救助します。第1水雷戦隊旗艦は阿武隈、第二水雷戦隊旗艦は神通、第三水雷戦隊旗艦は川内とし、指示があるまで待機せよ。敵艦は戦艦級3以上、巡洋艦級15以上、駆逐級50以上の集団につき注意されたし。以上」

『川内了解！『川内うるさい!!』うるせえ空母は黙ってて！』

川内の声に割り込んできたのは……うーん……誰でしょうか……多分瑞鶴かな……？ w

「……防壁……ステルスモード……電探……動作……開始……」

鈴奈が空中に浮いたウインドウ型キーボードを叩き始める

「防壁ステルス起動。及び電探動作を確認。……味方艦隊二分しました！大部分が離脱に入ったようです。敵艦艇との距離30km！我々との距離95km！想定接触まで後少し！」

淡い青紫色の防壁が船を包み込み電波の波を打ち消す。

「了解。機関全速前進！総員何かに捕まって！」

「……タービンブースト……スタート……」

大容量蓄電池からの上乗せを受けた核融合炉からの電気エネルギーが電磁水流推進装置をぶん回す。

大量の熱を発するのと機材に無理をさせてしまうため長時間連続動作は出来ない。だが、強力な冷却装置により一応レボルバーのように連発する事が可能である。

爆発的加速を得た艦は洋上を駆け抜ける。

「主砲有効射程まで後1分30秒！」

「前部AGS及び2、3番主砲、撃ち方よーい！主砲弾種、対地上目標用【広範囲灼熱拡散榴弾】。AGS弾種対艦用誘導砲弾！目標、複縦陣中央付近のバラケてる駆逐艦！」

加速乱発による電力不足状態なので半油圧半電動作動モードでの砲塔旋回になった。

「くっ……………」

軽快とは程遠い首振り。2、3番砲塔が仰角を取り終わると同時にAGSが砲身を振り上げ角度を標的と合わせる。

鈴奈「……………電力……………不足……………」

夜雨「バッテリーもヤバイですね……………ガスタービンエンジン補助機も回っているのだから……………」

鈴奈「……………了解……………頑張つて節電……………する……………目標補足……………ロックオン……………確認……………」

「戦闘開始。主砲、斉射用意……………撃ち方ーっ！始めっ！」

「……………撃ち方あ……………始め……………」

????
side

「全艦トマホーク及びハーブーン、攻撃始め!!」

VLSが全て開き対艦ミサイルが逐次打ち上げられて次々と深海棲艦に降り注ぐ。

が、駆逐艦と小型軽巡洋艦クラスにしか有効打が与えられない。

それでも数隻程を血祭りにするなら十分過ぎる火力だ。

深海棲艦もリ級重巡洋艦や何処からか追加で湧いてきたル級高速戦艦、夕級重装甲戦艦をミサイル吸引の盾にしつつ突撃する。

「ハーブーン、残団残りわずか!」

「トマホーク、残弾0!」

「くっ…『砲弾接近!弾着まで5!』取り舵一杯!!」

ル級と夕級の14inch(≒約35.56cm)砲弾が至近で水面を揺らす

「…目標イ級駆逐艦、有効射程圏内!」

「目標、正面イ級駆逐艦、主砲、うちいーかたあー始めっ!」

「撃ちい方始めっ!!」

砲雷長が速射砲のトリガーを握り込む。

それに合わせて3門の5inch速射砲が次々と火を吹きイ級駆逐艦の艦橋から魚雷発射管等の上部構造物を纏めて焼き払い、誘爆した魚雷により吹き飛ばす。

随伴艦のお返しと言わんばかりに巡洋艦からの集中砲火を先頭のイージス艦に浴びせる。

「先頭艦しらなみ、大破炎上中！主機出力低下により戦列を離れます！」

「主機増速、おもーかーじ！」

先頭のしらなみの脇をほぼ全速力ですり抜けた時、不気味な音とともにコンソールが火花を散らす。

「被害報告！」

「り級の至近弾！右舷フェーズドアレイレーダー使用不可能！物理損傷につき復旧不可能です！」

「主砲砲身冷却中！」

「後続のはやぶさ型高速ミサイル艇、いぬわし、及び、うぐいす、爆散！残存艦艇は我が艦を含めて大破漂流中の、しらなみ、大炎上中の、しきしま、伊号高速水雷艇1隻、十三水雷艇1隻の計5隻です！」

「クソツ……撃てるもんは機関銃だろうが拳銃だろうがRPGだろうがなんだろうが撃ちまく……」

衝撃とともにCIC艦橋員が床に叩きつけられる。

「ひ、被害報告！ダメージコントロール!!」

「艦橋に直撃弾！艦橋大破！浸水発生！主機出力低下！されど航行程度なら支障なし！」

「意地でも脚は止めるな！反転離脱するぞ！取り舵一杯！最大戦速！」

「重巡クラスが発砲！ダメです！間に合いません！」

衝撃で大半の者が椅子ごと地面に叩きつけられた。

大部分の液晶モニタが割れたりヒビが入ったりして使えなくなってしまったが、まだ何とかかなりそうだ……。

「クソツ……ダメージコントロール！被害状況知らせ！」

『飛行甲板及び航空艦橋に被弾！火災発生！後部主砲沈黙！』消火急げ！衛生班来てくれー！』エンジン一機停止！残り一機破損！振り切れません！』

「クソツ……まだ手はある！落ち着いてダメージコントロールをしろ！手が足りなければ俺もやる！」

へしゃげて自動で動かなくなったCICの扉の隙間からどうにか抜け出し、足首の上まで海水に浸かりながらも壁伝いに救急箱を取りに医務室に行く。

『艦長、敵機来襲!!!』

「なっ?!」

終わった……主砲も使えず、C I w sも根こそぎ吹き飛ばされてるこの状況で夜間攻撃機に対抗できるの手はもう無い……

「総員退艦せよ!!!最上甲板へ逃げ!怪我をして動けない者を動ける者は引っ張っていけ!お前ら、俺に掴まれ。」

……ぐお……流石に三人担ぐのは厳しい……腰まで海水が登ってきてやがる……くそ……階段が辛い……

1段1段フラフラしながら登っていく。

……後少しで外だ……お前らもう少しだぞ……頑張れよ……

突如発生した強風が艦を揺する。

バランスを崩した俺はその場で尻餅を付いた。

「か、艦長！大丈夫ですか?!……あ、敵艦隊中央付近で火球発生！敵艦の一部に大火災発生中！」

「大丈夫だ……とりあえず手を貸してくれ。」

「とりあえず艦娘、先にお上がり下さい。負傷者3人は私が甲板に引っ張りあげます！」
「了解、頼むぞ!!」

突然の敵艦隊の爆発。

一体何が起こってやがる……!

—————

夜雨 side

「……初弾……至近弾……弾種的には……命中……」

夜雨の放った合計4発の砲弾は艦隊中央付近の海面で炸裂した。

火薬と酸化剤、燃燒剤が混ざり合い化学反応を起こし大爆発。その時に発生した莫大なエネルギーを横方向に超高温の爆風として解放する。

灼熱の爆風は着弾点からほど近い駆逐艦数隻や巡洋艦魚雷を炙り、炸裂させる。

飛び散った燃燒剤などは海水よりも軽く海面を薄い膜のように流れる。

そこに引火し灼熱地獄が生成され昼間のように敵艦を照らす。

そこに突っ込んだ深海棲艦は魚雷の誘爆を恐れて投棄、破棄を余儀なくされる。

戦艦に効果的なダメージを与えられる魚雷が無い水雷戦隊など、さほど脅威でもない。

それに続いて280mmの流星群が巡洋艦の砲塔天板や艦橋目掛けて突き刺さる。

「AGSは射撃を継続。浮いてる敵艦に片っ端から撃ち込んで！CIWSと高角速射砲は夜間攻撃機に集中！射程に入り次第自由射撃！」

「……艦長。敵艦隊の一部が回頭、こちらに艦首を向け始めています」

「取り舵25。分離した艦隊をβ、戦艦を含む元の艦隊をαと呼称します。4. 5番主砲はβ郡。弾種通常弾及び徹甲榴弾！2. 3番主砲、α郡に通常榴弾で交互射撃！広角速射砲及びCIWSは銭勘定しながら殺つちやってください。各個、攻撃開始！」

「……取り舵……25……各個目標……攻撃……始め……」

電探で距離を測り一番近い敵から順番に砲弾を浴びせる。

敵戦艦の主砲が弾け飛ぶのを確認したと同時に船を回す。

「機関減速旋回！カタパルト下げ角最大。艦娘水雷艦隊、発進用意。」

「……サイドキック……急減速……機関微速……」

スクリュウの可変ピッチと推進装置の逆噴射で艦が急減速してふらつき、ドリフト態勢になる。

『第一〜第三艦隊、出撃用意完了。』

「カタパルト下げ角最大。総員発進してください！」

『了解、s』やったあああ！夜戦だああ!!』……川内、五月蠅あい！』

カタパルトから次々と艦娘が滑り降り、海面を走る。

『……第2水雷戦隊、突撃用意』

『第三水雷戦隊、夜間砲雷撃戦用意！』

『第一水雷戦隊のみ、皆さあん！したがってくださいあーいー！』

「それにしても、よく艦載機用カタパルトを発進用スロープ代わりにするなんて思いついたわね……流石鈴ちゃんすず」

「……褒めても……何も……出ない……」

「夜雨から第2、第3水雷戦隊旗艦へ。敵艦の位置を送る。効果的に敵艦隊を殲滅せよ。」

臨時第1水雷戦隊は味方艦隊を護衛及び漂流者を確実に保護救出せよ！支援砲火は私
がやります。」

『第二水雷戦隊旗艦、神通、行きますす！』

『第三水雷戦隊旗艦、川内了解！』

『り、臨時第1水雷戦隊旗艦、阿武隈。ご期待に応えますす！』

海面に滑り降り、着水。システムの正常作動を確認しつつ海面を駆け抜ける。

「充分に艦娘艦隊が離脱したのを確認して増速60knot。……さて。お仕事です
よ。『陸戦隊の隊長さん？』」

「……………指揮権……………貰うよ……………」

「おねがいします。」

—————

『敵残存艦隊、撤退していきます』

「…………夜があげましたね。深追いは厳禁ですね。味方艦隊との合流を急ぎましょう。鈴
ちゃん、お疲れ様。ありがとう。」

鈴奈「……………うん……………戦闘態勢解除……………用具収め……………」

「漂流者を救助後、一旦帰投して補給をしてください。その後航行不可能状態の護衛艦三隻を曳航して行きましょう。戦闘態勢解除、輪形陣にて警戒態勢を維持。皆さんお疲れ様でした。そしてありがとうございます。……深淵、発艦用意完了次第発艦をお願いします。」

……結果から言うところの戦いは離脱しなかった護衛艦はほぼ壊滅状態。

夜雨とそこから発進した18名は小破かそれ未満のダメージしか受けなかった。

護衛艦組は深海棲艦に対して大敗状態、艦娘組は快勝といった感じであろう。

しかし、戦術的には大きな転換点となったであろう。

それは『照明弾』や『探照灯』を一切使わない戦い方で『一方的な勝利』をしたことである。

それまでの戦い方では『艦娘母艦』や『艦娘輸送艦』なりの『艦娘以外の味方艦』……所謂『艦娘支援艦』を巻き込まないようにその周りで戦うことは無かった。

極力離れた位置で戦うため『艦娘支援艦』が不意打ち奇襲を受けて艦娘と連絡が取れなくなり回収部隊の編成、部隊壊滅、最悪全員ロストとなることも稀にあった。

また、攻撃面でもイージス艦や護衛艦と比べて電探の性能が著しく低いため早期発見

も希にしかできず、出来たとしても遠距離からの『電探射撃』を行うにも『観測者』を必要とした。

そして艦娘と艦娘支援艦が簡易的な『情報網』……つまり、声や手旗で連絡を取り合うことはあっても無線で連絡を取り合いながら戦うことも無かった。

艦娘同士が無線で連絡を取り合ってる為、艦娘支援艦も出来るのでは？と、研究は行われているのだがことごとく失敗に終わっている。

……要約するなら『個人の特技だけをいかした個人プレイの勝利』から『弱点を補い合う形での個人の特技をいかした連携プレイの勝利』に変わったのである。

後日談だが、『レベルの低い艦娘』を使って原則禁止の特攻輸送を行ったことが上層部にバレその提督は、即解雇&刑罰を受けることになった。

しかし、大部分の報道陣が後日報道で『レベルの低い』という部分をひた隠しにして『艦娘が手を抜いた』だの『艦娘が悪い』だの色々物言いを大々的に付けて『この件を不当である』と、してしまった。

それに対して大本営は『正しい』発表をしたのだが、大部分の報道陣がそれを『否定せず、嘘の発表をした』と、した。

それらはまた別のお話である。

—————

以下は戦闘資料である。

—————

この戦いでの喪失艦／損傷艦

・護衛艦（イージス艦、ヘリコプター搭載護衛艦等を含む）

【轟沈】

あなご

くらま

さわかぜ

たちかぜ

しまゆき

はたゆき

はまぎり

とりがら

あさひ

あかね

すみれ

けし

・高速ミサイル艇

いぬわし

うぐいす

すずめ

はと

からす

・高速水雷艇

無し

【自力航行不能】

・護衛艦

きりなみ

しらなみ

はましま

・高速ミサイル艇

無し

・高速水雷艇

伊号水雷艇―ハヤブサマル

【自力航行可能（無傷も含む）】

・護衛艦

無し

・高速ミサイル艇

無し

・高速水雷艇

第十三号水雷艇（艦橋大破されど航行に影響無し）

&退避組

【艦娘】

小破……阿武隈、神通、夕立、夜雨。

中破以上……無し

・戦闘時間―様式

夜―夜明け（夜戦）―不意打ち乱戦（T字不利）

・勝利判定

A勝利。ただし、我が国の保有する護衛艦のうち約半数を損失。戦死者も数多いが迅速な救助対応等が功を奏し被害は限定的なものになっている。

・わかりやすく艦娘式で表すなら？

旗艦夜雨の不意打ち連続連撃と範囲攻撃で戦艦と巡洋艦と駆逐艦がそれぞれ中破、大破、撃沈。

その後、残存敵艦艇を艦娘が囲んでゲリラ戦の如く各個撃破していく。
夜明けと共に深海棲艦は逃亡したため戦闘終了。

—————

1-1-D 〈台湾強襲!民間人や味方を救出せよ!〉

夜雨side

阿武隈「無事立霧溪たつきりけいに入港、接舷出来ました。錨と舳を下してくださいー!」

艦舷からロープが投げられもやいに結び付けられる。艦舷から錨がおろされ海底の岩に食い込む。

「投錨確認よーし。ここってこんなに深かったのですね…。こっちでは浅瀬だったから入れなかったよね…。」

我々の知る立霧溪は細い川と広い砂利の河川：涸れかけた川といっても差し支えないと思う。

しかし、今私は確かにその川の真ん中を戦艦という幅広底深な船で遡上していた。

龍奈「こつちの記録によれば深海棲艦に削られた後、人口の港として流用されたみたいです。ガスタービンエンジンおよび1. 2番以外の主機停止。運行後点検メンテナンスをお願いします。いくぞ野郎ども!!!私に続け!!!」

龍奈がCICの扉から機関室のほうへ走っていく光景はもう見慣れた光景である。整備というか調整というか：そういうのはとてもマメな人だからもう自由に任せてい

る。

「艦娘の皆さん、お疲れ様です。ただいま台湾の立霧溪河川たつきりけいの南側に接岸しました。えーつと……随伴艦や輸送艦の補給の為ですけど、約1日半強ぐらいの自由時間が出来ました。えーつと……」

なんていうか……こういうのはあんまり得意じゃないからかなり考えながら言っつてしまふのはあんまりよくないですね……w

琴音 t 『おう、割り込み失礼。お前から久しぶりだな。琴音だ。今隣の二式大艇機内に武蔵共々居るんだが外でもぶらついて来たらどうだ？……』と、言いたいが。昨日台北付近の港が空襲でやられ、さらに深海棲艦の強襲揚陸部隊に上陸され台湾市あたりが包囲されている。おかげで台湾基地は機能マヒ状態。ただし、今のところ艦娘は損傷こそあるものの全員無事らしい。現在は別動隊の航空母艦および軽空母によるタンクキラーが先行して支援攻撃を実行中。ただ敵の数が多いのと揚陸部隊による無限沸き状態でじり貧の模様だ。

作戦概要は

・ 敵揚陸部隊の分断及び撃破。

・ 北京市街地付近に取り残された一般市民および艦娘、司令部などの人員確保、保護および安全に離脱すること。

・ 凧沙の乗る30mm機動対空車両

・ 鈴奈と夜雨所属の陸戦機動部隊が乗る兵員輸送装甲車両

・ サラトガが乗るM1A2エイブラムス(バルカン砲仕様)

・ 米海兵隊が乗る水陸両用車両数両

・ イギリス海兵隊のチャレンジャー2戦車

・ ドイツ陸軍のレオパルト2マークスマン対空車両

……

【内訳】

・ 米(陸軍) …… 戦車10 装甲9 輸送30 自走2 水陸6

・ 米(海兵隊) …… 装甲10 輸送10

・ 英 …… 戦車3 装甲2 輸送2

・ 独 …… 戦車2 対空4 輸送2

・ 露 …… 戦車10 対空4 駆逐2 自走2 装甲1 水陸2

・ 日(自衛隊) …… 戦車8 対空6 装甲7 輸送12

・ 台湾 …… 戦車15 装甲2 輸送2

・ 韓国 …… 戦車2

・ 艦娘 …… 千ハ7 千ハ新砲塔5 千ト10 千ヌ5 ホ口4 短12cm千ハ1 長

12 cmチハ1 ソキ4 チリII2 ソキ4

・夜雨陸戦隊… 重戦車1 対空1 装甲8 輸送3

※

・対空Ⅱ対空車両

……ゲパルトや89式対空、レオパルト2マークスマン等

・装甲Ⅱ装甲戦闘車両（装甲兵員輸送車両も含む）

……ストライカー、96式装輪装甲車、MT-LB等

・輸送Ⅱ輸送車両（非装甲兵員輸送車やその護衛も含む）

・水陸Ⅱ水陸両用車両

……AAV7、EFV、BMP3等

・自走Ⅱ自走砲（という名前のミサイル戦車）

……シエリダン

・駆逐Ⅱ戦車駆逐車両

……ISU-122、300—深海後期生産型改（深海棲艦からの鹵獲品を参考に

生産された型）

…どうしてこうなったんだろう。なんていうか、うん。琴音提督か武蔵さんが指揮を執ると思っていたんですよね。

それが名前も知らない、階級下のおっさんがしやしやり出てなんか指揮をすることになった…。

最後部車両に乗っている指揮官「先頭前進。沿岸環状高速防衛路を指定地点まで北進しろ。ぐずぐずしていると遅れるぞ!」

琴音『なーんであんな深海棲艦とまともに戦えないやつが指揮を執るんだ?意味が分からんぞ…。』

武蔵『普通なら私か指揮能力の高い義理妹夜雨がとるべきだろう。しかも最後尾から指揮ということは自分が一番安全な…』ブツブツ

「あ、あのお二人さん…あんまりぐちぐちいうのはよろしくないですよ…。」

最後部車両に乗っている指揮官『とつとと前進しろドアホ!!減らず口が!』

琴音『…階級が上の人に使う言葉がそれか?』

「ふ、二人ともやめてください。今はいがみ合うときじゃないです!!それにほかの人にまで丸聞こえなので第三者まで不快になりますよ!というか階級的にはなぜか私が一番高いのですが…。そこは置いといて前進してください。いつまでたつても進みませんよ!!」

無線越しで喧嘩を始めようとしているので形だけでも止めに入る。

琴音『…で。最後尾チキンかつ俺よりも階級下の分際がなんだ?』

赤城『え、チキンカツですって????私も食べたいです!!』

「赤城さんストップ!食べ物じゃないからね!琴音はとつととアクセル踏んで進む!!」

最後部車両に乗っている指揮官『怒られてやんのwwww m9 (ﾟДﾟ)プギヤー
wwwwwwwwww』

「…このまま上層部に報告しますね。記録はちゃんととってますし。」

最後部車両に乗っている指揮官『おいてくあwse d r f g t y ふ j きおー p . @ . : 』

「あー無線封鎖しているのでも何も聞こえないですわねー???あ、ズッキー聞こえている?」
 前進よろしく。じゃ?。」

なんかもごもご言ってるけど聞こえないふりをして無線をガチャ切りし、操縦席に座っている妖精ズッキーに前進を指示する。

あ、ズッキーは人間の時に鈴木と呼ばれていたメカニツクの奴で、ソフトウエアとハードウエアの両方いけちゃう変人さんね。

鈴木『前進了解。VVVFインバータ初段作動確認。ノッチオン。出力上昇、トルク良好。前進します!』

高出力VVVFインバータ制御装置が動作し、無限軌道クラを回す。もちろん私は鉄道に乗っているわけではない。

私が今乗っている戦車は、既存の型落ち機を夕張、明石、龍奈、鈴木ズッキーが即席改造をして無理やり実用化した重装甲と高火力、そしてこう機動性の三立をしたMBTもとい重戦車である。

元の戦車の駆動方式が独特：ディーゼルエレクトリック式であった。

そのため、電力を外部供給すればエンジンをかけていなくても稼働ができてしまうこ

とに魔改造に定評のある4人は気が付いてしまい、現状は実質外部電力で動く電動重戦車と言っても差し支えが無い。ちなみに電源は私の艦装から電力ケーブルを伸ばしバッテリーバッファを介して電動モーターに接続している。

防御用の装甲も強化され、さらには私が任意で防御壁を展開することによりAPFS―DSやFEAT―FS、HEAT―MPなどを一切受け付けない防御を誇る…らしい。

機動面に関しては操縦担当の妖精からは「こんなずんぐりむつくりした見た目だけでも素直で乗っていて楽しい」とかなんとか。

龍奈『まさか産廃のハイブリッド機動システムがこんな所で役に立つとは思っていませんでした。開発者さんやりますね。』

「そういう龍奈と明石さんとばりん^張、そしてズッキーの四人で小一時間…かな?それくらいで私の艦装から電力を供給するシステムを作ってなおかつ実用面でも問題ないくらいまで仕上げるって何事……」

明石『いやー、そのへんに転がっていた鉄道車両に付いていたものを運良くチョチョイとパクって使わせて貰ったのですよ。』

夕張『楽しかったよ色々。いい感じでしょ!』

鈴木^{ズッキー}『ソフトの書き換え大変でしたよ、ほんと。規格が違い過ぎて…w』

もともとはMBT：主力戦車とは口が裂けても言えないレベルでお粗末な戦車だった。わかりやすく言うならティーガー2やマウスみたいに重量の割にエンジンパワーもモーターパワーも足りない。何とか動けるようにと最大の重量物：装甲が削られた。がそれでも足りない代物。

主砲や砲塔旋回装置もきつちりメンテナンスはしていたが、長期間浴びていた海風でさび付いていて動かなかった。

そのようなものを約半日足らずで修理、改装、改造までしてしまった。

サラトガ『え、勝手に使ったってことですよね??それってOKなのですか?』

琴音『スクラップになつていたかそのへんに転がって朽ち果てるよりはマシだ。と、思つて許可した。』

サラトガ『ならNo problemですな。』

その辺に破棄：いや、破壊された鉄道や車からパーツをパク：無断で借りたということだろう。(もちろん返すつもりはゼロ。)

だからその辺にあつたEF系列やDD系列の機関車を引きずつてかき集めてばらしていたのか：と、妙に納得してしまった。

「……はあ……。だからと言つて3000kw級の交流電気モーターをばらして四個1?五個1?して2つ用意してこれに積載するのはどうかと思ひますよ……。さらに制御

機器は半分自作で変速はほぼ無段階といっても過言ではないし、それでいて80トンの重量があるにもかかわらず160km/hまで速度計の針がありますし…。アスファルトの上で動かしても粉碎しないし、土の上でも沈んだりしないあたりを考えると、もう物理法則を完全に無視していますよね、これ…。妖精力学と艦娘科学は恐ろしすぎます……。

琴音『まあそれで色々助かっているのは事実だ。妖精と三人にしっかりと感謝ぐらいは最低でもしろよ？ 礼儀だゾ。』

「もうすでにやりました。後でアイスか最中か饅頭か何か差し入れを用意しますよ。」

コマンダーキューポラに腰をかけ後ろをぼんやり眺める。真夏のセミの煩い鳴き声が聞こえ空には入道雲が浮かんでいる。日本の夏と似ているがそれほど暑くない。むしろ肌寒いいつてもいい冷え方。これも深海棲艦の仕業、通称【深海性異常気象】というものらしい。強力な深海棲艦がいると起きるとかなんとか。

ああそういえば列車移動組の最終便……蒸気機関車が牽引することになっていたっけ。

煤煙とかで深海棲艦にバレなきやいな。

最後尾『全車移動開始確認』

――

4時間ほど道なりに進むと舗装路が砂や砂利、土で出来たような山道に変わる。

さらに空襲で道が穴だらけになり、更には深海棲艦の固有能力で地形が削られたりして川や水田からあふれでた水により膝上まで脚が吸い込まれる。

先ほどまで日照りだった天気も薄暗くなってきた。ただでさえ冷えていたのがさらに肌寒くなり、長袖の上着を着る兵も出てきた。

更にダメ押しと言わんばかりに深海棲艦の汚染：深海汚染で土地が紫色に変色していたり、変な色の泥水が染み出たりと進軍に影響が出てきた。

一応艦娘の除染能力を駆使しながら地ならしをしつつ進んでいるが、ここまで来ると悪路も走破できる戦車も装甲の自重で沈む。そして、隊列の進む速度が落ちる。

M1A2三号車『クソ！泥に埋まってスタックした！引つ張ってくれ！』

レオ2二号車『へいへい。ロープ繋ぐよー！ってああこつちもダメっばい!!ヘルプ！』

チャレ2『落ち着きが足りませんね。こういう時こそ紅茶を飲んで…』ズブズブズブ89式『皆さん埋まっていますよ!!!誰かダンボールもってこい!!!』

…こんな感じに、である。

水陸両用車両や兵員輸送の一部は水陸両用なので浮かぶことが出来る。そのため問題なく進むことが出来ているが、

陸上自衛隊の89式自走高射機関砲や90式、10式

米陸軍のM1A2、M551

イギリス陸軍のFV4034 Challenger 2

Leo pard Z wei / I T P S V 90 Marks man
 Leop ard Z wei、

ロシア陸軍のT14 (Ob'ekt 148) や T15

そして台湾陸軍のCM12

などからなる実質国連軍は互いに引っ張りながら、もしくは進めない土地を迂回しながら四苦八苦して進んでいる。

泥まみれになりながら穴の淵にタイヤを引っ掛けて車を振り回し遊んでいる武蔵と琴音提督、量子格納による疑似ワープで回避できる艦娘、妖精は例外だった。

「そろそろ第3便…。蒸気機関車が追いついてくるころかしら。」

琴音「時間的にそれぐらいだな。蒸気機関だから狙われやすいから多めに艦娘の護衛を付けた。多少は大丈夫だろ。お、追いついてきた。」

汽笛を鳴らし大量の黒煙を上げながら蒸気機関車三重連で朽ちた草原を駆け抜ける。

琴音『はっはー。こりゃいい速度出とるな。どれ、追いかけることでも行くか。いいだろ??』

武蔵『どうなんだ?大丈夫なら合図出してくれ夜雨?』
義理妹

夜雨電探妖精『……ダメみたいですね……。複数方向から敵艦載機多数接近。数合計200ちよい。重爆と爆撃機及びエスコート接近中。カノーネンフォーゲル、Hs129空飛ぶ缶切りなどのヤーボも確認。距離は充分ありますが雨が雪が降りそうな雲行きになってきたので十分に警戒してください!』

龍奈『ですよー。』

凧沙『だよー。』

琴音『知ってた。』

武蔵『やっぱり。』

鈴奈『…ですよー。』

ズッキ鈴木『まあ展開的にはそのほうが美味しいよね。』

『まあそうなりますよね。』

安心と信頼のメタイ展開に見事に全員が同じタイミングでハモる。

隊列後尾『お前らハモっている場合か!!隊列全速前進!!対空戦闘!!』

「ハイハイ。隊列、対空戦闘用意。凧紗車は隊列戦闘組の右側に。龍奈車は隊列左に、鈴奈車は私の後ろに移動、展開してください。全兵器自由使用許可、各自対空自由射撃用

意！ずきーは後ろは気にせず加速して！」

鈴木^{ズッキー}『りよー、かいつ！』

段階制御機構によるギア進段が行われ急加速をする。

風沙『了解、右対空戦闘用意だよ。電探連動、弾装填して。』

横に並んだ風紗車の防弾版の隙間から4本の機関砲身が航空機の襲来方向に向けられる。

隊列最後尾『制空戦闘機および局地戦闘機、発艦始め！』

琴音^ト『げー。要らんこと言いやがって……。』

武蔵『…どうする？』

サラトガ『航空隊、発艦はじめ！』

鈴谷（航改二）『鈴谷航空隊、ト連送じゃん！キモいのやつちやえく、いつけー！』

大鳳『さあ、やるわ！航空隊発艦始め！』

琴音『邪魔にしかならんけど、まあいいか…。はあ…。』

大型の弓矢型以外の発艦システムを採用した艦娘が次々に艦載機を放つ。

烈風、紫電改二、強風改、震電が宙を舞い、高度を稼ぐべく上昇する。が、そこまでの距離はない。急降下してきた速度のある戦闘機にすれ違いざま数機が落とされ、苦し

い旋回戦が発生する。

そもそも高高度迎撃用の震電をここで用いるのはどうかと思うが…。

琴音『夜雨、対空射撃はできるか?』

「と、唐突に聞きますね…。やります。主砲照準…きやあつ!」

戦車が窪みに突つ込む衝撃でコマンダーキューポラに簡易展開した右舷艦装砲塔部位がぶつかる。

「アーマーフルオープンこの…。艦装完全展開ロックボルトセット。ワイヤーを車体のフックに固定。脚部アンカーはコマンダーチェアに密結固定。スタビライザー最大!対空射撃用意。弾種対空気化榴弾。左舷砲は進行方向左、右舷砲は進行方向右、C1ws及び高角速射砲は正面!ずつきー、車高下げて!」

ズッキ鈴木『了解!車高下げます!』

艦舷を模した艦装の下面から二本のワイヤーが戦車の履帯シユルツエン下部のフック拘束機にかけられ、電動巻き上げ機で戦車と艦装を固定。さらに脚部艦装から楔が椅子に食い込み足の踏ん張りを補佐する。それが完了したのを確認してから車高がゆっくり下がる。もちろん100km/h近い速度を出しながらである。

琴音『行け武蔵!!』

武蔵『第一主砲左砲、撃え!』

爆炎が紫色の地面ごと砲弾を吹き飛ばす。その反動だけでランドクルーザーが急減速し止まる。そして琴音提督がアクセルをふかして急加速して元の位置に戻る。

「三式弾は敵の隊列の後ろで炸裂。次元調定もつと手前です。…直鞆機が退避しないで撃てないです！はやく退避してよ！」

苦しい旋回戦を繰り返している見方機に敵機が群がっている。このまま撃つたら味方ごと吹き飛ばしてしまう。空母陣も退避命令を出しているが一向に退避する気配がない。

琴音『構わん。警告してどかないやつが悪いから撃つちまえ！』

「…了解。砲g」

武蔵『どきやがれこのクソアマア!!!』ドゴオ!!!

その威力は陸上において弱体化しているとはいえ、腐っても46cm砲である。

そのの斉射を受けて吹き飛ばない艦載機などほとんどいない。ましてや深海棲艦や艦娘の艦載機レベルでは皆無といってよいかもしれない。味方ごと巻き込んだの巨大な三式弾を9発叩き込まれた空域の飛行物体は文字通り紙切れのように舞い落ちる。

「うわあ…豪快すぎる味方撃ち…。」

風沙『うっわwwwwwwやりやがったwww』

龍奈『うわあ…w』

鈴奈『:w』

敵は味方にまとわりついていたら食らわないと考えていたのか、味方撃ちを見て一斉に散開し始める。

武蔵『義理妹^夜やつちやつていいぞ。』

「了解! 試射一発!」

駐退推進(復座)装置と砲身および砲塔の高性能スタビライザーと戦車のスタビライザサスペンションダメ押しの戦車の自重により反動は抑え込まれているためさほど車体は揺れない。

鈴木『大丈夫そうですね。やつちやつていいよ!』

「砲誤差修正自動モードへ切り替え。サスペンションスタビライザーと同期良好。交互撃ち方始め!」

高高度の見方機を追いかけている戦闘機を優先目標として高精度な交互連続射撃を叩き込む。

武蔵電探妖精『正面高角砲射程圏内!』

武蔵『よし、高角砲射:「武蔵、および正面担当の艦娘、車両は統率射撃用意。諸元はこつちから送ります。同期システム起動完了。統率射撃用意! 臨時対空指揮官さん頼みますよ!」:ok了解!』

妖精さんが私の頭の上によじ登り猫耳ヘッドセットにつかまる。

夜雨臨時対空戦闘指揮官参謀妖精「へいへい任されました。対正面統率射撃、諸元算出完了。零式通常対空砲弾および三式通常対空砲弾、遅延算出完了。転送および逐次更新中！いつでもどうぞ！」

…いつの間にも私のヘッドセットのお揃いというか似たようなのが小型化…というか魔改造？されたの…。

「了解。各自で細かい誤差は修正してね。行きますよ。第一次目標、推定進路が線路上のヤーボ！統率射撃開始!!」

約15隻と約20両程から構成される先頭の集団は大量に捨てられる空葉莢を踏みしめながら対空火器の火を焚く。

曳光弾の線が先頭のヤーボと重なった瞬間、左右の翼がもげ、テール部分が粉みじんに粉碎されて空飛ぶ棺桶になり果てる。

後続の期待も統率射撃による分厚く正確な弾幕に突っ込んでいって爆発四散するか、スクラップになり地面と激しくキスするかの二択の道を歩む。

対空参謀「次目標、進行方向右重爆撃機!!」

琴音「俺らも負けてられねえな！」

武蔵『ツシャオラアツ!!』

その間を縫って46cmのシヨツトガン^{三式}が火を噴き落下する機体の残骸や投弾した爆弾ごと消し炭にしてい^弾く。

「次、左上空急降下爆撃機隊。射撃用意。砲身冷却は各自判断で行うように!」

艦娘の25mm機銃などはよく過熱するため適宜に冷却をしないとコックオフなどが起こつて大変なことになる。

初月『夜雨!こつちにも射撃データをくれ!!』

摩耶『摩耶様にも頼むぜ!』

蒸気機関車の排煙まみれになりながら貨物車の屋根や戦車のキューポラに登っている艦娘から射撃データをよこすように言われる。

「対空参謀!あつちにも頼むよ!」

対空参謀妖精「了解。送信中。逐次更新していつてね!」

しかし、敵も複数方向からの同時攻撃のため、正面からの隊の撃墜はできても長い隊列の側面や後方からの機はカバーしきれない。そのため隊列後部では次々に爆弾やロケット弾の直撃、至近弾で撃破されていく。

『隊列後部より先頭。最後尾付近に敵艦載機多数!援護要請!ぐあつ!!』

対空参謀「艦長!隊列最後尾から救援要請!」

「マークスマンとゲパルト、89式高射機関砲各2両ずつ、ソキ4両は隊列後ろの援護を

！風、後ろ撃てる?？」

風沙『狙えるけどちよつと無理!』

「おけ。狙えたら頼むよ!」

風沙『了解: : つと。砲身異常加熱確認、射撃停止! 交換するよ!!』

妖精が砲身4本を外しひっかけに紐をつけて邪魔にならない位置に投げ捨てる。

車外に投げ捨てられた砲身4本は地面で数回バウンドした直後、紐の張力により一定の距離を保ち引きずられる。その間に新たな砲身を取り付けが終わり、射撃再開。射撃中に紐を引っ張り車体後部まで引き上げ拘束する。

琴音『もう少してトンネルだ!!あとひと踏ん張りだぞ!!!』

空襲第一波が去るころには隊列の約半数弱が損傷もしくは撃破されて動けない状態だった。

しかし、奮戦のかがあつてか蒸気機関車は無事深海棲艦に襲われる心配のないトンネルの中に滑り込めた。

「とりあえずトンネルの中で修理してダメそうな奴はここで退路の確保をお願いするしかなさそうですね: :。」

龍奈と風沙がトンネルの入り口で左右にはけて後続車両を中に誘導する

琴音『だな。誘導ありがとう。とりあえず使えないやつはバリケードに、使えるけど動けない奴は固定砲台に。歩兵車両に乗れないのはタンクデサントを頼む。艦載機収容、給油後、対地装備で再発艦用意を急がせろ。：龍奈と鈴木と夕張、そして明石、ちよつと来てくれ。』

龍奈『了解です。』

「：何か企んでいるのですか？」

琴音『なーに。我に秘策ありつてやつよ。』

琴音提督が何か含んだ笑顔をしている時つて、ろくなことがない気がするんですが
…。

1—1—E　　〈台湾鎮守府ノ危機〉

『各戦車隊は任意の目標を狙え!!』

『ティーガー2……ええつとヘンシエル砲塔のほう! そう、そいつを優先的に狙え!』

『空軍の支援はまだか!!』

『手榴弾投げます!』

『グアツ?! 衛生兵!! 衛生兵!!』

『背後に回った海兵隊特殊師団全滅!!』

『T—34—85撃破!』

『KV—2の砲撃が来るぞ!! 伏せろ!!』

『マッマッーッ! ! !』

『弾薬欠乏!! 弾薬欠乏!! 誰か弾もってこい!!!』

『パンター撃破! 次目標!』

『吹き飛ばす四号!!』

『虎だ! クソつ! ! ブロック後退する!』

木曾『提督、木曾だ。こつちの被害は微小。一番被害を受けた長門で小破に届いてない。だが他人間は不味い。』

「よし、回り込んで横から数を減らしつつ後退を支援せよ。……まだまだ、まだ行ける。」

怒号と砲声、そして炸裂音と銃声が通信機から響き渡る。

深海棲艦に包囲されて4日、攻撃にさらされ続けて三日。

そんな彼らに与えられた命令は『どんな状態でも操車場と空軍の基地を死守せよ』。

そんな彼らに最後の時間が訪れようとしていた。

砲弾や燃料の切れた戦車や大砲はただの鉄の塊であるのと同様に艦娘も弾や燃料が切れればただの一般人レベルになる。

……そんな絶望の中、俺は一般市民とお偉いさんと共に地下塹壕から艦娘部隊を率いて何時かは尽きるであろう弾薬、燃料と艦娘の体力を信じ通信機を握り締めているしか出来ない。

……ゴウンゴウンゴウン……キュリギユラキュラギユラ……ブオオオオアアアツ……ガキイイインツツツ!!

「…………なんだ？えらく酷い地響きがするが……」

一両の長方形をした化け物が大破した車両を押しながら少しずつ前進してきた。

『ま……マウス……?!なんでお前がここに……』

さらにその後からひらべったいウスノロがノロノロ追従する。

『おい、ファイティングモンスターって（祖国の）博物館で眠っているんじゃないのか?!?!』

『おいおい紅茶切れにお菓子不足ってか……』

勝手に地上部隊の通信を傍受してて正解だったな。

「おいしいいい?!?!なんて試作っつか、お前ら走れたの?!というか、捕獲したい……じゃなかった！総員、距離を取れ。まずいのが出てきやがった。」

木曾『木曾、了解』

五十鈴『五十鈴隊、撤収します。長門さんの補給用意よろしく。』

「…………提督、長良隊が代わりに出ますね。」

「頼む。…………無理はするなよ。」

通信機のマイクに齧り付いて皆の無事を祈ることしか出来ないなんて、なんて俺は不

甲斐ないんだ……………！提督なのに……………！

ナチスドイツの誇る世界最強の超重戦車の『マウス』。

アメリカがかつて制作したアルティメット正面装甲の『T95 重駆逐戦車』。

ロイヤルロマンのイギリスが制作した『トータス重駆逐戦車』。

そして日本版英国面の塊『オイ車』150t仕様。

そんな変態規格外が各方面から隊列をなして一斉に前進して来たのである。

しかも大体の戦車の弱点、車体下部をきつちりと廃車で隠しながら。

普通の状態ならば簡単に撃破できる車両のはずが、大混乱と弾薬欠乏によりそれらの前進を止めることが出来ない。

防御陣地を構成していた戦闘装甲車が各所から進軍してきた正面装甲ゴリ押しsの徹甲榴弾で吹き飛ばす。

長良『長良隊から提督。さつきよりも敵の数が増えています。この数だと抑えきれません！支援しつつ下がります！』

「なんてこった……これじゃジリ貧じゃねえか。」

『クソ!!下がりながら戦え!!』

『コマンドーキューポラだ。コマンドーキューポラを狙え!』

『Negatived!!! それよりも砲身を狙え!』

『援護をくれー!!』

大混乱に乗じて一斉に深海棲艦歩兵部隊にじりじりと詰めよられる。

1ブロック後退するという苦しい後退戦を余儀なくされる。

『クソ…操車場がすぐ後ろに………ジョンブル魂を見せろ!!!』

『大和魂はどうしたア!!!』

『お前らそれでもアメリカ人か!!』

『に、逃げるニダ!!!』

『履帯だ! 履帯を狙え!』

……

まあこんな根性論が通じるわけもなく操車場…線路の上に乗って侵入を許してしまう。

「ぐ……くそ、ここまで頑張ったのに……。」

長良『長良より提督、重戦車5、中戦車8を撃破。被害は霞と霞が小破。』

「了解、任意のタイミングで離脱せよ。」

『艦娘の離脱を援護する……砲身に手榴弾ならどうだ?……ツアツ!!』

深海棲艦KV2へバッチコイ空砲やで。(鼓膜さん)じゃあの。

152mmの空砲が炸裂し、交差点で近づいてくる戦車を建物の影で待ち受けていた分隊と付近の窓ガラスごと吹き飛ばされる。

その衝撃で天井の一部が崩れ、断片が落ちてくる。

「クソツタレが……」

『敵機襲来!!来るぞ!!!ヤーボだ!しかもエスコート付きだ!』

『対空射撃!対空射撃!!』

6機のドルニエ戦闘爆撃機が緩降下しながら戦車や自走砲を優先的に狙って爆弾を、サンダーボルトの16機1編隊が4機4編隊に別れ柔目標に翼下に懸架されている14発のロケットと機銃掃射を加えて無力化していく。

人間側の深海棲艦に対抗できる火砲や戦車の数がみるみる減っていくため、対抗する火力がどんどん下がっていく。

『やめろおおくるなああああ!!! 回避いいいつつ!!!』
 『お母さアアアンツ!!』

『泣き言いう前に引き金を引けアホ!』

やつとの思いで逃げ延びた歩兵や軽装甲車をめがけてマーリンマスタングが12.7mm×6門のシャワーを浴びせていく。

「クソ、次から次へときりがないぞ……」

長門『長門より各艦娘、一ブロック引い……リラ戦……とりあ……時間を……ぞー!』
 『…守備……ぐ。防……や塹……などに隠……各……ザザ……に……しろ。繰……す。防空壕や塹……隠れ……応戦しろ。少……でも……ガガ……稼げ。援……が……か……いる。時……げ。以上。…武運……祈る。今そ……ザザ……てる。』

「……ちつ、クソポンコツめ。肝心な時に使えないとか役に立たないじゃないか。」ガツン!

あきつ丸「私の中継します、であります。」

「……よろしく頼む。」

あきつ丸「カ号観測機と回転翼機《オートジャイロ》、護衛の一式戦闘機《加藤隼戦闘

隊》三型甲および特三型改二乙改《試作発動機武装換装型》、発進せよ。」

「……マジかよ。まだあったのか。」

あきつ丸「…各4機ずつだけであります。」

『RPG発射！……敵パンターの沈黙を確認。離脱する！』

がれきの中を縦横無尽に走り回り、即席対戦車手榴弾を建物の窓から戦車に投げつけて破壊したり、敵後方に回り込んで輸送車両を破壊したり、中には敵戦車を乗っ取り、敵陣を2, 3個吹き飛ばしたりして暴れまわる。

『擲弾筒命中、敵11号戦車を破壊。』

『RPG装填……狙え！……発射！……命中！敵四号F2の履帯周りを粉碎！離脱する。』

『擲弾筒の弾薬欠乏、離脱します。』

『クソっ……また航空機が来たぞ！隠れる！』

『最後の手段……徹底的に一撃離脱だ……お前ら……死ぬなよ……。』

が、熾烈な度重なる空襲や消耗戦でついに前線を支えきれなくなり、ずるずる後退し始めた。

敵もゲリラ戦で消耗したため、一度引いて体勢を立て直し一気に潰しきる作戦を取るようだ。

『敵航空機、離脱していきます。司令官、今ので第…えつと…今日だと航空だけで5波です。』

『被害甚大！残存兵力わずかです…。』

あきつ丸『ゲリラ戦もそろそろ展開不可能になりつつあります。司令官、どうしますか？』

「そろそろ飯も弾もない…どうする…。」

『…動かせる車両を…いつでも動かせるようにしておけ…生きて帰るためにな…』

あきつ丸『了解……申し訳ありません、無電が混信しているようです。何かおつ

「しゃいましたか?」

「いや、俺は何も言っていないが?……むしろあとどれだけここを守れるかが気になるところだが……どうだ?」

「??? 『守る?何を言ってるんだ?さあ、逃げるぞ。車のエンジンを掛けて市民載せとけ。お前ら!』」

「えっ……その声は琴音提督?!」

――

夜雨 Side

??? 『距離、車両速度、よし。』

??? 『感度良好。艦載機、指定空域を旋回中。』

??? 『……………敵の位置、すべて計算通りです…!』

3つのメガネが太陽の光を背に建物の上から無線を送る。

不思議なことにそのメガネはスカートを身に着けていた。

琴音 『鳥海、霧島、大淀! 中継さんきゆうう!! ツシヤオルア!!! 電気通つてないから信号機消えてるけど高速進行じゃばけえ!!! 行くぞゴルアア!!!』

武蔵 『最高だぜ相棒ッ!』

夜雨 「ひいいい……………下ろしてええええ……………止めてえええ……………」

けたたましい空気警笛とフランジとレールがこすれる音、そして激しいジョイント音と火花が飛び散る。

先頭のディーゼル機関車は遠心力に耐えられず片輪を浮かし、脱線しながら追従する戦車に乗ったトレーラーを引きずりながら制限速度を大幅に超過した速度で曲線を突っ込んでいく。

「こんなの…聞いてないっ…」

そりゃいきなりディーゼルエンジンの入ったボンネット（ほんなところ）の上に立たせて防壁を貼って防御よろしくって言われても…。

鈴奈『…いい風…』

龍奈『計算通り。曲がれましたね。』

風沙『ひやあー風が気持ちいい！』

夜雨「お前らあああ…うわああ、落ちるって…揺さぶらないでえ…おえっぷ…」

制限速度をガン無視して曲線に飛び込みそのまま加速しながらコーナーから脱出するため、鋼鉄の鉄路と戦車を固定するワイヤーが遠心力で軋む。

武蔵『戦車ごときが最強の装甲と主砲を誇るこの大和型の攻撃に耐えられるかな？ 連結解除!!』

龍奈『了解、ジョイントロック解放！連結テコ解放、解錠確認。連結開放確認。風っちゃん！制動開始!』

風沙『制動開始ようそろー。制動最大ー、今!』

夜雨『ひいひいひい…』

ディーゼルの後ろにつながれた車両が切り離されデツキハンドブレーキにより火花を散らしながら減速、距離を十分に取る。

その間にも琴音提督はマスコンを押し込み続け、エンジンをふかせながらコーナーから立ち上がる。

琴音『大和魂っていうのはこうやるんだよ!!ちゃんと見とけよ腰抜け群体風情が!!!!』

武蔵『☆と☆つ☆げ☆き☆』

「うわあああああ……た、助けてえええ……おろしてえええ……。」

武蔵『ん？寝言は家に帰って寝てから言えバカ義理妹。』

戦車は超高速の砲弾が飛んでくることを想定していても、100km/hを超える速度で約7万トン相当の物体が突っ込んでくることを想定して作られたものは無いといつても過言ではない。

そんな物が突っ込んできたら木っ端微塵になることは誰が考えてもわかることであろう。

ならばと機銃や火砲で迎撃し、あわよくば進路や姿勢を変えて共倒れにしようと咆哮を上げる。

武蔵『ほれ、出番だぜ。』

夜雨「ひやいいいい!!」

薄紫色の防壁が目の前で形成され砲弾が擦れて火花を散らす。

少しでも防壁を張る角度を間違えると衝撃で吹き飛んでTHE ENDという長い長いサドウンデス。 10秒が1時間とも感じられるような長い長い弾幕の回廊をくぐり抜ける。

榴弾でレールを吹き飛ばし、進路を変えようとした戦車もいたが、狂った速度で突き進む鉄の塊はその動きを止めなかった。

武蔵『つしや行くぞおお!!慣!性!解!放っ!!』

夜雨「防壁、部分展開モード…に切り替え…今っ!」

防壁の隙間をすり抜けて武蔵が伸ばした手に触れたマウスが、オイシヤが、ファイティングモンスターが、トータスが、激しい衝撃音とともに紙くずのように潰れ機関車と同じ速度で等速直線運動を始める。

武蔵『おら 吹き 飛び べ!』

夜雨「し、シールドフレア!同期します!」

肩部左右の外側砲門から放たれた二発の46cm砲弾が戦車砲塔内部の弾薬や砲閉鎖機等を吹き飛ばしながら四両とも貫徹。

気動車の左右で爆発する。

武蔵『ふん!ざつとこんなもんよ!!琴音!こいつを止めるぞ!!』

琴音『合点承知の助!!最大制動!!』

「架線柱にぶつかりゆううう…!!!」

頭上すれすれを架線柱や架線、銃弾や砲弾がすり抜けていく。

武蔵の高角砲と機銃がポイントを攻撃で巧みに切り替え、時には破壊しながら右に左にバリケードとなっている貨車の間を縫うように突っ走りながら花を散らす。

琴音『機関停止、最大制動!』

武蔵『全砲門、てえ!!!』

砲撃の反動で急減速するが、距離が足りないため止まり切れずに緩衝器へ衝突。

私が衝撃で吹き飛ぶことはなかったが機関車のボンネットと車止めは見るも無残に粉々に粉碎された。

「ふう……や、やつととまった……」

元の面影が残っていない気動機ディーゼル機関車だったものを見ながら地面にへたり込む。というか、足が……がくがくでいうことを聞かない。そのため、意地で立つことをしようとしても体のほうが重く何かに掴まらないと立ち上がれない。

琴音『怪我はないか？夜雨。とりあえず、誘導とかテキトーに頼むで。行くぞ武蔵!』

武蔵『つしや任せろ!』E. 装甲車(右手のみ)

「は、はひ……え、えと……戦車隊は下車して突撃開始。後続部隊は退路確保を!」

鳥海『各自左舷側に下車!前線を支援!撤収準備!!』

サラトガ「WOW! this is Japanese KAMIKAZE ATK

?」

「ち、違うと思います。あ、空母の皆さんは航空機発艦！制空権を維持をお願いします。一般市民を優先的に貨車に乗せてあげて！」

後続していた貨車が完全に停止をしたのを確認し拘束安全装置を解除。同時に戦車のロックが全て外され、乗降用車両タラップが降りた。

リードの外れた狂犬共…燃料弾薬が満載された戦車が走り出す。

それに合わせて爆弾を抱えた味方攻撃機や戦闘爆撃機が低空を縦横無尽に駆け回り、敵戦車の上にロケットや爆弾の雨を降らせる。

「ずっきー、左超信地旋回後前進微速。こつちに寄せて。情けないことに足がね…wあ、衝撃注意でお願い。」

鈴木『了解です。よっこいしょ。…あ。』ガコンツ！ドンガラガツシャーン……

「あ……」
約80トンの重量に貨車が耐え切れず、鉄の車輪や軸受けごと粉碎、破片をまき散らす。

「…あちゃー。」

鈴木『すいません…。まだ慣れていなくて……。』

「まあ、あんまり気にしないで。予想通りだったから。」

龍奈「とりあえず、行きましようか。はい。手を貸しますから早く乗ってください。艦長。」

「サンキュ。んじや、行きますか。艤装完全展開。ロック固定…完了。回路接続…電気送受確認。エンジン停止、動力伝達確認。市街地装備フルパッケージ展開確認。HEAT対策フェンスシールド装着確認。対物バンパーへの障壁干渉確認…よし。戦車前進！」

ズッキー『了解。戦車前進。』

龍奈「通信席借りますね。」

「了解ですー。」

履帯が軋み、フルアーマー^{零式試作高機動重戦車}へビイタンクカスタムが動き出す。

「そういえば提督、この後どうするんです？」

琴音『後続のあいづら^{ランカー提督s}か廃課金提督^{大本営直営直属艦隊}が何とかしてくれるだろ。』

た、他力本願過ぎる…。

1—1—F 撤退戦

あきつ直轄指揮機、一式戦闘機試作発動機武装換装型特三型改二乙改隊長機妖精side

「……高度3500。上昇完了。戦闘時以外は各機最低でも高度3000を維持。特式発動機の出力及び回転数良好。過給機の過給圧力安定。よし、いい子だ。」

一式戦闘機隼。運動性は零式艦上戦闘機より劣るものの良好な拡張性や対弾性、上昇力など軽戦闘機としては優秀な性能を誇る。そんな隼だが、武装と発動機エンジンの出力不足だけは改善できなかつた。

で、その弱点を克服するために新設計試作型の発動機に式段式速の過給器スーパーチャージャーと排気圧式過給器及び水メタノール噴射機構を搭載したゲテモノ。機体と翼もそれに合わせて新しく設計し直し、より広範囲の空域での戦闘に適した形状になつた。

余剰出力分で防弾装備の増設及び機体の強化、一部新作で作直し、重量増加に耐えるために脚の耐久力向上などのかなり大規模の改装になつた。

武装も従来の機首12・7mm機銃×2丁に加え、新型翼内に12・7mmM2ブローニング×2丁、大型落下式機関銃懸架筒ドットに20mmイスパノMK・II×2門、20

mmマウザー砲×2門＋ロケット推進器、しかもロケット推進器はPON付けかつぶつつけ本番いう（つぎはぎだが）化け物仕様である。

そしてそんな化け物を操るのが熟練オブ熟練。ベテランの中のベテラン。飛行機乗りの中でもトップエリートの中のエリート。

（移動を含めた）飛行時間だけでも軽く一万時間を超える対深海棲艦戦争初期からの最古参組。さらに空中戦闘のスペシャリスト揃い。

「……完全に隼ではないよなあ。こいつ……発動機も機体も違うし……」

二番機妖精『隊長？何寝ぼけたこと言っているのですか？隼からできた立派な軽戦闘機。つまりは隼であります！（mk. 2かもだけど……）』

三番機妖精『蛙の子は蛙。隼の子は隼であります。（バージョン2とかMK. 2とか4型とかになるかもだけど……）』

四番機妖精『そういうのは興味無いけど多分……隼や……と思うで。』
「……（お前ら……）……。ところであきつ丸、あいつらはどうした？」

あきつ丸『今高度20000で上昇飛行中。味方機としてSpitfire Mk. XIVが4機一編隊ほど来てくれるであります。そろそろ接触するかと思っております。』

「…噂をすればなんとやら。ありがとう。」

スピットファイアMK・XIVe…この編隊…。

こいつら、機体がワンメイクだけじゃない…。

二番機はシーファイア…多分F・Mk・XVかf・17…。

三番機は高高度用Mk・23ヴァリアント…。

四番機はスパイトフル仕様…か…。

…良くも悪くも寄せ集め…こいつらは生きて帰れたら御の字、か。

さて遺書でも書かせ…いや、いいか。最悪こいつらの盾になってその間に逃げてもら

えばいいだけだし…。

グリスピ妖精A『Sorry! お待たせいたしました! O s c a r^{はやぶさ}編隊の右斜め後

方に着きます。』

「…了解。別の隼隊との二編隊による八の字索敵周回飛行に入るが…。」

グリスピ妖精A『その必要はないようです。隊長、哨戒中のPBYカタリナ飛行艇か

ら伝聞！敵F4U編隊、正面下方！敵数32！護衛のP-51《マスタング》、正面やや上数20！良し、お前ら行くぞ！」

あきつ丸『…割り込み失礼。F4Uは海軍の岩本五二隊が受けるそうでありませう。P-51のほうを攻撃してほしいであります。味方の対空砲火と空中衝突に注意する必要があります！』

「…了解。加藤隼隊は迂回上昇し攻撃せよ。我々は突き上げからの一撃離脱戦法を取る。」

加藤『加藤隼隊了解。迂回上昇します。どうか御武運を！』

グリスピ妖精A『ヘッドオン勝負だぜ！ブーストオン！上昇！』

2000馬力越えのグリフォンエンジンが水メタノール噴射を得てプロペラが空気を後ろに押し流す。

「…流石マーリン・グリフォンエンジン…。量産と基礎技術力ではかなわない…。さて、我々も追いかけるか。各機上昇。」

目一杯スロットルと操縦桿を引かれた機体はプロペラを天高く掲げ青空を駆けあがる。

「…高度4000。各編隊機へ。排気過給機接続。始動……。」

速度計の横のつまみのスイッチをON側に動かすと、酸欠で息切れしかけの発動機に

直結された排気過給機が回り始める。それにつられて上空の薄い空気が圧縮されて吸気口に掻き込まれる。

それが隼の心臓となり魂の鼓動の咆哮となり、排気口からロケット排気管を振動させて重力に逆らう唸りに変化する。

「…僚機異常なし、過給圧安定。梶感度良好。…ぐうっ…。」

レバー操作と応答にラグのある典型的なドツカンターボのパワーで生じた慣性重力に抗いながら機体は一気に加速する。

グリスピ妖精B『編隊長。流石にこの角度で登ると高高度性能とパワーのないO s c a r 隊の援護が受けられないのでは…?』

グリスピ妖精C『いや、ついてきてるぞ。』

グリスピ妖精A「ついてきてもらわなきゃ困る。おっと、マスタングはつり上げか。下から思いっきり腰の入ったアッパードで突き上げるぞ!」

マスタングは高度優位、つまり位置エネルギーの優位と自機の高高度性能で戦おうと上昇する。それにまんまと飛び込む形でグリフォン・スピットファイアが追従する。エンジンパワーと機体のエネルギー保持率にものを言わせて二つの編隊の高度がどんどん跳ね上がる。

「…つり上げか。…高度6500。…各機「特液」噴射開始。フラップ位置を2に…。呂
 型特集補助推力機構作動…〔…発動機、過給機、^{フルブースト}全開〕…い!」

計器の一番左に取り付けられたWEP…最終緊急出力のボタンを押し込む。

とある北の提督直々の指示で取り付けられたドロップガンポッドの後部から一筋の
 炎が漏れて空気が切り裂かれた。

その炎は圧倒的な前への力でガンポッドとその本体の隼を引っ張る

グリスピ妖精D『お、おい! Oscarの排気管から薄黒い白煙がでてるぞ!』

グリスピ妖精C『摩擦熱でガンポッドが燃えてるぞ! Oscar隊! 水平飛行に移れ
 !!!ガンポッドから火が出てるぞ!!』

グリスピ妖精B『やばい、あの燃え方はエンジンが逝く・・・。』

排気圧式過給器と過給機のダブルパワーで空気が断熱圧縮された時に出了た爆熱を空冷と水エタノールでは冷やしきれず、気化したエタノールが排気口で空中の酸素と反応し、淡く赤い炎と白煙を吐きながら機体を焦がし空を舞う。ガンポッドの後部の炎：使い捨て個体ロケット推進により空気力学とエンジンパワーを無視した急上昇のおまけつきで。

「……稼働良好。…高度7500…。…いつけええええ!!!」

ほぼ垂直に近い角度まで引き起こし、グリスピ4機を軽く抜き去った。

そのままスタング編隊の顎下から腰の入ったアッパーカットのごとく、必殺の20mm×4門の鉄機銃弾の雨が一齐に放たれた。

完全な不意打ちで数機のマスタングをたたき落とす、格闘戦やエネルギー戦で優位に立っていたグリスピ／新型隼編隊だが、グリスピはマーリンエンジンの燃費の悪さでこれ以上の継続戦闘が出来ないため、護衛の僚機を2機ほどつけて戦闘空域から離脱して行った。

それに追従する形でマスタングが降下。隼は軽戦闘機ゆえの軽量ボディのせいで追いかけるもダイブ速度が上がらず遂には突きはなされてしまった。

「…追撃中止。…僚機、残弾は？」

『ガンポッドはほぼ空っぽ。機体内部は使ってません。』

「……………了解。……………2機しか残っていないのはまずいな……………加藤隊はどうか？」

加藤『我々の隊は過半数が弾切れです。』

「了解。基地航空、そちらにグリスピを追いかけてマスタングがダイブして行った。注意されたし。我追従するも追い付けず。…加藤隊は距離を置いて索敵、追従されたし。」

加藤『了解。各機我に続け。残弾のある機は周囲を警戒せよ。無い機体は離脱し基地に帰還せよ。』

あきつ丸『了解、緊急着陸準備完了であります。こちらは援軍が来て優勢になったであります。海軍の飛行機も意外とやるでありますな。』

「……そうだな。」

――

夜雨Side

琴音『ラストの民間人が乗り込み完了！行け！行け！！』

あきつ丸『見送り感謝であります。では後ほど。上空機へ。こちらの任務は終了したであります。各自の任務を各個に遂行するであります！報告は後でまとめて受けるであります。ではご武運を！』

先頭の機関車のディーゼルエンジンが唸りをあげて動き出す。つい2時間ほど前ま

で包囲され、集中砲火にさらされていた一般市民や基地や戦車隊の殆どが包囲の外に脱出させることに成功した。

残りは私たちと琴音提督、武蔵。後少数の艦娘と国連軍隊。

最後尾の機関車のディーゼルエンジンも先頭に合わせて黒煙を噴き上げ、最終便がゆつくりと前進していく。

「……何とかなりましたね。後は可能な限り時間を稼いで逃げるだけです。」

琴音『夜雨！ラストオーダー。時間稼ぎしながら撤収！』

「了解。……っ、左にKV2角待ち！停車！」

ズッキー『了解、停車します！』

履帯が軋み80ト越えの巨体が地面にめり込み、アスファルトを粉碎しながら止まる。

KV2の砲手は急停止に合わせられずに発砲、目の前を152mm砲弾が横切り右側の壁に穴を穿ち吹き飛ばす。

「前進！戦車砲、撃て！」

127mm砲弾をもちに受けたKV2の砲塔正面装甲が耐え切れずに粉碎され、その中にあつた弾薬にめり込んだところで信管が作動し爆発：行き場のないエネルギーは砲

塔を真上に吹き飛ばす力となりKV2の砲塔がロケットのように発射される。

琴音「待たせたな。とりあえずひとつ走りして市街地の中は大体確認してきたが誰もいなかったぞ。」

機銃弾で穴だらけになった装甲車を駆る琴音提督と武蔵が装甲車を乗り捨てして砲塔に乗り込んでくる。

「待つてないですよ。とりあえずそれ爆破処理が終わり次第全速前進!!前方のバリケードは強行突破します!」

ズッキー『了解。』

琴音「しつかし、軍用農道のランエボの異名は伊達じゃなかったな。ありがとさん。」
武蔵『爆破粉碎!せいやあつ!!』

46cmの榴弾が装甲板を粉々に破壊し、さつきまで元気に走っていた車両の面影を残さない…地面ごと耕して更地にするレベルの威力で吹き飛ばす。

「…oh…。」

ズッキー『そろそろ出発します。琴音提督はタンクデサントで…?』

琴音『いや、座席変われ。おい嬢ちゃん。これの操作はマニュアルか?』

龍奈『いえ、原則はオートマですがマニュアル操作もできます。操作はだいたい車、拳動はキャタピラ車と同じです。』

「琴音『了解、……夜雨、指示を頼む。武蔵はタンクデザントで夜雨の補佐を』
ずつきー『へいへい。すぐ出ますね。』」

武蔵『合点承知之助!』

「了解。……戦車前進。」

エンジンを吹かして急加速し慣性の法則を利用して戦車の前側を浮かせ、腰より少し低いくらいの土囊バリケードの上に履帯を乗せる。

「琴音『つしよ。案外動作は軽いな。どれ』」

アクセルペダルを踏みこみ続ける。空冷ファンと推進用のモーターが吠える。

バリケードを削り、中の大砲を体当たりで吹き飛ばし、80トの巨体がまるでスポーツカーのように舞う。

夜雨「琴音さん、後ろにM18ヘルキャットGC!」

「琴音『りよーかいつ!』」

ズッキー『後ろからM18猫が…1: 2:… 3:… 4?とりあえず4両ぐらい。そ

の後ろにT-34!数不明!敵発砲!』

「そのまま直進!こっちで対応します!防壁展開!」

薄紫の防壁に突き刺さったAPCBC低抵抗被帽付徹甲弾が炸裂し、表面が焦げるものの、中までダメー

ジが入らない。

これなら大丈夫…

武蔵『…砲塔後部から失礼するゾ…自分砲撃いいっすか？』

「どうぞで。……つて、武蔵…もしかして46cm…？」

武蔵「…どっせい！」

「のわっさあー！」

46cm砲の反動を殺しきれず、車体が前につんのめる。

当たれば必殺の46cmだが、足場が悪い状態で撃っているためたならめな方向に吹き飛ばか壁に突き刺さって建物を消し炭にしている。

…私はコマンダーキューポラからふり落されかけた。アンカーで私と車体を固定しなくては…。

武蔵「流石に当たらんか…。」

「当たるわけがなさそうですね…。火力に任せた消し炭式攻撃もいいですけど…。あ、
琴音提督、小刻みに左右に揺らして煙の拡散の手助けをお願いします。煙幕^{スモークスクリーン}用意。」

次左！」

琴音『了解くとりかーじ！』

サイドスカートとシウルツエンギリギリをガードレールがかすめていく。その距離

わずか2 cmと離れていない。

ズッキー『スモークアイセンサー煙幕展開用意完了!!』

「右折!その次のT字路は左!煙幕発射!」

琴音『了解。おもーかーじ!』

ズッキー『スモグレをPON!』

小さなロケット弾が空中を飛翔し、視界を覆いつくすほどの煙幕の回廊が生成される。

「電探作動。距離測定。 : : 3・2・1!」

琴音『ギリギリ行くぞ : : 今ア!取り舵いっぱい!』

履帯がきしむ音とともに車体が横滑りしながら壁に車体をこすりつけるようにT字路を左に曲がる。

「武蔵さん、砲撃用意!弾種榴弾!地面ごと吹き飛ばす感じで3・2・1・今!」

武蔵「バッチコイ!!」

夜雨たち（厳密な意味で言うならば電探で見ていた夜雨は除く）は煙で一切見えなかつたが、流石腐つても（とどうか当たらなくても）史上最強のバケモノ砲。そんな砲弾がヘルキヤット4両と後続のT—34数両が壁に突っ込んでクラッシュしたところに直撃。まとめて蒸発させていた。

—
—
—

ズッキー『ビューティフォー。追ってこないっす。…絶対ミンチよりもひどいっすね。』

琴音『だろうな。とりあえずこのまま合流地点まで突っ走っていくか。』

武蔵『せやな。』

龍奈『ですね。』

「とりあえず…可能な限り集合地の高雄まで急ぎましょう。あんまり時間がないですし。」

1—1—G
撤退戦2

隼三型改二乙—改隊隊長『…交代機の空域到達を確認。隼隊、燃料枯渇にて帰投する。……たった2機だけですまない……。』

疾風隊隊長妖精『遅くなりました。ヤミネ鎮守府直属指揮下の第二飛行中隊疾風飛行隊先陣機、ただいま到着です。隼隊の……お二人さん、お疲れ様でした。道中気をつけてください。後続機は逐次空中哨戒にあたります。万が一の急襲が起きた場合は追加直掩機の五式戦闘機が、迎撃機／要撃機として呑竜、屠龍、焰龍、破龍、五式襲撃機（五襲龍）、雷電後期生産型、紫電改が発進／待機中です。』

爆装飛燕隊隊長妖精『同じく燕《つばめ》241—1番連合飛行旅団、アズサ鎮守府直属指揮下の第一飛行中隊全機、お嬢様方に楯突く者を消し炭にする覚悟です。……追加で韓国と中国とアメリカの海軍航空隊が今索敵飛行を行いつつなんとやらだそうです。飛行中隊、隊長機から装甲空母瑞鶴及び翔鶴へ。接触成功、我護衛任務ヲ開始ス。噴進発動機ノ発艦準備ヲ希望ス。以上。』

琴音「『ついいに出てきたか、北の化け物鎮守府と装備の化け物……。』」
 夜雨「……?よくわからないですけど……爆装飛燕ひえん後期型に四式戦闘機疾風はやて……ね。私達のためにありがとうございます。隼隊のお二方様、直掩ありがとうございます。大いに助かりました。」

琴音「『お疲れちゃーん。着艦……いや、陸軍だから基地に着陸かな?とりあえず、帰投するまでが戦闘だからな。気をつけろよ。』」

特式隼隊長「『……了解。ありがとうございます。……あきつ丸直轄陸上機なのでどちらでも正解です。……では、どうかご無事で。』」

四式戦隊長「『……僚機へ。指定空域に到達後、高度4000〜6500で周回待機。』」

琴音「『隼も飛燕も疾風も僚機のやつも連れて後で俺のところで来いよ!お酒飲もうぜ!』」

隼隊長「『……そんなに飲めないけど邪魔させてもらいます。……付近に敵機、敵営、敵姿無し。道中大雪の所あり。注意されたし。以上。……懸架銃を投棄。離脱する。』」

四式隊長「『了解。貴官の任務を引き継ぎます。、お嬢様、のエスコート、開始します。』」
 爆装飛燕隊長「『了解。こちらは先行して低空対地索敵をします。見つけ次第問答無用で250kgをぶつけます。』」

『……ガンポツ……投棄……破壊……か……認……。』

ガンポッドを投げ捨てた直線の美しい翼を陽の光に煌めかせ、洋上へエンジン音を轟かせながら夕日の彼方へと飛び去る。

爆装飛燕隊長『……………追伸。追加装備を『2名様と1台分』準備中。後続の陸攻にて運搬す。以上。』

琴音『追加装備……………んだそりや？（まさかとは思うが……………）』

龍奈『……………心当たりは無いのですか？』

琴音『……………いや、あるにはある。ただ、あれは失敗作って言った気が……………』

夜雨「よく分からないですけど……………あ、……………雪……………。また降ってきましたね。琴音提督、この先から結構積もってるので気をつけてくださいいね？」

琴音「了解、しっかり冷暖房付きで椅子のクッションもよく効く。座る姿勢もしんどくない。コイツは快適だな。愛車に1両欲しいぐらいだ。」

武蔵「おう夜雨、話してる時にすまんがちよつと中に入れてくれ。腹減った。」

夜雨「はいはい。とりあえず艀装閉じてください。」

キューポラから足を投げ出し砲身に跨るように座る。

武蔵「さんきゅ。お邪魔します。」

……豊満な二つの丘がつつかえてなかなか入らないみたいですけど私は何も見てませんよ……。なにも……。

龍奈『……うつ……いえ、大丈夫です……。とりあえず砲手席が今のところ一番広いので、そちらにどうぞ。ベーコンエッグハムサンドです。それとココアもどうぞ。』

武蔵『……助かる。いただきます。ん、うつめえ！誰が作ったんだこれ？』

琴音『俺だ。流石だろ？』

武蔵『流石我が永遠の相棒だぜ！』

琴音『どやあ！つか、俺も食べるからくれ。』

武蔵『あいよ、ほれ、口を開けろ。』

琴音『ん、……んっ……。ぬ……。流石俺。何時食べても美味しい。』

→戦車の中に甘ったるい空気が蔓延中→

夜雨（……なんだろう、この……。うーん。複雑な感じですね……。）

龍奈（……とつとと永遠の愛を誓って爆ぜろリア充……。）

→※こいつら夫婦だいい加減にしろ

ずつきー（……き、気まずい……。）

爆装三式戦闘僚機『……お取り込み中失礼。この先不自然な複数の倒木あり。人為的に折られた物と断定。判断を仰ぐ。』

夜雨「……！倒木だそうですけど……迂回しますか？」

琴音『……なんか畏くせえな。一本だけ転がつてる木を弾いて森の中入るわ。』

夜雨「了解、直掩機各機へ。進路変更します。」

一番手前にある倒木を横滑りしながら弾き飛ばし、森の中の獣道に木をなぎ倒しながら突っ込む。

へし折られて弾き飛ばされた倒木は落とし穴トラップの上にハマリ落下。さらにその上から木の上にしたま溜まった雪が降ってくるトラップが発動。

ずつきー『わーお……。』

四式戦闘僚機『発見した三式戦闘機へ。見事なり。大戦果だ。』

夜雨「ナイスです。」

琴音『ないすう（ないすう！）』

夜雨「雪まみれにならなくて済みましたね。とりあえず木はある程度こつちで薙ぎ払っておきますね。」

琴音『いや、不要だ。……お、こんな所に線路が。とりあえずちよつくら線路走るか。』

夜雨「了解、……直掩機各機へ。この先トンネルの中に入ります。通信途絶した場合
は出入り口付近で待機をお願い致します。」

爆装飛燕『了解。先行して安全確保をします。』

疾風隊長『了解、こちらは制空権確保の確認を行います。』

一式陸上攻撃機隊『……割り込み失礼。我装備運搬中。投下目標を指示せよ。』

琴音『この先のトンネルの中、ピンポイント。』

???『了解、周囲に注意しろよ。3. 2. 1……スタイリツシュポイ捨て！ イツちやつてー！』

四角い箱が三つ、3機の一式陸攻の腹に括られていた。

無理やり括りつけていた紐が順番に解けて落下傘が開き、拘束具の隙間を抜けて重力と空気抵抗によってトンネルが開けた口に吸い込まれるようにその三つが滑り込む。

下方向への重力には何故か使い捨てロケットによる減速という謎に凝ったギミックで衝撃が皆無という点について、私は理解ができないですけど……。

琴音『お見事。帰路に注意されたし。』

??? 『仕事は終わったから沖合にて待つてるみよーん。オートジャイロとかその辺は進行方向へ配置しておくお。じゃあなの。ノシ』

琴音『……相変わらずの奴だな。一応、出口は雪で塞いでおくか。夜雨、榴弾で雪崩を起こせ。』

夜雨「了解、HE4発、近接信管モード。トンネル上部の木。逐次薙ぎ払え！」

琴音『全速前進ーようそろー』

ーーー

真つ暗闇の中、戦車の前照灯と手持ちのライトでさつき落とされた謎の物体三つの開封作業をしている。

琴音「夜雨、探照灯の点灯よろ。手元が見えん。」

夜雨「了解、ライトつきますねー。」

琴音「なんだこれ……」

龍奈「翼と……エンジン？あ、取扱説明書見つけた。ペンライト貸してください。」

武蔵「こつちの箱のは薄いけどデカいな。……スキー板かこれは。なんか戦車の下に引けるなことを書いてあるが。」

ずつきー「とりあえず付けてみます？」

龍奈「ですね。とりあえず使い方がわかるのからやって行きましょう。ずつきー、戦車の下に入ってる。」

ずつきー「な、なんでですか?！」

龍奈「あんたが一番ちっちゃいからよ」

夜雨「サイズの問題ですねー……」

琴音「仕方ないね。」

ずつきー「アツハイ……（自分だけ妖精サイズえ……）」

ずつきー「こつちの金具の接続はOKです。」

龍奈「こつちもOK。……ピツタリね。寸分の狂いもなく。」

琴音「……流石だなアズサも。」

夜雨「その、アズサ、っていう人はどんな人なんです？ずつと気になってるんですけど……」

武蔵「マッドサイエンティスト（？）な提督だ。後、効率的な装備の使い方とか色々自分の身を使って調べてる変態。おまけ程度でロリコン。」

琴音「まあ、提督の仲間ってことだ。ロリコンだけど。次、なんかよくわからんウイングとエンジンの取り付けなんだが……どうなんだ？戦車に空力パーツとか意味わからんぞ？」

龍奈「んーとですね、夜雨、ちよつとこつちに来て立っててくれます？」

夜雨「いいですけど……何するんです？」

龍奈「いいから。ここに立って？」

龍奈が指し示したのは機材の入った箱の上……

夜雨「え、……これ、乗って大丈夫？」

龍奈「大丈夫大丈夫。取説にもそう書いてありますよ。」

夜雨「ま、まあ、それなら……………ヒッ!!」

ガサガサガサガサガサ…………モゾモゾモゾモゾ…………

夜雨「は、箱!動いて…………ツ!触手ツ?!」

私が両足を箱の上に乗せた途端にその機会が芽生えた。いや、コードやケーブルが私の艀装に絡みついてきた。後脚とか腰とかにも。

龍奈「わー、すっごいです…………。艦長のあられもない姿…………//////」

夜雨「誤解をするような言い方をしないでいいから助けて!!!」

ずつきー…………(ポカーン)

琴音「…………ほう。思ったより胸はちっちゃい、と。」

夜雨「ば、バカ…………//…………じ、ジロジロ見ないで…………////」

うねうねうねうね…………。

配線やケーブルにより艀装と翼やエンジンのなサムシングがドンドン艀装に絡みついてくる。

夜雨「ヒイヒイヒイ…………!!!気持ち悪い気持ち悪い無理無理無理無理無

理
イ
イ
イ
イ
ツ
!!!
」

＼ブツピガーン!!!
／
＼ブツピガーン!!!
／
＼ブツピガーン!!!
／
／

夜雨「……ンヒイ……ハアハア……ツ……気持ち悪かった……。」

謎の機械「……というか、こいつ……何……。」

脚に折畳まれた肩ぐらいまでのサイズの翼、あと良くわからない噴出口が艤装下部にくっついていた。

……機能面と取説までご丁寧に表示して頂いてどうもありがとうございます本当に視界の邪魔です。

龍奈「……なんか、思ってたのと違いました……。」

琴音「……そいつは同感だな。」

ずつきー「思ったよりもダサイ……。」

夜雨「……否定出来ないのが辛い。」

武蔵「てことはこれは私のか。どれ」

＼ブツピガン！！！！／

＼ブツピガン！！！！／

＼ブツピガン！！！！／

＼ブツピガン！！！！／

武蔵「……案外悪くは無いな。で、これどうやって動かすんだ？」

龍奈「えーっと、『展開時は一定以上の速度になると地面効果で滑空が出来るそう
す。あとその時に主砲を撃ったら吹っ飛びます。だから撃たないでね。』と。以上。」

武蔵「……ゴミだな。せいぜい追加装甲として使うか。」

琴音「まあ、戦車こいっのエンジン部分のガードとしてなら必要十分だろ。」

龍奈「ちなみに艦装に付けっぱなしのパッケージ装備なので、取り外しは出来ませ
ど……まあ、付けっぱなしの方がいいかと。」

夜雨「あれ、私のと武蔵のとでちよつと違うんですね。翼の部分が上に跳ね上がって
なにかの噴出口？に似たような物が地面に向くみたいですよ。」

龍奈「ジャンプブーストとウォークアシストですかね？武蔵さんにはついてない機能ですけど……。」

琴音「何その無駄な機能。地味にかっこいいんだけど。」

武蔵「羨ましいぜ。」

ずつきー「そろそろ行きませんか？あんまり上を待たせるのは宜しくないかと思うんですが……」

琴音「せやな。とりあえず夜雨は前を照らしてくれ。ゆっくり移動しよう。」

夜雨「了解。」

ー

夜雨「……この先は蒸気機関車がいい感じに塞いでいますね。琴音提督、停車お願いします。」

琴音『了解、シエイ式のD型とはこれまた珍しいな。脱線してるけど。』

シエイ式蒸気機関車。普通の蒸気機関車とは違い歯車を積極的に使った型式の蒸気機関車で動く機関車である。

ずつきー『この型式の最大の特徴は、蒸気ピストンが一番前の車輪の左右ではなく向

かって右側に集中的に付いていることですね。そしてそれを回転運動に変えてユニバーサルシャフトと傘歯車で車輪に伝達するシステムの『歯車式蒸気機関車』の代表作のうちの一つですね。んでこの型式だと……』

夜雨「……あんまりメタ発言したくないんですけど、本編に関係ないので解説はこの位でお願いします。」

ずつきー『そんなー!』

龍奈『生で見たのは初めてですね……。』

ずつきー『とりあえずある程度自力で動くかどうかの確認をしましょう。動かなければ最悪押せばいいですし……。』

武蔵「よっこいしょ。復線完了。いやー、思ったよりも重いなこれ。炭水車はちゃんと乗ってるから大丈夫だな。」

龍奈『とりあえず……仕事が早いですね。潤滑油が必要そうなどころには注油してきましたんですけど、油どこだっけ……。』

ずつきー『oh(・ω・)……燃料あるかなあ……。』

私のやることがないようなので周囲の確認でもしましょうかね…。…あれ？気配と人数が合わない…………？

…………とりあえず今の人数を数えてみましょう。

私、龍奈、ずつきー、武蔵、琴音提督、あとの2人…………2人？いや、もつと居る。とりあえず一番近い二人と、点検用通路側から誰か数名…………

武蔵「？どうした夜雨？とりあえず脱線してるから線路に戻したんだが、なんか問題あったか？」

夜雨「…………誰。その蒸気機関車の炭水車の中にいる『子』は？」

???「…………ヒツ…………」E・リボルバー銃

武蔵「出てこい…………!!」ムグモゴ

琴音「怖がらせてどうする。嬢ちゃんすまねえ。俺らは少なくとも敵ではない！」

武蔵「スマン…………」

ずつきー「あのー、現地民の少女二人…………多分姉妹ですよ。一人は寝ています。あと、私のことが見えるみたいなのですが…………」

た。C I W S を量子化格納庫し、後ろ向きに引っ張られながら新しい装備の電源を入れ

— — —

1-1-H
〈撤退戦3〉

暗闇の中。時折履帯と鐵路が擦れて火花を散らす光を取り残して100t近い金属の塊が出口を求めて爆走する。

「……まだ追ってきてますー！」

面倒なことに、防壁を張り35m砲弾を適当にバラ撒きながらトンネルの中をひたすら爆走する私たちに離されることなくきっちり追いかけてくる……カーチエイス洋物映画のようなテンプレート展開になってしまった。

……というか、当てないようきそれでいてちゃんと狙っているように撃つのは一苦労ですね……。……高値の高貫徹系弾じゃなくて安価な曳光弾と榴弾のベルトを使つて良いのはせめてもの救いか、はあ……。

??? 『待てゴリア!!とつととその女を置いて死ぬ!! (※謎言語で喋ってます。わかりやすいように翻訳済み)』

しかも銃撃と砲撃?と意味不明な言語で喚き散らしながらなんですよね。……日本語か英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語、中国語あたりならなんとかなるんですけどね……。とりあえずこのまま撃たれつばなしなのも癪に触るのでさつ

さとタイヤ？履帯??駆動輪??を破壊し、自走不能にして終わらせたいのですけどね
 ……。

防壁に数発のロケット推進弾^{R P G}が突き刺ささって炸裂するが、防壁を貫いたり叩き割られることは無い。

??? 『くあwせdrftgyふじこlp(ry)!!』

「……一体何語なんですかね……?絶対この二人を置いていけつていう話ですが……と
 いうか、琴音提督、この人達は助けなくて大丈夫ですかね?」

龍奈 『機銃の乱射してる時点で助ける必要は無いかと。多分ベルトマガジンでも使つ
 てるんですかね……。まあ、助ける必要は無いかと。』

琴音 『前しか見てないから知らん。つーか、俺これだけピンピンしてたらほつとい
 も構わんだろ。』

武蔵 『もちろん私ができるわけなからう。当たり前だが助ける必要は無い。検討する
 必要すらないだろうな。』ドヤ顔

ずつきー『どうせアレでしょ。過激なド左のゴミ糞共が艦娘が一般市民を撃つた!と
 か騒ぎ立ててるアレ。』

龍奈 『それだと、右の過激派工作員かもしれないですよ?……まあ、過激な奴らは右

も左も過激やばいのでなんとも言えませんが。』

ずつきー『確かに…………。』

ギヤーギヤー…………ワイワイ…………

「…………なんで言語の話から主義思想の話になるんですかね…………。…すいませんお嬢さん、この言語が何語かわかりますか？できれば翻訳もお願いしたいのですが…………。」

話を聞かない脳筋馬鹿共は宛にできない…………という訳でこつちならワンチャン…………

? (くっそ甘い考え)

???『多分…………少数民族の言葉だと思えます。…………えっと、《その女どもを置いてけ馬鹿

野郎》…………っ…………絶対置いていかないでくださいね…………?…………絶対…………その…………あの

…………ヤられて…………その…………。』

無機質に近いような声の娘が的確な答えを持ってきてくれる。やっぱり適材適所ってやつですね。

大丈夫、この二人は私が護ります。さて、どうしますかね…………。

「…………そのへんは大丈夫です。そういえば名前の方を聞いてませんでしたね。」

ユリ『私は…………ハイドレンジアユリって言います…………ドレン…………もしくは…………ユリ…………って呼んでください…………。隣で寝ているのはお姉ちゃんの…………ロベリアニチハル

じ引いたかも……)

(※世界規模のトップ企業のお嬢ぐらゐの感覚でokです。)

武蔵(うっそだろおい……物凄い無礼してねえかこれ……)ギョツとした顔で龍奈を見てる

ずっきー(なーに機械、工業、科学、プログラム、情報がバランスよく出来て陣頭指揮も取れるレベルで慕われているみんなの姉貴に何今更ビビってんだ……?)↑だいた同期の人

ユリ『…え……令嬢さん……?!……それに……提督……?……艦娘……?……妖精……さん……?……皆さん、助けてくださってありがとうございます……。その……。出来ることならできるだけやるので……。その……。私……。あの村で……。その……。魔女とか……。エルフ……。とか……。って……。』

琴音『……言わなくていい。そのへんは心配すんな。日本ではそのへんは理解してる人が多い。詳細は後で詳しく話すからあとにしてくれ。ずつきー、武蔵、夜雨、龍奈、今の話は聞かなかったことにしといてくれ。……これは提督命令だ。』
 ずつきー『了解やでー。』

「了解、忘却の彼方に飛ばします。……防壁更新、再展開完了。」

龍奈『了解です。……とりあえず寒いと思うのでこの毛布被つといてください。冷えは体に悪いので。』

ユリ『……ありがとうございます……です……。』

「……このトンネル長いな……。」

後から連続した銃撃音と共に銃弾…… 12.7mmクラス……多分M2ブローニングの弾が飛んできた。

……この程度じゃ万発突き刺ささっても抜けないがシステムのリフレッシュにより余力を残しておくことによりRPGや突発的な地雷攻撃に対応することができるようにしておかないと……。

琴音『しっかし、しっこい野郎だぜ……っーか、深海棲艦じゃねえなこのしっこさは……。人型か?』

龍奈『……完全に人ですね。多分車か装甲車か何かで追っかけてきてるんですかね

……?」

武蔵『多分ジープかランクル? 案外鉄下駄履きかもな。装甲車なら軍用だな。トンネルの中だから暗くて見えん。夜雨、後ろを照らしてくれるか?』

「了か……」

琴音『ちよつと待て。あとすこしでトンネルから出る。その時にフラッシュを浴びせてやればどうだ?』

「強烈な光は航空機的にまずいかと。…航空機……あ、…飛燕隊! 聞こえる?」

爆装飛燕隊長機『感度良好、どうぞ。』

「自分たちが出たら後続に威嚇程度の投弾をお願いします。至近弾で必要十分なので、なるたけ派手にやってビビるようにお願いします。」

爆装飛燕隊長機『了解しました。』

琴音『そろそろ出るぞ! 何かに掴まっとけよ!』

爆装飛燕s『『投弾用意! いつでもどうぞ!』』

一瞬の閃光と共に光の世界に戻る。その直後、ハリウッド映画でよくある主人公達の後ろで爆発するシーンの如く波状緩降下爆撃により出入口付近の雪が消し飛ぶ。

琴音『ヒヤッホオオオオウ!! 最っ高だぜ!! 流星はアイツらの指揮下の部隊だな!』

武蔵『それなwww』

ずつきー『雪崩起きてるけど大丈夫っすかね……』

龍奈『大丈夫でしょう。というか、その程度で死んでたら人間じゃないです。』

琴音『ツシヤア！集合の高雄市までノンストップぶっ飛ばすぜ！！夜雨、後方確認！』

夜雨「……敵の追撃なーし！とりあえず燃料節約のために電気駆動に切り替えますね。コネクタ接続、給電開始。……琴音！暖房から冷房に切り替え！真夏並に暑い

……というか普通の気温に戻っただけですけど……。」

琴音『了解……ぐお、あつちい……！』

武蔵『流石棲艦性異常気象だな。春秋吹っ飛ばしての寒暖差は流石に堪える。』

ユリ『……と、とつても暑いです……。』

車内が完全に蒸し風呂になるのにそう時間はかからなかった。

――

台湾南部近海

摩耶Side

――高速接近中の航空機影あり！至急迎撃されたし！――

空母4戦艦2駆逐4重巡1軽巡1の編成にそんな一報が入ったのがついさつき。入

れてきたのはたった2機で編隊……？を組んでいる石垣島基地……いや、方位的に輸送船団の護衛艦あきつ丸に帰投中……？の謎の一式戦闘機。しかも妙に無線の感度が良い。……これこそ敵のワナか？……可能性があるとすれば中国本土かフィリピン側から出てきた陸上機か艦載機か……？わからん……。

とりあえず夜雨一行アイツらの時間稼ぎと邪魔の排除とか難しすぎる……クソっ。頭脳労働は苦手だ。ンなのは鳥海か空母か戦艦に任せるしかねえな。支援艦隊つてことで船を出してきたがここにきてそれが仇となるとはな。とりあえず誰かあたしの代わりに……

加賀「……烈風改発艦完了。続いて震電改46機、発艦を始めてください。」

赤城「迎撃隊第一陣は高度6000以上にて空中集合。第二陣は5000にて空中集合せよ。攻撃隊は2500にて集合後迂回して制空支援を！」

瑞鶴「チツ……景雲改と橘花改と同速だなんて……ッ！艦載機発艦完了、対空戦闘用意！それと並行で甲板およびカタパルト点検始め！手明きの妖精は対空戦闘の手伝いを！」

翔鶴「……ッ！このままじゃ間に合わない！私が攻撃を吸引す……」

瑞鶴「ダメよ！そんなことしたら！」

加賀「……頭に来ました。逐次発艦、急ぎなさい。」

赤城「……ッ……！」

……空母はダメだな。発艦作業でクソ忙しい。なら戦艦……長門か。そういえば第二改装（改二）になってから色んなことに手を出してたな。私は駆逐艦になるぞー！とか。アホか。

長門「摩耶、秋月、照月、初月、涼月！対空電探を作動させよ！強行突入回収隊に向かわせるな！合戦用意！空母以外陣形変更用意！戦闘機隊は準備出来次第進路変更、夜雨一行の推定位置との間に割りこめ！」

摩耶／秋月／初月／照月「りょーかいっ！」

赤城「了解致しました！」

やっぱり歴戦の戦艦はこういう時に頼りになる。

大型電探である不毛レーダー……FuMo？レーダー？……海外製のクツソ高性能の電源を入れ、電波を放って敵の挙動を探る。

……電探に反応。敵の機体にぶち当たって跳ね返って帰ってきた。

……なんであんな所に一式陸攻が居るんだよ。邪魔だっつーの……クソが！

「チツ……敵以外に電探に感6！……機種特定。一式陸攻3、護衛の戦闘機3！……邪魔くせえ。」

長門「……特定を急げ。」

赤城「了解、偵察機を一機向かわせます。瑞鶴、引き継ぎお願いします。戦闘機隊、準備完了!」

瑞鶴「了解、受けます!」

翔鶴「翔鶴から艦隊旗艦長門へ。私が囨になります。その間に離脱を!」

長門「だめだ。勝手な行動は慎め。」

???『そうだぞ。勝手な行動はするなよ。赤城、指令書通り迎撃機は貰うぜ、各機インターセプトオー!』

赤城「了解致しました。どうぞ」

……あの一式陸攻、人が乗ってる肉入りなのかよ。てか、誰が乗ってたんだ?

……ちよつと待て。今『迎撃機』つつたよな?というか、あつさり渡して大丈夫なのかよ妖怪食っちゃ寝赤城……。

「おいその一式陸攻!お前何者だ!」

???『くつくつく。天下の魔改造、梓たんだヨ☆』

……。なんか妖精が二、三人ぐらいつつこけたみたいだが大丈夫か?

「…お前かよ。…はつきり言つてキモい。」

梓提督『……相変わらず酷いな摩耶。元気か?』

「最悪にな気分だよクソが。なんで私がんな装備のテストベッドなんだよ。つーか、

ぶつつけ本番じゃねえか。」

梓「『四の五の言ってる場合じゃねーぞ???今飛んできてるのはメッサーシュミットの攻撃型新型ジェット機とシューティングスターとかいうアメ公のジェット機、そして変態^ドレシ^ルプロ^ニ串^エだ。だけどそいつらは第二波攻撃隊。第一波攻撃隊は戦闘爆撃機のワンメイクもうすり抜けられてるからまあそっちは置いとこう。言い忘れてたが第二波護衛機は爆装ムスタングだ。じゃあ、対空戦闘頑張つてね!』

「……サンキュ。今だけは感謝してやる。」
 つたく。これだから憎めねーんだよ……。

「……ちっつ。やるだけやってやるか。」

あの^夜ヤロウ^雨が見せた統率対空射撃……?! 水平線ギリギリに反応っ?!

「正面に敵艦接近! 数12!」

長門「……チッ。湧いてきやがったか……。」

加賀「……発艦完了、陣形変更可能です。」

赤城「……赤城型航空母艦の本気を……。ふふふ……。両舷20cm砲榴弾装填。目標低空機。手空きの者はエレベーターに機銃持つて集合!」

瑞鶴 「ロサ弾準備！高角砲仰角あげーっ！対空戦闘用意！」

翔鶴 「……。」

「……速力は極めて遅い……となると……。各艦、対空戦闘！途中で砲撃が来るかもだからお前ら気をつけろよな！長門！三式用意！んで意見具申、輪形陣に変更を求む！」
長門 「うむ。許可する。艦隊陣形変更、輪形陣に！……ふふふ。ビックセブンの實力を見せる時が来たか。」

しかしそんな長門の前甲板に連装二基4門の姿はない。その代わりに『三本の砲身』が付いた砲がたったひとつ付いているだけだった。

「有効射程距離まで5……4……3……。」

長門 「時限調整完了！装弾よし！陣形変更完了！三式弾、照準合わせ！編隊最先頭！一番主砲……つてえー!!」

「今っ！」

流星はロリコk……ビッグセブン。味方のインターセプトをすり抜けた敵噴進機の最先頭のやつに初弾で三発ぶちかますだけの腕はあるようだ。

「……ドンピシャ命中！編隊バラけたぜ！」

長門「これがビッグセブンの力だ。駆逐艦は私が守る。侮るなよ！」ドヤア
 ……憲兵、長門だ。後守るのはプライドにしがれ……。

—

夜雨Side

「……おうふ。」

ユリ『こ、これだと進めなさそうですね……泳ぐしか……無いですかね……？』

琴音「完全に水没してやがる。泳ぐも何もこれじゃ無理だな。」

高雄市手前の郊外の辺りから深海棲艦性地盤沈下（厳密には陸食み）の効果で海面下によりビルの上の方を残して海水に浸かっている。しかも深海棲艦性の汚染までおま
 せ付きで。

龍奈「流石に普通の大発じゃ乗らないですね……。確か15トンまでだったはずで
 すし……。」

琴音「だな。最悪投棄も考えねばならんのが痛いな。」

朝潮『……逆探に反応！周波数固定！鎮守府連合突入艦隊、突入隊所属、朝潮……………
夜雨さん、こつちです！こつちにすごい大発を持ってきました！』

「ちよ、朝潮?!大発じゃ重すぎてコイツは乗らないよ!というか、朝潮に大発は乗らな
……………」

琴音『おつこれ流れ変わるワンチャン。』

武蔵『なるほど改二丁か』

「かいにてい……………」

武蔵『前に言った第二改装の派生みたいなもんだ。』

朝潮『そういうことです。一番でかいのを（梓提督が）作って持ってきました！10
0トンまでなら大丈夫だそうです!』

琴音「流れ変わって完全勝利UC不可避、勝ったな。場所は?」

朝潮『左の橋まで回します。』

琴音「了解、助かるぜ。んじゃ、回すか」ニヤリ

武蔵『……了解、こつちは任されたぜ。』ニヤリ

……………なんか、この二人はいつも碌でもないことを考えている気がします……。

龍奈『一応大丈夫だと思います。ただ、できるだけ真っ直ぐお願いします。』

……えっ?……い、一体何をすると……もしかして崖から飛ぶとか言わないよね?

まあ、私は最悪エンジングライダーが付いているので大丈夫ですけど……流石に中身が……

朝潮『……到着です。そのまま飛んでください。』

「……え、えっ……と、飛ぶ……?」

ユリ『と、飛ぶって……』

龍奈『つしやあいつけえええ!』↑↑番ノリノリ

琴音「ヒヤツホオオオウ!!!」

ユリ『……っ……!!』

武蔵『ユリは私に掴まって。ロベリアちゃんは抱き抱えてるから大丈夫。んで夜雨はロープで引つ張ってるから安心だね!』

「おいバカ……なんで勝手に結びやがっひいいいい!!!」

飛びやがった……マジで飛びやがった……。しかも武蔵はいつの間にか私をロープに縛り付けてるし……。

まあ、重力はきつちり仕事をしているわけでした。大発に着地……いや、80トンの物体の一部として床に叩きつけられたわけですが。

海水をモ口に被りながら大発は前に進む

朝潮「浸水被害無し！全速前進！」

「……ねえ朝潮。生きてるわよね？私。」

朝潮「はい、ナイス着地です！そしてお久しぶりです。」

「……お久しぶり。……とりあえず、後は頼むわよ。」

朝潮「お任せ下さい！」

ヴェールヌイ

響『……ヴェールヌイ、支援する。そのまま直進。』

島風『尻持ちケツモチ島風、反転突撃しまーす！連装砲ちゃん！支援攻撃！』

皐月『皐月、出るよ！近接戦闘は任せて！』E。（皐月の腰に下げてるアレじゃなくて）
マジモンの刀

大鷹『直掩機……どう？』

大鷹搭載機 零戦53型妖精『制空優勢です。……それより由良の下駄履きはまだ飛んでるんです？』

由良搭載機『強風改』妖精『まだ飛んでる？……今は何機目の撃墜だ？の間違いじゃねーのかよボケエ！ちなみに4撃墜2撃破ア！クソツタレの分際が！13mmを喰らいやがれ!!』

由良搭載『甲標的』妖精『敵駆逐艦に対し雷撃をす、これを撃沈!』

由良『潜水艦によく狙って……つてえー!』

水柱が数本上がった後に油膜が浮かぶ。

……由良さん、なんでもありつてすごいじゃないですか……。

……なんというか、ここまで頼りになる同期が居ることが心強いです、私よりも練度が遥かに高いし……左薬指に銀色の輪っかが付いてるし……なんだろう、この、うん。

……悩んでも仕方が無いですよ。はあ……。

「……敵機全機撃墜!次、対艦攻撃!魚雷持ちとでかい大砲を優先して撃破してください」

—————

ロベリア said

突然の浮遊感。そして真下に叩きつけられるような衝撃で目を覚ました。かれこれ半日近く寝ていたわけだが……見慣れぬ天井。見慣れぬ人。そして謎の衝撃と大砲の

音と潮の香り? かな。 とうか、ここは何処……もしかして連れ去られた?!

ユリ「……いてて……死ぬかと思った……。」

「……ゆ、ゆり……な、何があつたの……?!」

ユリ『あ、チハル姉えおはよう。起きた?』

「お、おはよう。……って、起きたも何もここは何処なのよ! とうか、このムキムキの女の人は何?!」

琴音『後で詳しく話すからあんまり暴れないでくれ。』

……アンタ誰。とうか、勝手にここに連れてきておいて何その態度。気持ち悪い……。

武蔵「とりあえず、ざつと説明しとくぞ。私は武蔵。戦艦のな。とりあえずお前ら二人を助けに来た。んで、最終的に輸送船団かどつかに載せて日本の四国もしくは九州に上陸後、各自の判断でつて感じになるハズ。この辺は保証できん。まあ身の安全の保証は可能な限りする。」

そう言つてまた連れ去る気でしょう。隙を見て逃げ出す準備をしよう。こんなくつそ狭い所にいたくないし。

武蔵「あ、こつちが龍奈、目の前のちつこい妖精がずつきー。んで、ドライバーが琴

撃ってるって言うてたけど揺れない……音だけしか聞こえないのはなんでだろう……。

龍奈「とりあえず、これを身につけてください。アーマーポンチョです。性能でいうなら防弾チョッキとセイフティジャケット《救命胴衣》を足したようなもの、と言った方が良くもですね。そのまま服の上から羽織るだけでOKです。そしてこつちがヘルメットです。少し重たいかと思いますが命を失うよりはマシです。万が一のためにウエストポーチにサバイバルナイフのちっちゃいやつとか食料とか色々入れておきました。まあ、何も無ければそのまま入れっぱなしにしておいてください。」

ユリ「はい、んで、これはこのままでいいんですかね？」

龍奈「いえ、その紐を引かないとダメです。そう、それです。」

ユリ「はい、着れました！」

……刃物類を遠慮なく持たせてきた……?! どういうこと……自分の身は自分で守れってこと……? 反逆されたらどうすんのよ……! いや、反逆しろってk……

龍奈「これで多少のことがあれば何とかかなりです。……起きないことを祈るだけですけどね。チハルさんも着てください」

……いや、そんな奇天烈なことは……

ユリ「チーハールー？」

「え、あ、はい。……えつと、コレとこれかな？よいしよつ。」

龍奈「はい、そうです。そこに袖を通して、そう、その紐をここまで引つ張つて……」

ユリ「お姉ちゃん、ちゃんと聞いているんだね……ボーツとしてたのに。」

「当たり前よ！」

龍奈「……………まあいいわ。そのへんは後で。」

1-1-1
撤退戦 転機

夜雨 side

「……ちつ、また湧きましたね……。島風！左側のり級！」

朝潮『重巡り級からの砲撃！来ます！取舵回避！』

島風『ふふん。貴女《り級》って遅いのね！5連装酸素魚雷！行っちゃってー！』

圧縮空気の弾ける音。砲声。炸裂音。巨大な水柱にり級重巡洋艦の姿が消える。

島風『にひひ。次は？』

「えーっと、そのまま目の前のり級です！窓のところの！」

島風『りよーかいっ！いっくよー！』

小柄で金髪碧眼の美少女が海面上昇と地盤沈下によって海に飲み込まれたビルの間を右に左に駆け回り、尻の肉がかるうじて隠れる程度の最低限の衣服……所謂『ぜかましスケベ服』の裾がめくりあがるのを気にせず、体操選手の如くアクロバティックな機動で敵の照準を寄せつけない。

その少女に追従する3機の自律稼働型独立攻撃ユニット……本人は『連装砲ちゃん』と呼んでいるソレが的確に弱点を撃ち抜いて行く。

島風『おうっ！何この丸いの！上から降ってきたけど、砲艦載機？』

島風の目の前に降ってきた過去の丸型艦載機……通称『タコヤキ型』よりもはるかに大型で口から銃身が1つ垂れ下がっていた。

皐月『ならボクに任せて！電探連動式八連装型連射砲《Q・F・2ポンド40mm8連装ポンポン砲》で吹っ飛ばしてやる！』

妖精が素早く八機分の砲に弾薬をセットしコッキングレバーを引いて何時でも射撃が出来るようにした。

武蔵『艦艇なら私が消し炭にしてやろう。皐月、行け！』

皐月『くらえーっ！』

40mm8門の猛烈な弾幕。しかしそのほぼ全てを装甲で弾き返した。

しかし、砲身は垂れ下がったままで狙いをつけてない。

皐月『なっ……?!』

由良『皐月ちゃん下がって！援護します！』

14cm砲の火力を集中させながら的確に艦隊旗艦の由良が指示を飛ばす。……ちやつかり戦闘面は私に丸投げしてるが。

皐月『りよーかいっ！距離をとるよー！』

服の裾から短刀もしくは脇差サイズの銀色に鈍く光る刃物を取り出し、構えながら

ボックスステップで距離を取る。

…確か本人曰く『そういう用途の刃物では無く、身を飾る為に提督がくれた物』らしいが、提督と明石が改造したからその用途でも使えるようになった……らしい。

大鷹『その子の艦級……多分大型駆逐艦か中型軽巡洋艦だと思います！識別帳に記載がありません！新型と思われるため、用心してくださいっ！』

ヘッドホンをつけた和服の小柄な女性の肩に乗ってる妖精が自身と同じぐらいの厚みの本をただひたすらに捲り続ける。どうも本当に乗ってないらしい。

皐月『なら武蔵さんの出番だね！任せるよ！』

由良『砲撃で拘束してるうちにお願ひします。』

大鷹『…まって。右、魚雷艇接近してますっ！』

「電探にて小型艦艇捕捉。サイズは極めて小さいので気をつけてください！」

ほぼ同時だった。だが、双方気がつくのが遅れた。魚雷の最適発射点まで残り僅か。その距離を対応できる艦娘は……

「……………これ、借りるよ。」

「え……あ……」

白髪が私のを強く撫でる。気がついたら手の中に収めていた35mmCIWSが無くなり鉛玉が2つ握られているのみだった。そして島風の如く敵との距離を詰めている白髪を目で追えた時、こつちを一瞬肩越しで見た気がした。……なるほど。

『……任せて。』

「……フリー・ユーズ・モードに指定完了。弾数950。引き金を引けば撃てる。頼むわよ。」

熟練見張り員『アツチダヨ。モウチヨイシタ。ウラーツー!』

『Ypaaaaaa!!!』

日本語訛りのあるロシア語と共に機銃が薙ぎ払われると魚雷艇が三隻まとめて爆散する。的確に魚雷を撃ち抜いて誘爆させたようだ。

「X O P O M O 《ハラシヨ》……響《ヴェールヌイ》ちゃん、後で返してね。次……武蔵……それ、大丈夫?」

響『Da……了解。』

武蔵『いやー、次から次へとキリがないな。ほうれ台パン台パン!カラのチンパンキック!!』

軽巡ホ級の土手っ腹に46cm砲の徹甲弾で風穴を空け、そこに榴弾をぶち込み内部

から文字通り消し炭に破砕し、イ級後期型を握り潰して数を減らしているが、それでも新型に攻撃する余力は無い。

蹴飛ばしても消し飛ばしても数は減らないどころか増えている。

武蔵「効かん効かん！まとめて吹き飛ばしてくれるわ！長門《世紀末》とともに駆逐艦で鍛えたダブルリアット《睦月型メリーゴーランドスピンの喰らいやがれ！」

右足を前進左足を後進に切り替え猛烈にその場で駒のように回転し始める。武蔵の艦装やその周りに群がっていたイ級系統等を艦装から遠心力で引きずり下ろし、チ級の艦装の淵でぶん殴る。

リ級の首がリアットの力で本来曲がらない向きにひん曲がっていく口径は……正直グロテスクだったので目線を逸らしました。次にそのリ級を見た時には首から上が無くなった状態でくの字に折れた身体目掛けて回し蹴りを入れられてる時だったので……その……。

武蔵「KO!!!ハーっ！まとめて来いや！来ないなら私から行くぞ。喰らえ！」

……絶好調のようでは何よりです。はい。

島風「新手が来てる！ごめん、殺つちやうよ！連装砲ちゃん！自律戦闘状態！からーのー！5連装酸……キャアッ?!」

島風の目の前の空気が突然横方向に吹き飛んだ。いや、『新型』が蹴つ飛ばされていく。『新型』が居た空間にシルクハットを被った白髪のおツサン：いや、叔父様の方が近いかもしれない…。そのおツサンは海面に立ち、足についたドス黒い液体を振り落とした。

「新たな敵！重巡棲姫……いや違う……巡洋艦クラスないし巡洋戦艦クラスなのは確定ですけど……見たことないです。」

大鷹『こつちにも無いです！』

突然の攻撃に数で優る深海棲艦は明らかに動揺した。少なくとも味方を攻撃してるとの味方ではないが、艦娘側とも共闘する気は無いので敵ではない。

……その動揺もつかの間、リ級の指示でソイツに砲弾が向かう。しかし、その攻撃のことごとくが当たらない。テレポートの如く海面にワルツを奏でるステツプだが、明らかに艦娘の2倍以上早い。1歩の歩幅の問題でもあるが、それだけではない。

やつとの事で砲弾が命中するも手刀で弾き落とされて無効化された。

武蔵「…中々硬いな。さすが人型。練度が違うってか？」

武蔵がソイツの懐に潜り込んで止まる。武蔵もソイツも即時射撃が可能な状態ながら空白の間が走る。

???『……この黒汚い人形と貴様らは違うのか……ほう。……なら、こうするべきか。』

黒いマントを羽織ったソイツが武蔵を無視して仁王立ちで新型を鷲掴みにした。鏡面から右足を高々に上げ、振り下ろす動作でピッチャー第1球、振りかぶって……新型をビルに叩きつけた。

衝撃波と衝突音。飛び散る新型だった破片。数秒遅れて弾薬が爆発しビルが水面に墜ちる。

重巡棲姫と重巡り級が慌てて砲口を向けるもその砲口はソイツのはるか後方に向くばかりで意味の無い砲塔旋回を繰り返している。

島風『……速い……私より……速いつ！』

全速で水面を走る島風を軽く置き去りにする速度で敵を掴んで壁にたたきつけるソイツ。

阜月『ボクの機銃でも照準が追いつかないよ！』

阜月や島風が攻撃しようと照準を試みるも、所謂一般的な艦娘の搭載兵器類では確実に照準を振り切り切られる速度で走り回るソイツを捉えることができない。

武蔵『……ちつ。小賢しい。くらいやがれ！大和タックル！』

側面艦装を盾に進路を先読みした武蔵の全力タックルも全く意味の無い横移動に終

わる。

「……これだけ優位なのに攻撃してこない？」

……どういふこと……？つまり敵ではないが味方でもない……？

武蔵『……おい夜雨、こいつどうすればいい？』

「……とりあえず攻撃やめ。即時戦闘可能な状態で待機。深海棲艦との戦闘は継続して

！」

——

「うーん………ねえ、龍奈。この敵、見覚えはない？どう考えてもこっちのじゃないよ。」

振り切られ続ける高角砲の炸裂弾。はるか後方に線を引く機銃弾。捉えることが出来ず、沈黙を保つ主砲。

深海棲艦側の攻撃がこの状態では味方側の攻撃も全く同じことだろう。唯一対抗出来る可能性のある今の私ですら、使える武装が35mmCIWS二丁が限度。そんな状態であれを止めることはまあ、無理ですね。せめて素のこの状態の速度が出せれば……。

……速度？島風よりも早い艦艇ってこっちでは私が産まれる前からゴロゴロ居た気がする。

確か超兵器機関とか特殊な変速機関、特殊推進装置《謎の推進装置》とか……。確かにそれには普通の艦艇で挑んでぶちのめした人が居た気がした。

龍奈『……似たような感じのを見たことがあります。…厳密には知識だけですけど。』
「やっぱり？……ってなると、ここは不利だから引いた方が良さそう？」

龍奈『記憶が間違っただけならば80knot程度は軽く出せるはず。速くても100knot程度ですけどね。ただ……』

武蔵『おい冗談だと言ってくれよ。』

由良『…ひ、ひやくのつと？』

大鷹『少なくとも私たちの3倍……逃げきれないのでは……？』

「……この状態だと太刀打ち出来ないですけど、船を出せば行けそうですよね。」

龍奈『…武装とかがわかれば、ですけど可能性はゼロではないですね』

「なら、私が殿をして逃げ切るのが最適解ですよ。もつともこの艦装じゃ厳しそうですか……」

本来の砲塔が全て仮想領域に格納されて短時間なら飛行可能な高速滑空仕様なら追

いつけるが確実に撃破できるだけの火力が無い。かと言って追加装備を外すとカタログスペック通りの性能が出ない私は確実に速度不足で振り回される。

「……龍奈、HEAT-MPからにSPS《榴散弾》切り替え、射撃用意。進行方向に向かって右向け45！仰角最大！信管調整待て。」

使えるものは遠慮なく最大限惜しみなく使う。火力プラットフォームを利用した連携戦術ならまだ可能性はある。

琴音『おい、それじゃあ敵に対して反対側じゃねえか…』

龍奈『了解、アレね。』

「そゆこと。じゃ、行きますか。各員に通達。奴は深海棲艦ではないと仮定し行動する。無事な離脱を優先し、強引かつ無理な交戦は控えるように。……電探に敵味方不明機確認、極めて低速30、中速15、高速小型7！高度3000mだから多分戦爆連合！龍奈、目標変更。主砲で対空射撃。弾種そのまま近接信管、撃て！」

砲塔が進行方向とは反対側にくるりと旋回し、戦車主砲が火を噴く。

2発、3発と砲弾が炸裂するもほとんど効果が無いようだ。

「……CIWSで届くギリギリまで引き付けて……」

???『へえ……お前がそうなのか……へえ……』

キューポラの上に跨って座ってる私の目の前にそいつの顔が飛んできた。

いや、大発の縁を足場にして静止した。

獣のような荒れ狂う息遣い。野生の本能とむき出しの敵意を向けられた私は……脊髄反射でCIWSの砲身をそいつの顔面に叩き込んでいた。

???「ブベエツ?!……流石に噂の新型ちゃんだね。いい目をしてるし反応速度も充分速い。……あと痛い。』

威力は弱かったものの姿勢が崩れ、大発の縁で仰け反り、そして海に落ちる。

「……あ、なんかすいません……。」

『……この借りはそのうちお返し致します。忘れないで頂ければ幸いです』

くだらない話をしながらもソイツは空の敵からの攻撃を回避し、海の上の敵を薙ぎ払っていく。

『ヲ級に海老反りチヨークスリーパー ↓変則ジャーマン・スープレックスで海没処分ン!この私も本気を出さねばな。高角砲統率射撃を継続しながらだが行くぞ!』

……武蔵はプロセスが好きなんですかね?

1人の紳士なそいつと荒れ狂う大和魂の見せつけ合いをされてたまったもんしやない深海棲艦は航空攻撃の要請を行おうとするも、電信を叩き始めた瞬間にどちらかの餌食になるという可哀想……いえ、可哀想というよりも哀れと言うべきですかね?

……一応ソイツは敵なのか味方なのかそれとも無害な第3勢力なのか次第なんですよね……

龍奈『…記録照会完了……確実に風級。えーつと、武装からすれば候補はヴィンド級、改ヴィント級の高速巡洋戦艦……もしくは風型高速巡洋戦艦ですね。』

……てことは深海棲艦では無い？

???『おお、これはこれは。その無骨な戦闘兵器に登場されているお嬢様ですかね。ご名答でございます。ただ、私は今別途偵察任務中でしてね。この雑魚共を屠る途中なのでさっさとどいて欲しいのですよ。できれば 空飛ぶ玩具《航空機》の処理はお願いしたいですけどね。』

龍奈『取引か。夜、どうする?』

「……了解。各艦、その変態紳士と深海棲艦との交戦中止。即時離脱せよ。次、対空戦闘用意。」

???『察してくれて助かる。……次会う時は容赦しないけどね。それまで一時休戦……いや、未戦闘とさせて貰うよ。紳士淑女の諸君。』

武蔵『てめえ………チツ………まあいい。次の機会まで取っておこう。提督。私は戻るぞ。』

琴音『おう。各艦対空警戒。朝潮、飛ばせるだけ頼む。』
朝潮『了解、武蔵の乗艦を確認後出せるだけ出して戦闘海域より離脱します。』

—————

摩耶 side

五十鈴『こちら対潜警戒哨戒中の五十鈴よ。潜水艦は確認出来ず。アイオワさんを囲にしているけど引つかかってないわ。それより空襲の方はどうなの？ ほぼ全機飛ばしてみたいけど。』

長門『第一波の新型噴進機による高速機編隊は凄いだが、第二第三波の1部がそちらに向かつてる。艦隊旗艦としてアイオワ及び五十鈴の合流を指示する』

敵第一波攻撃隊による空襲は高速性を活かして、制空権に関係する『戦闘機目掛けての先制攻撃』を仕掛けることが目的で攻撃は二の次だった。その証拠にまともな爆装をしてきた機体がなく、皆噴進弾を装備していた。その点直掩機以外を先に行かせたのは

正解だったが対空砲火の切れ目を縫って攻撃され、空母が4隻とも飛行甲板に損傷（小破未満程度）を受けた。

「……電探に感あり。こいつが本体っぽいな。機数は梓提督の漸減攻撃により減ってるっぽいけどほとんど残ってやがる。……あのアホは死ぬ事は無いから大丈夫だと思うが……五十鈴、間に合いそうか？」

五十鈴『意地でも間に合わせるわよ。アイオワさん、艦隊旗艦指示で艦隊に戻るわよ。』

アイオワ『OK……イスズ、回避して！leftからtorpedo！』

五十鈴『残念だけどその攻撃は当たらないわよ。噴進爆雷発射！』

三式爆雷集中配備、そして試製投射式対潜爆雷の発射音。

少しの間が開いて海面に叩きつけられる音。

敵潜水艦を巻き込んで炸裂音。

潜水艦の魚雷は明後日の方向に進んでいったとの妖精からの報告の声。

しかし、その間にも大事な時間が刻一刻と過ぎていく。電探の表示を切り替えるともうすぐそこまで迫っている。

「……クソッ。間に合わないぜ……もうそつちまで近いぞー！」

五十鈴『チツ……対空兵装持っていないのに……やるしか無い。』



間の抜けた電子音。艤装からは流れないはずの電子音が唐突に流れた。

アイオワ『……コール確認。マヤ、そこはNo problemよ。アメリカを舐めないで。SPY RADAR START. Focus enemy aircraft. standard sparrows search systems rock on systems and: homing system active. FIRE!!!』

「……は？」

激しいノイズと共に通信機の聴覚保護用安全装置が働き一時的に回線が落ちる。

慌てて電探の表示を切り替え、アイオワ付近を拡大して……思わず2度見した。アイオワ周辺が真っ白で何も見えない。

「電探でアイオワとその影にいる五十鈴ロスト！」

1度電源を落として再起動するもアイオワの周辺での謎の煌めきが消えない。

飛翔体……………となる。ロサ弾の噴進砲?!だとするとかなり早過ぎる発射だぞ?!

敵航空機群の遙か手前で炸裂して……………?!

「アイオワが飛翔体を発射。多分対空噴進弾!かなり早すぎるぞ!」

『直援機の1部向かわせませす。…間に合え……………。』

普段冷静沈着な加賀の息が珍しく上がっている。

しかし無情にも直掩機の移動は恐ろしく遅かった。